鬼ノ神山貝塚・野山遺跡

1982年3月

七ヶ浜町教育委員会

鬼ノ神山貝塚・野山遺跡

原色図版　鬼ノ神山貝塚・野山遺跡

序

七ケ浜町は，仙台，塩釜，多賀城の各市に隣接し，太平洋，松島湾，塩釜湾と三方を海に囲まれた半島状の町です。全域が松島自然公園の区域となっております。また，海岸線の一部は特別名勝松島の指定をうけ，さながら公園都市の景観を呈しています。

町内には，史跡大木囲貝塚をはじめとして，大小種々の貝塚や遺跡が点在しておりますが，このことは，海にいだかれた豊かな七ケ浜の自然環境が，古代からそこに住む人々にとってはかけがえのない好適地であったからといえよう。

町では，このように恵まれた自然環境との調和を図りながら,「太陽と緑の町づくり」を基本テーマとして，より住みよい町づくりを推進しておりますが，その一翼を担って計画されたのがニュータウンの造成であります。これは，仙台新港後背地としての地理的な条件に加え，わが町でも仙塩都市圏の拡大化にともなう人口の増加が予測されているためで，昭和63年度の完成を目標に，面積約92ha・戸数2200戸・約8000人を対象として計画されているものです。

ニュータウンの造成にあたっては，計画区内にある遺跡の取扱いについて，事業主体である西武都市開発と協議した結果，下田堤遺跡等は緑地として保存することとし,鬼ノ神山貝塚,野山遺跡については調査を実施して記録保存をすることになり，本書刊行のはこびとなった次第です。

本書が，七ケ浜町の歴史をよりご理解いただくために，少しでも役立てられますことを念じてやみません。また，発掘調査から本書の刊行にいたるまで，ご協力とご尽力を賜わった三宅宗議，鴇田勝彦，桜井幸喜の各先生をはじめ関係各位に対し，心から感謝の意を表します。

昭和57年3月

七ケ浜町教育委員会

教育長　三　浦　作兵衛

例　　言

1. 本書は，昭和52・53年度に発掘調査を行った宮城県宮城郡七ケ浜町鬼ノ神山貝塚，ならびに野山遺跡の調査報告書である。本書をもって両年度調査の正式報告書とする。
2. 本書において，宮城県遺跡番号20043野山貝塚の名称は，所在地の地名に基づき鬼ノ神山貝塚と改称した。
3. 本書の作成に当たり，鬼ノ神山貝塚の図面整理・執筆・編集については鴇田勝彦，また野山遺跡の図面整理・執筆・編集については桜井幸喜が担当し，両名を三宅宗議が助けた。
4. 遺物の整理は，鴇田・桜井の指導の下に，宮城県古川工業高等学校郷土研究部員が行った。
5. 本書の作成にあたり，早稲田大学文学部講師金子浩昌氏より玉稿を頂き，また，次の各位より御指導と御助言を頂いた。記して謝意を表する。

   宮城県多賀城調査研究所，東北歴史資料館，宮城県教育庁文化財保護課，宮城県石巻女子高等学校教頭後藤勝彦，福井県小浜市教育委員会・大森宏，東北大学金属材料研究所。
6. 本書に使用した遺跡付近の空中写真は，西武都市開発株式会社の提供による。
7. 本書に記載した土色については，「新版標準土色帖」(小山・竹原1976)によった。

目　　次

序
例　言

Ⅰ．鬼ノ神山貝塚・野山遺跡の調査に至る経過 …… 1

Ⅱ．鬼ノ神山貝塚・野山遺跡の位置と環境 …… 3
1. 地理的環境 …… 3
2. 周辺の遺跡と歴史的環境 …… 4

鬼ノ神山貝塚

Ⅰ．調査の方法と経過 …… 9

Ⅱ．発見された遺構と遺物 …… 11
1. 貝塚と出土遺物 …… 15
2. 焼礫群および土器集積地と出土遺物 …… 21
3. 竪穴住居跡と出土遺物 …… 34
4. 溝 …… 37
5. 竪穴遺構 …… 38
6. ピット群 …… 39
7. 遺構以外からの出土遺物 …… 41

Ⅲ．考　　察 …… 47
1. 土器の年代 …… 47　　2. 遺構の年代 …… 49
3. 製塩土器について …… 52
4. 焼礫群の性格について …… 56
5. 出土鉄滓について …… 60
＜特別寄稿＞　鬼ノ神山貝塚出土の貝類 …… 金子浩昌 …… 66

Ⅳ．ま　と　め …… 70

野山遺跡　A地区

Ⅰ．調査の方法と経過 …… 73

1. 調査の方法 …… 73　2. 調査の経過 …… 73

Ⅱ．遺構の検出 …… 76

1. 基本層位 …… 76　2. 遺構 …… 76

Ⅲ．遺物 …… 92

1. 土器 …… 92

2. 剥片 …… 97

Ⅳ．考察 …… 99

1. 遺構 …… 99　2. 遺物 …… 100

3. 遺構の年代 …… 101

野山遺跡　B地区 …… 102

Ⅰ．調査の概要 …… 102

Ⅱ．試掘の結果 …… 102

A地区・B地区のまとめ …… 104

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　鬼ノ神山貝塚周辺の地形と調査区 …… 10
第３図　鬼ノ神山貝塚遺構配置図 …… 11
第４図　鬼ノ神山貝塚ａ－ａ′，ｂ－ｂ′，ｙ－ｙ′断面図 …… 13
第５図　第１貝塚（ｃ－ｃ′断面図） …… 15
第６図　第２貝塚出土土器 …… 16
第７図　第４貝塚および同貝塚わき出土土器 …… 17
第８図　第５貝塚出土土器 …… 18
第９図　焼礫郡および土器集積地平面図 …… 19
第10図　第１焼礫支群 …… 21
第11図　第２焼礫支群 …… 21
第12図　第３焼礫支群 …… 22
第13図　第４焼礫支群 …… 22
第14図　第５焼礫支群 …… 23
第15図　第５焼礫支群出土土器 …… 23
第16図　第６焼礫支群 …… 24
第17図　第７焼礫支群 …… 24
第18図　第８焼礫支群 …… 25
第19図　第９焼礫支群 …… 25
第20図　第９焼礫支群わき出土土器 …… 25
第21図　第10焼礫支群 …… 26
第22図　第11焼礫支群 …… 26
第23図　ｍ－ｍ′断面図 …… 27
第24図　ｎ－ｎ′断面図 …… 27
第25図　土地集積地出土土器 …… 29
第26図　土器集積地出土土器Ⅱ …… 30
第27図　土器集積地出土土器Ⅲ …… 31
第28図　土器集積地出土土器Ⅳ …… 32
第29図　竪穴住居跡 …… 35
第30図　竪穴住居跡出土土器 …… 36
第31図　溝　遺　構 …… 37
第32図　竪穴遺構 …… 39
第33図　ピット群 …… 40
第34図　Ａ２区第４層出土土器 …… 41
第35図　Ｂ２区第４層出土土器 …… 42
第36図　Ｃ～Ｅ区出土土器 …… 43
第37図　出土弥生土器 …… 44
第38図　出土石器 …… 44
第39図　土師器・須恵器 …… 45
第40図　緑釉陶器 …… 45
第41図　出土鉄製品・羽口 …… 46
第42図　製塩土器推定復元例（1/4） …… 52
第43図　宮城県における製塩土器出土製塩土器出土分布図 …… 53
第44図　福井県岡津遺跡４号炉跡 …… 58
第45図　福井県吉見浜遺跡Ｆ－２炉 …… 58
第46図　鉄滓の出土 …… 60
第47図　鉄滓のTiO_2／Ｔ・Ｆｅ－造滓成分／Ｔ・Ｆｅ相関図 …… 64
第48図　調査区と周辺の地形 …… 74
第49図　遺構配置図・基本層位 …… 77
第50図　土坑配置図 …… 79
第51図　土　坑　1 …… 80
第52図　土　坑　2 …… 81
第53図　土　坑　3 …… 82
第54図　土　坑　4 …… 83
第55図　土　坑　5 …… 84
第56図　土　坑　6 …… 85
第57図　土　坑　7 …… 86
第58図　土　坑　8 …… 87
第59図　土　坑　9 …… 88
第60図　縄文土器（鉢） …… 92
第61図　縄文土器（平底杯・台付小鉢） …… 93
第62図　出土土器 …… 94
第63図　出土土器 …… 95
第64図　出土土器 …… 96
第65図　製塩土器底部 …… 97
第66図　剥　片 …… 98
第67図　野山遺跡Ｂ地区遺構配置図 …… 103

表　目　次

第1表　口縁部資料による深鉢の分類 …… 47
第2表　鬼ノ神山貝塚
　　検出遺構の推定年代 …… 51
第3表　製塩炉の分類 …… 57
第4表　鉄滓の出土地区と重量 …… 60
第5表　鉄滓供試試料の調査項目 …… 61
第6表　鉄滓のX線回折 …… 61
第7表　鉄滓の化学分析結果 …… 62
第8表　各貝塚における貝類の
　　出現率表 …… 67
第9表　ピット一覧 …… 88
第10表　土坑観察表 …… 99
第11表　土坑の使用痕跡による分類 …… 100
第12表　各地区のピット数 …… 100
第13表　製塩土器(細片・底部)の
　　出土状況 …… 101

図　版　目　次

図版 1　鬼ノ神山貝塚全景
図版 2　発掘区全景・貝塚
図版 3　焼礫群Ⅰ
図版 4　焼礫群Ⅱ
図版 5　焼礫群Ⅲ
図版 6　竪穴住居他
図版 7　遺物Ⅰ　縄文土器・弥生土器
図版 8　遺物Ⅱ　縄文土器
図版 9　遺物Ⅲ　縄文土器
図版 10　遺物Ⅳ　縄文土器・弥生土器
図版 11　遺物Ⅴ　土師器・須恵器
図版 12　遺物Ⅵ　製塩土器(1)
図版 13　遺物Ⅶ　製塩土器(2)
図版 14　遺物Ⅷ
　石器・緑釉陶器・鉄器・羽口・鉄滓
図版 15　自然遺物Ⅰ　貝類
図版 16　自然遺物Ⅱ　貝類
図版 17　鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅰ
図版 18　鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅱ
図版 19　野山遺跡全景
図版 20　野山遺跡発掘区全景
図版 21　土坑Ⅰ
図版 22　土坑Ⅱ
図版 23　土坑Ⅲ・その他
図版 24　遺物　Ⅰ
図版 25　遺物　Ⅱ
図版 26　野山遺跡B地区

Ⅰ．鬼ノ神山貝塚・野山遺跡の調査に至る経過

宮城郡七ケ浜町には，国史跡大木囲貝塚をはじめ，貝塚を中心として，50余りの埋蔵文化財包蔵地があり，わが国の考古学・歴史学研究に大きく寄与している。阿川沼の北方に立地する鬼ノ神山貝塚・野山遺跡もその中の一つで，昭和47年の宮城県埋蔵文化財包蔵地調査の際，現多賀城第二中学校教頭の丹治英一氏によって発見されたものである。

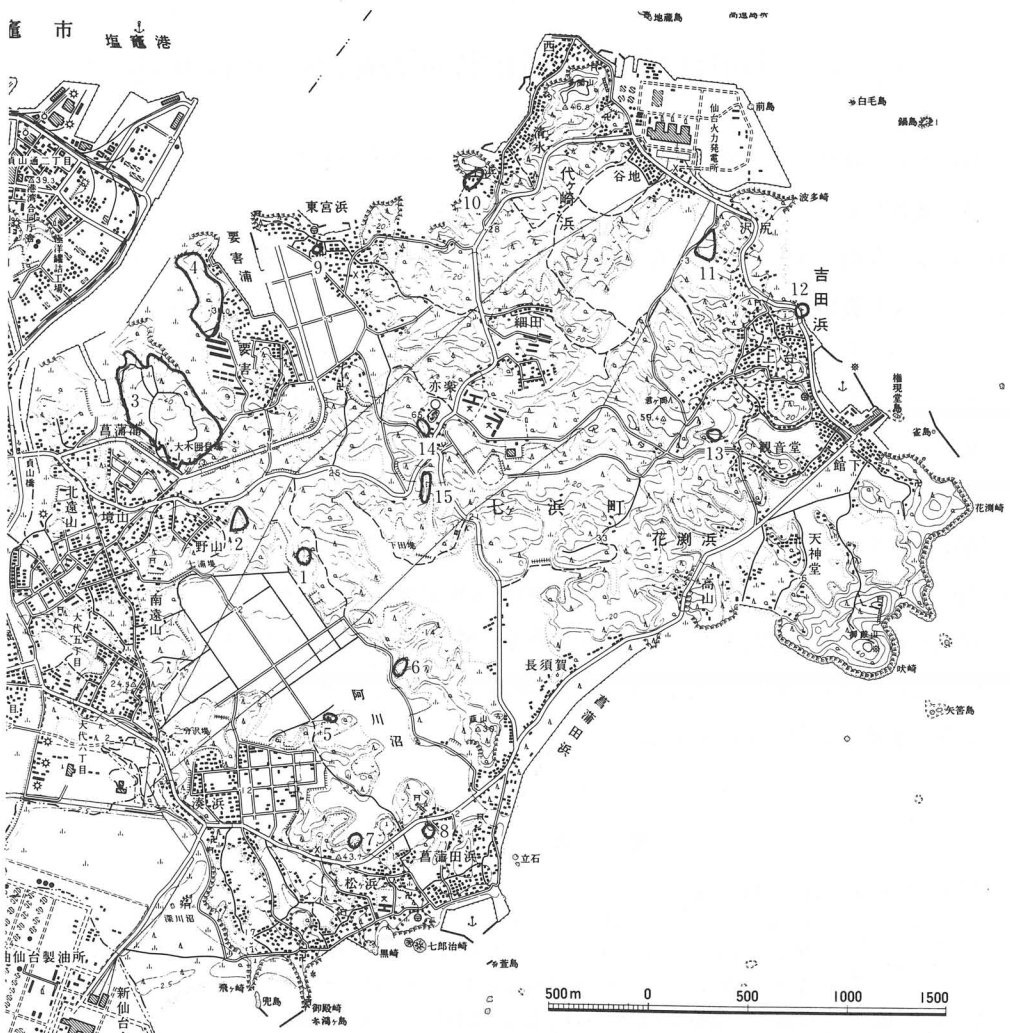
ところが，七ケ浜半島中央部から阿川沼にかけて，約92haの区域が町策定のニュータウン造成計画に入り，その区域内の下田堤遺跡や鬼ノ神山横穴古墳群とともに，上記2遺跡も消滅することになった。そこで，町教育委員会は，文化財保護の立場から，遺跡の消滅を最小限に止めるべく，事業主体である西武開発株式会社と協議の上，最終的に，鬼ノ神山貝塚と野山遺跡を事前調査して記録保存し，あとは緑地として保存することにした。

昭和52年度に入り，発掘調査を宮城県教育庁文化財保護課に要請したところ，同課より，発掘担当者として宮城県古川工業高等学校教諭三宅宗議氏の紹介があった。幸い，同氏の承諾が得られたので，昭和52年8月7日から両遺跡の調査を実施したのである。

調査の要項は下記の通りである。

調　査　要　項

遺跡の名称	鬼ノ神山貝塚	野山遺跡
所在地	宮城県宮城郡七ケ浜町菖蒲田字鬼ノ神山3-2	宮城県宮城郡七ケ浜町菖蒲田字野山8－5
調査期間	(第1次)昭和52年8月7日～8月26日 (第2次)昭和53年3月25日～4月4日	昭和52年8月7日～8月25日(A地区) 昭和53年4月1日～4月　2日(B地区)
調査主体者	宮城県宮城郡七ケ浜町教育委員会(教育長・三浦作兵衛)	
調査担当者	三宅　宗議(宮城県古川工業高等学校教諭・日本考古学協会員)	
調査員	鴇田　勝彦(宮城県古川工業高等学校教諭・日本科学史学会員) 桜井　幸喜(宮城県古川工業高等学校教員・古川市文化財保護指導員) 丹治　英一(多賀城市立多賀城第二中学校教頭・日本考古学協会員) 佐藤　信行(日本考古学協会員) 佐々木尚見(瀬峰町郷土史研究会員)	
調査補助員	門脇　裕・及川公陽・飯田幸弘・山村孝幸・大場利光・鈴木克哉・佐々木一志・米倉武浩(宮城県古川工業高等学校郷土研究部員)	
調査協力者	西武都市開発株式会社・赤間建設株式会社・株式会社鈴木工務店・鈴木安治	



1．鬼ノ神山貝塚　2．野山遺跡　3．大木囲貝塚　4．左道貝塚
5．阿賀沼貝塚　6．鬼ノ神山横穴古墳群　7．笹山貝塚　8．諏訪神社前遺跡
9．東宮貝塚　10．土浜貝塚　11．二月田貝塚　12．吉田浜貝塚
13．君ヶ岡貝塚　14．丑谷辺遺跡　15．下田堤遺跡

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

II．鬼ノ神山貝塚・野山遺跡の位置と環境

1．地理的環境

鬼ノ神山貝塚[註1)]，野山遺跡の所在する七ケ浜半島[註2)]は，海抜60ｍ以下の低平な松島丘陵が東へ張り出し，仙台湾に突き出したものである。頂面は，長期にわたる開折を受けたため緩く起伏している。丘陵の地質は中新世の凝灰岩，砂岩，シルト岩で，水平に近い互層を示している。また，松島湾，仙台湾に面した菖蒲田浜，吉田浜等の海岸地帯は，海苔の養殖や海水浴場としてよく知られている。近年は，仙台火力発電所の建設など工業化が進み，さらには，仙塩地方のベットタウンとして都市化が進行している。

鬼ノ神山貝塚　菖蒲田浜鬼ノ神山にある。七ケ浜町役場より南西約0.8ｋｍの位置である。南方に阿川沼をのぞむ二つの小さな舌状台地に挟まれて，小さな入江があり，その奥の南西側斜面に遺跡が立地している。遺跡の中央部を東西に走って，馬道と称する土手があり，土手を挟んで北が高く，南側が約0.8ｍの段差で落ち込んでいる。北側は自然の緩斜面で雑木林になっており，南側は削平されて畑地として利用されていた。また，土手の西側には矩形の凹地があり，以前，灌漑用の溜池として使用されていたといわれている。貝塚の立地する谷状斜面は，標高が２～５ｍあり，南側の水田面との比高差は１～４ｍである。

野山遺跡　菖蒲田浜野山にある。七ケ浜町役場より南西に約1.1ｋｍ，鬼ノ神山貝塚から北西に向かって約1.3ｋｍの位置である。南に広がる谷間の西斜面の比較的平坦な低地に立地しており，昭和46年頃まで畑地として利用されていた。この谷を挟んだ向い側の東斜面が野山Ｂ遺跡である。遺跡周辺の丘陵は松林におおわれており，南方には広い面積の水田が望まれる。標高は約７～10ｍあり，かつて水田であった沢の部分と遺跡との比高差は約２ｍである。

註

1) 鬼ノ神山貝塚は，『宮城県遺跡地名表』(宮城県文化財調査報告書第46集)登載番号20043の野山貝塚を正確な字名を採って鬼ノ神山貝塚と改めたものである。野山遺跡は同20046である。

2) つぎの文献を参考にした。
冨田芳郎　「地誌概説」『宮城県史』第５巻　1960　宮城県
西村嘉助　「松島湾の地形発達史」『地形図に読む歴史』第４集　1972　大明堂

2．周辺の遺跡と歴史的環境

鬼ノ神山貝塚，野山遺跡の立地する七ケ浜半島は，日本三景のひとつである特別名勝松島の指定地域にある。この地域には，松島湾に面した丘陵の縁辺や島々に，縄文時代から平安時代にかけての貝塚が大小多数分布しており，全国的に見ても稀有の貝塚密集地帯を形成している。

七ケ浜町内でも，現在まで発見されている50遺跡の中に，実に23の貝塚が含まれている。これら，貝塚を中心にした遺跡を通して，鬼ノ神山貝塚，野山遺跡が形成された歴史的背景について以下に概観してみよう。便宜的に，原始時代(旧石器時代，縄文時代)，古代(弥生時代，古墳時代，奈良・平安時代)という時代区分を用いることにする。

原始時代

旧石器時代　生産の基盤を狩猟，漁撈，採集においた旧石器時代の遺跡は，現在のところ町内からは発見されていない。

縄文時代　旧石器時代と同様，生産的基盤を自然物の獲得においていた縄文時代の遺跡は，町内で15カ所確認されている。今から約12,000～2,000年前のこの時代は，考古学上，早期，前期，中期，後期，晩期と5期に区分されている。

町内最古の遺跡は吉田浜貝塚(遺跡登載番号20008)で，沈線貝殻文を特徴とする土器(素山Ⅰ式)が出土しており，早期に位置づけられている。

前期，中期の遺跡としては，国史跡の大木囲貝塚(同20006)をはじめ，君ケ岡貝塚(同20004)，藤ケ沢貝塚(同20034)があり，現在調査中の左道貝塚(同20029)もこの時期に推定されている。中でも，松島湾に突出する丘陵台地上に立地する大木囲貝塚は，この貝塚密集地帯を代表する遺跡で，ここから出土した土器は大木式1式から10式まで13形式に分類され，東北地方南部における前・中期縄文土器編年の指標になっている。

後期，晩期の遺跡としては，林崎貝塚(同20001)，二月田貝塚(同20002)がよく知られており，その外に，阿賀沼貝塚(同20007)，沢上囲貝塚(同20027)，峯囲貝塚(同20028)，諏訪神社前遺跡(同20036)，笹山貝塚(同20037)がある。これらの遺跡からは，大洞式の縄文土器とともに，製塩に使用されたと推定されている無文粗面尖底土器が出土しており注目される。

古　代

弥生時代　弥生時代は，水稲栽培に生産基盤をおき，金属器を使用し始めた時代と理解されている。稲作農業のはじまりは，単に食生活を変えたばかりではなく，経済体制や社会のしくみを変化させ，共同体の中に階級の分化を生じさせた。この弥生文化は，紀元前後に，東日本に伝播し，定着するようになった。桝形囲貝塚(湮滅)出土の籾痕土器は当地方の稲作を

立証している。

七ケ浜町では，水浜貝塚(同20021)，笹山貝塚(同20037)，小友遺跡(同20025)など8遺跡から，弥生土器片や蛤刃石斧が採集されている。これらの遺跡は，土師器，須恵器など奈良・平安時代の遺物をも包含するものが多く，また，製塩土器片も伴出している。

古墳時代　古墳時代になると，農耕による生産力が増大して，共同体間の階級分化が進んで支配者層が出現する。そして，彼らの墓としての古墳が築造されるようになる。後半になると，より一般的な横穴墓がつくられるようになったが，この岩盤を横にくり抜いた墓は，町内で6遺跡発見されている。桝形囲横穴古墳群(同20017・湮滅)，砂山古墳群(同20045)，鬼ノ神山横穴古墳群(同20044)等である。鬼ノ神山横穴古墳群は鬼ノ神山貝塚の南東350ｍの位置にある。

奈良・平安時代　奈良・平安時代になると，この地域も律令制度に基づく政治体制に組み込まれるようになり，多賀城が陸奥の国府として設置された。国家の直接的な支配を受けることになったのである。この時代の貝塚として，清水貝塚(同20031)，土浜貝塚(同20023)などがあるが，いずれも製塩土器を伴出している。しかし，住居跡を中心とした集落遺跡は，現在のところ未発見である。

さらに，丑谷部遺跡(同20026)，下田堤遺跡(同20042)から鉄滓が発見されている。年代は不明だが，製鉄遺跡の存在が推定される。この地域における生産活動を考える際，製塩遺跡とともに注目に値する。

鬼ノ神山貝塚

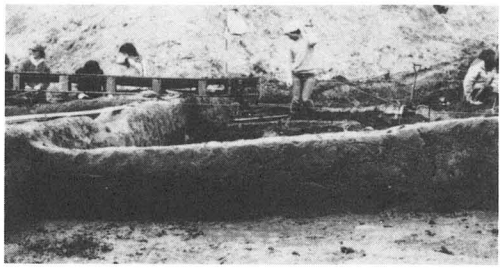
Ⅰ．調査の方法と経過

鬼ノ神山貝塚の発掘調査はグリット方式を採用した。グリッドの設定は，予備調査で貝層が発見された土手の東辺を原点として，土手にほぼ沿うように東西軸を定め，それに直交する南北軸を設定した。南北軸はＮ13°Ｅである。これを基準に調査区全体に３ｍ四方のグリッドを設定した。グリッドには，東西をアルファベット，南北をアラビア数字でグリッド名を付した。当初はＡ～Ｆ，１～４の24区を調査対象としたが，住居跡・溝・焼礫群などの遺構や貝層・遺物包含層がつぎつぎと検出されたため，順次拡張し，最終的には約400㎡を調査した。それに伴い調査期間も延長され，翌年第２次調査を実施した。

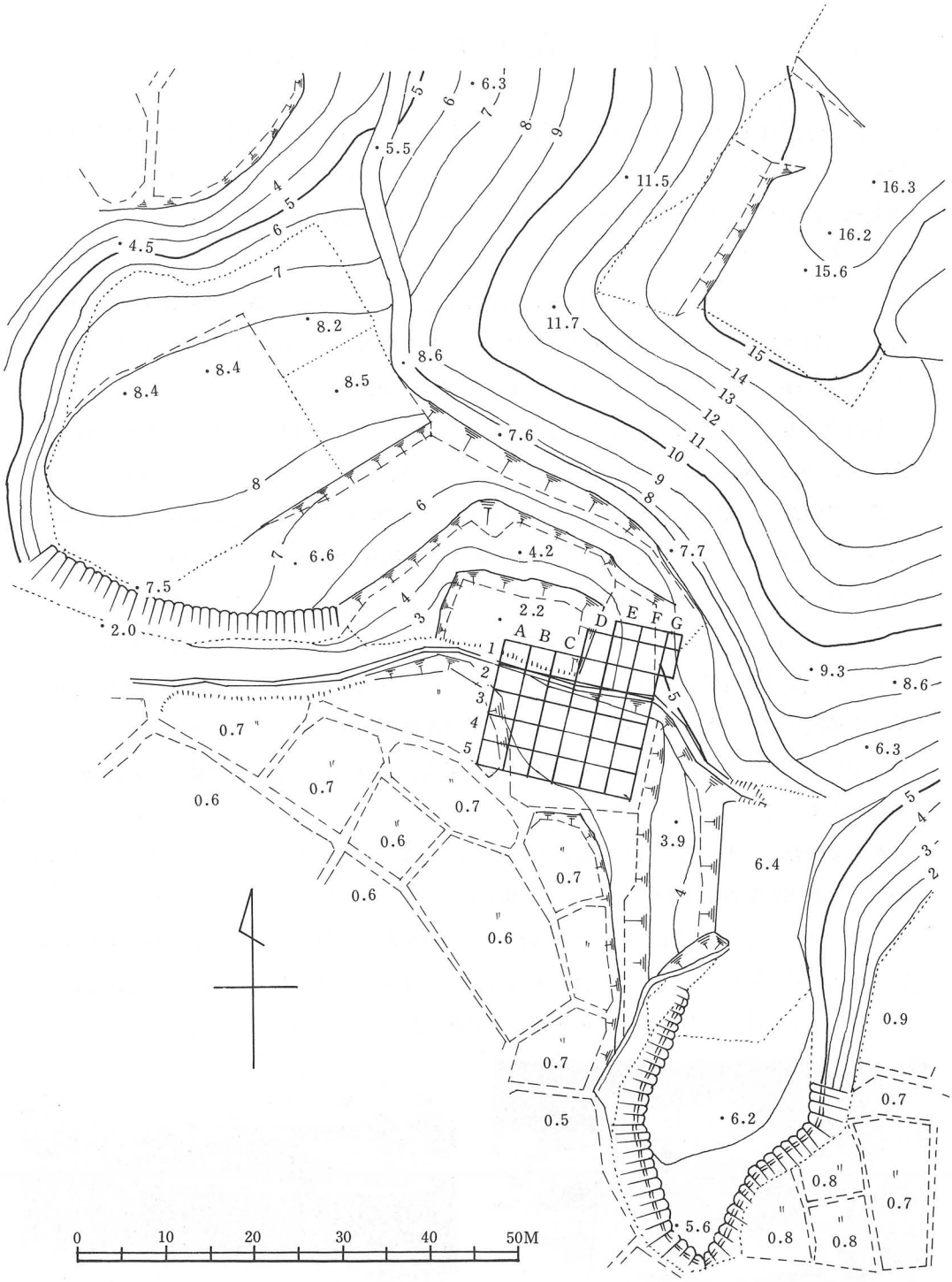
各遺構は遣り方測量法で実測して1/10の図面を作成し，地形図は事業主体である西武都市開発Ｋ．Ｋ．作成の縮尺1/500地形図を用いた。また，貝層はブロックサンプリングを行った。

第１次調査　昭和52年８月７日から25日まで，期間の1/3が雨という悪条件の中で実施した。色々な条件から，Ａ2～Ｆ２例・Ｅ１～Ｅ４例を第３層まで試掘をした。Ｅ３～Ｅ４はかなり削平されており,すぐ地山で遺構はなかった。Ｅ１に住居跡と推定されるものが検出されたので,Ａ2～Ｆ２とＤ１，Ｅ１，Ｆ１にＤ０，Ｅ０，Ｆ０を追加した。さらに遺構の関係から,Ｅ，Ｆ，Ｇ,Ｇ0と拡張した。実発掘面積は約140～150㎡である。その結果，貝塚３，竪穴住居跡１，焼礫群１が検出された。しかし，貝塚の掘り下げや焼礫群の範囲の確認等，未調査の部分が残った。29～30日，県教育庁文化財保護課技師丹羽茂氏と調査員とで，住居跡を中心に図面の補足修正をした。

第２次調査　未調査の貝塚・焼礫群を中心に，昭和53年３月25日～４月４日の11日間実施した。前回の精査未了18グリッドに，新たに15グリッドを加え，調査区域は33グリッド，391㎡となった。その結果，新たに貝塚が２，焼礫支群が10検出されたほか，製塩土器片の集積地が発見された。その成果を公開するため，４月４日現地説明会を行ない，翌日調査を完了した。その後，５月10日まで補充調査を実施した。



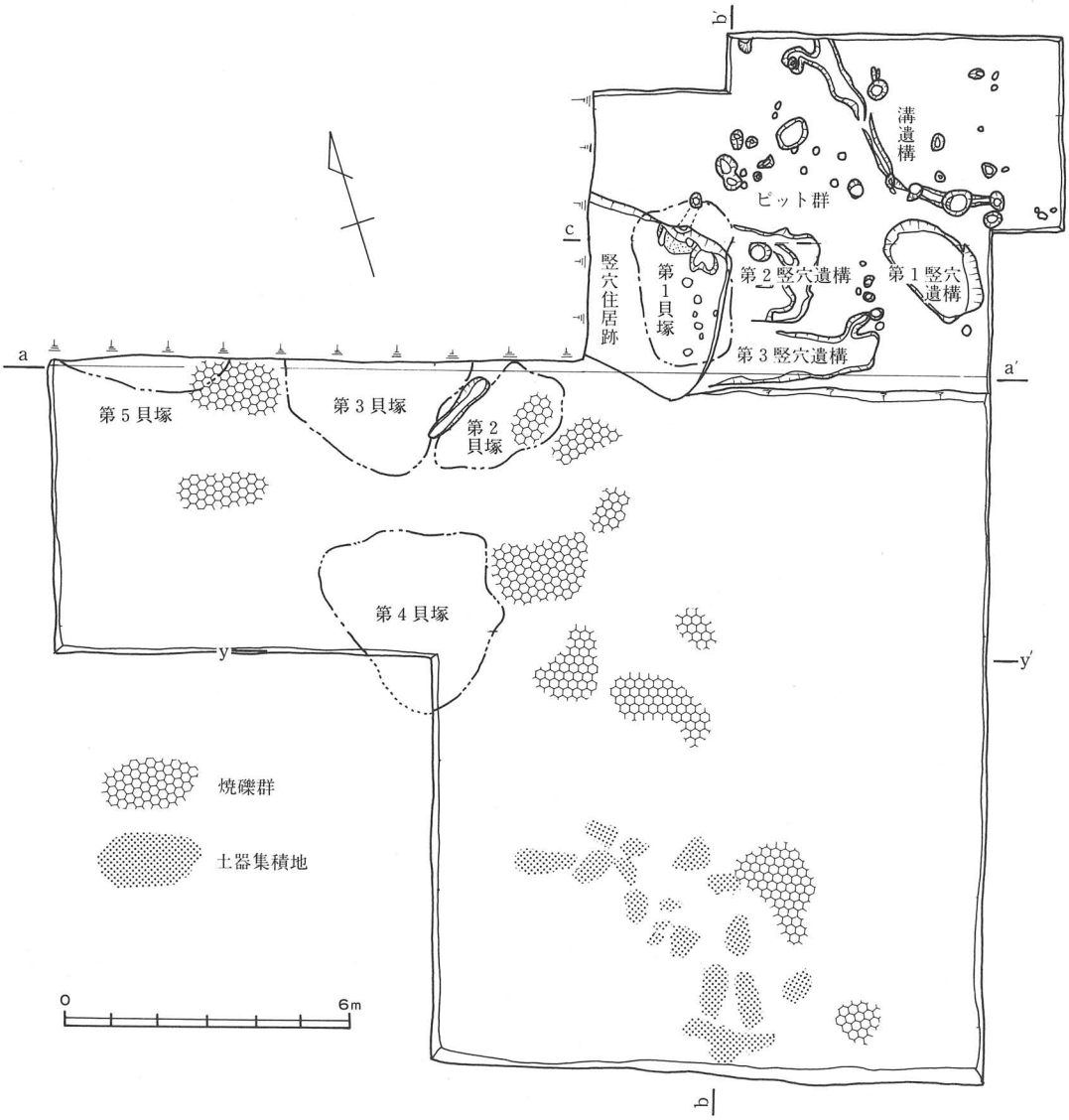
発　掘　風　景



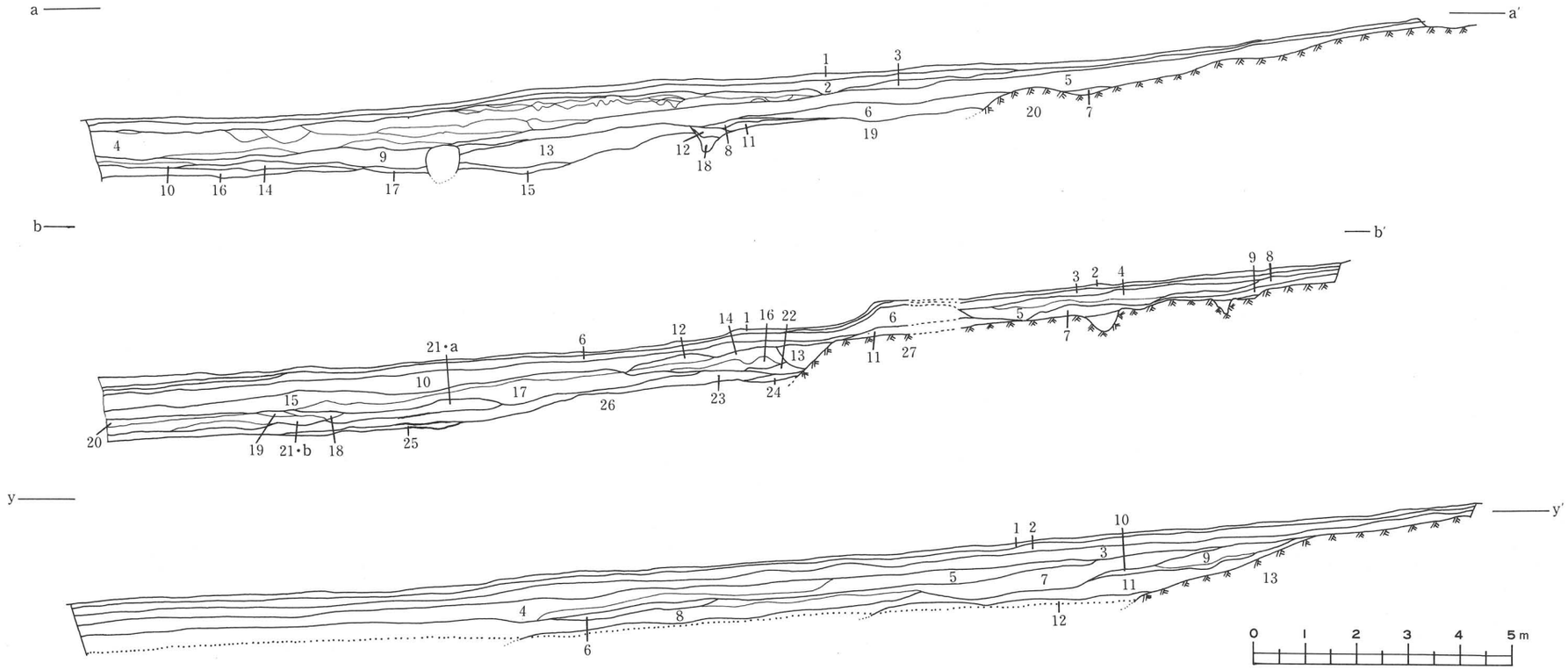
第2図　鬼ノ神山貝塚周辺の地形と調査区

II. 発見された遺構と遺物

今回の調査によって貝塚5，焼礫支群11，竪穴住居跡1軒のほか，多数のピット群，溝状遺構などの遺構が検出された。これらの遺構や包含層からは，縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などの土器類や石器のほか，貝類などの自然遺物が出土した。また，鉄生産にかかわると推定される羽口，鉄滓も発見された。



第3図　鬼ノ神山貝塚遺構配置図



挿図番号	層No.	土色	土質	備考
第4図	1	7.5YR 4/4（褐色）	シルト	（表土）
	2	7.5YR 4/6	シルト	
	3	10YR 3/4（暗褐色）	シルト	見少し混入
	4		撹乱層	粘土塊・貝混り層混入
	5	10YR 4/3（暗褐色）	シルト	黄・灰・白の斑混り・硬い
	6	7.5YR 3/2（黒褐色）	粘土質シルト	
	7	7.5YR 3/2（黒褐色）	粘土質シルト	
	8	10YR 3/3（黒褐色）	砂質シルト	
	9	10YR 3/3（黒褐色）	シルト	
	10	7.5YR 3/4（暗褐色）	シルト	

挿図番号	層No.	土色	土質	備考
第4図	11	7.5YR 3/2（黒褐色）	混土貝層	（第2貝塚）
	12	10YR 2/3（黒褐色）	シルト	
	13		純貝層	（第3貝塚）
	14	7.5YR 2/1（黒色）	混土貝層	（第5貝塚）
	15	10YR 2/1（黒褐色）	粘土質細砂	灰，赤色土器片混入
	16	7.5YR 2/1（黒色）	粘土質細砂	焼礫混入
	17	7.5YR 2/1（黒色）	灰層に焼礫群	（第11焼礫支群）
	18	10YR 3/2（暗褐色）	シルト	溝内堆積層
	19	10YR 3/3（暗褐色）	細砂	
	20	10YR 6/6（明黄褐色）		（地山）

挿図番号	層No.	土色	土質	備考
第4図	1	7.5YR 4/4（褐色）	シルト	（表土）
	2	7.5YR 4/6	シルト	
	3	10YR 3/4（暗褐色）	シルト	貝少し混入
	4	7.5YR 4/3（暗褐色）	混貝土層	
	5	7.5YR 3/2（黒褐色）	混土貝層	（第1貝塚）
	6	10YR 4/3（暗褐色）	シルト	黄・灰・白の斑混り・硬い
	7	10YR 4/3（褐色）	撹乱層	
	8	7.5YR 4/4（褐色）	シルト	硬い
	9	10YR 4/4（褐色）	砂質シルト	さらさらしている
	10	10YR 4/3（暗褐色）	シルト	赤い土器片少し混入
	11	7.5YR 2/2（黒褐色）	粘土質シルト	
	12	10YR 3/3		黄の斑混り
	13	10YR 2/3（黒褐色）	撹乱層	土塊混入
	14	10YR 5/6	撹乱層	

挿図番号	層No.	土色	土質	備考
第4図	15	10YR 2/2（黒褐色）	シルト	
	16	10YR 3/2（黒褐色）	砂質シルト	赤い土器細片少し混入
	17	10YR 2/1（黒色）	粘土質中砂	
	18	7.5YR 1.5/1（黒色）	粘土質中砂	
	19	10YR 2/2（黒褐色）	中砂	黄の斑混り
	20	7.5YR 2/1（黒色）	粘土質砂	粘りあり
	21・a	10YR 3/1	細砂	黄の斑混り
	21・b	10YR 3/1	細砂	黄の斑混りなし
	22	10YR 3/2	粘土質細砂	
	23	7.5YR 3/4（暗褐色）	細砂	赤色土器片混入16より多し
	24	10YR 5/4	細砂	黄の斑混り
	25	7.5YR 2/1（黒色）	粘土質細砂	赤色土器片混入多し
	26	7.5YR 2/1（黒色）	細砂	
	27	10YR 6/6（明黄褐色）		（地山）

挿図番号	層No.	土色	土質	備考
第4図	1	7.5YR 4/4（褐色）	シルト	（表土）
	2	10YR 4/3（暗褐色）	シルト	黄・灰・白の斑混り
	3	10YR 4/3（暗褐色）	シルト	赤色土器片少し混入
	4	10YR 2/3（黒褐色）	シルト	黄・赤・灰の斑入り
	5	10YR 2/2（黒褐色）	シルト	
	6	7.5YR 3/2（黒褐色）	混土貝層	（第4貝塚）
	7	10YR 2/1（黒色）	粘土質中砂	
	8	7.5YR 2/1（黒色）	粘土質細砂	粘りあり
	9	7.5YR 3/3（暗褐色）	砂質シルト	黄・白・赤の斑入り，硬い
	10	7.5YR 3/4（暗褐色）	砂質シルト	粘りあり
	11	7.5YR 3/4（暗褐色）	細砂	赤色土器片混入多し
	12	7.5YR 2/1（黒色）	細砂	
	13	10YR 6/6（明黄褐色）		（地山）

第4図　鬼ノ神山貝塚 a－a′，b－b′，y－y′断面図

1．貝塚と出土遺跡

第 1 貝 塚

D 1～E 1区にある。b－b′断面図(第4図)，c－c′断面図(第5図)によって，第1貝塚を含む層の堆積状態をみてみる。層序は地山，竪穴住居跡の堆積層(8，7)，粘土質シルトの埋土層(6)，混土貝層(5)，混貝土層(4)，そして堆積層(3，2)の順に形成されているのがわかる。この5，4の層が第1貝塚である。つまり，第1貝塚は竪穴住居廃棄後の盛り土を掘り込んでつくられており，住居跡より新しいものである。

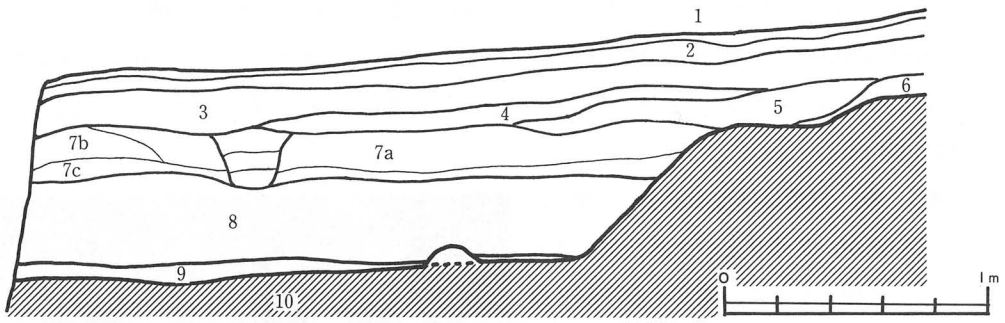
貝層は地山の傾斜にほぼ沿って堆積している。平面形が約 4.3 m× 3.0 mの隅丸方形に貝が分布している。最大厚 30 cmの皿状の断面を呈する比較的小さな貝塚である。

〔遺　物〕 アサリが主体の貝塚で，ハマグリ，シオフキも含む。土師器細片2点とともに，大小多数の鉄滓が混入していた。

第 2 貝 塚(図版2)

a－a′断面図(第4図)で明らかなように，地山はD区で急に落ち込む。A～C区では，暗褐色の砂質シルト層(17)の上に第2，第3，第5貝塚および焼礫群が検出された。

第2貝塚，第3貝塚は，第2貝塚直上の黒褐色シルト層(7)が第3貝塚へ続いていたため，発掘途中では同一貝塚と見なされたが，調査が進むと溝状遺構によって分かれていることが判明した。



挿図番号	層 No.	土　色	土　質	備　考	挿図番号	層 No.	土　色	土　質	備　考
第5図	1	褐　色(7.5YR 4/4)	(表　土)		第5図	7a	暗 褐 色(7.5YR 4/3)	粘土質シルト	7a～7c 撹乱層
	2	褐　色(7.5YR 4/6)	シ ル ト			7b	褐　色 (10YR 4/4)	砂質シルト	
	3	暗 褐 色 (10YR 3/3)	シ ル ト	硬い。貝の細片混入。		7c	暗 褐 色(7.5YR 4/3)	砂質シルト	2.5 Y 5/4 の粘土がブロックで
	4	暗 褐 色(7.5YR 4/3)	シ ル ト	黄橙の斑入り。		8	暗 褐 色(7.5YR 4/3)	砂質シルト	均一できれいな層
	5	黒 褐 色(7.5YR 3/2)	混 土 貝 層	(第1貝塚)		9	褐　色(7.5YR 5/4)	シ ル ト	貼り床層
	6	褐　色 (10YR 4/4)	シ ル ト			10	暗黄褐色(7.5YR 6/6)	(地　山)	

第5図　第 1 貝 塚(C－C′断面図)

挿図番号	土器番号	出土地区	器種	部位	法量（cm）					調整		色調		図版番号	備考
		地区－層位			器高	口径	最大径	底径	器厚	内面	外面	内面	外面		
第6図	1	第2貝塚	鉢	胴部	－	－	－	－	0.4	ヨコナデ	縄文	灰黄褐色	にぶい黄橙色		

第2貝塚の平面形は，3m×1.7m規模の卵形で，貝層は南西方向に傾斜して堆積している。最大厚16cmで，下方にやや厚い小さな貝塚である。

〔遺　物〕第2貝塚は，アサリを主体としてマガキ等を含む貝塚である。縄文土器片1点（第6図）が出土している。

第6図　第2貝塚出土土器

第　3　貝　塚（図版2）

発掘区内でもっとも大きく，しかも純貝層からなる貝塚である。貝層は，北側を溜池で，西側を溜池からの排水孔で切られていて，実際の規模は不明である。貝層は最も厚いところで30cmを超える。第3貝塚の貝層は，第2貝塚と同じように，南西方向に傾斜して堆積している。

〔遺　物〕アサリを主体とした貝塚で，ハマグリ，シオフキを含むが，貝類以外の自然遺物は発見されなかった。貝層中より人工遺物は出土しなかったが，下層の黒色砂質シルト層(13)は，薄い炭化物層を含み，また，製塩土器片と考えられる赤色の粗製土器細片が出土した。

第　4　貝　塚

y－y′断面図（第4図）で，第4貝塚を含む層の堆積状態をみよう。地山（XⅢ）はE区で急に落ち込み，B4～D4区では，砂層と砂質シルト層が堆積している。

第4貝塚は，黒色砂質シルト層（$Ⅵ_a$，$Ⅵ_b$）を浅く掘り込み，その中に形成され，その上に黒褐色の砂質シルト層（$Ⅳ_a$，$Ⅳ_b$）が堆積している。貝層は，平面形2.3m×1.7mの西洋梨形に分布している。最大厚さ10cmという全体的に浅い，規模の小さな混土貝層で，ほぼ水平に堆積している。

〔遺　物〕貝類はほとんど全てが破砕されていたが，アサリとハマグリが主体である。焼礫とともに，縄文土器片が2点（第7図2，3）出土した。さらに，貝塚のわき（B2～B3区$Ⅵ_a$層）から，深鉢（同4），小鉢（同5）および，深鉢の胴部破片2点（同6，7），底部破片1点（同8）が出土したので，合せて図示しておく。

土器の出土状況（第4貝塚わき）

挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量（cm） 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第7図	2	第4貝塚		胴部	－	－	－	－	0.4	ナデ	縄文	にぶい橙色	黒褐色		
	3	第4貝塚		胴部	－	－	－	－	0.4	ナデ	縄文	にぶい黄橙色	黒褐色		
	4	B2－4 第4貝塚わき	深鉢	・	27.0	23.6	24.2	7.0	0.6	ヘラミガキ	縄文	褐灰色	灰褐色	7－1	部分的に強い結び文
	5	B2－4 第4貝塚わき	小鉢	・	－	－	13.7	4.6	0.4	ヘラナデ	格子状沈線	黄褐色	明赤褐色	7－4	
	6	B2・B3－4 第4貝塚わき	鉢	胴部	－	－	－	－	0.5	ナデ	縄文	にぶい黄橙色	褐色		
	7	B2・B3－4 第4貝塚わき		胴部	－	－	－	－	0.7	ヨコナデ	縄文	にぶい黄橙色	灰褐色		
	8	B2・B3－4 第4貝塚わき		底部	－	－	－	－	0.5	ナデ	縄文：ヘラで磨消後ミガキ	にぶい褐色	縄文部：橙色 底部：黒褐色		底厚0.9 cm

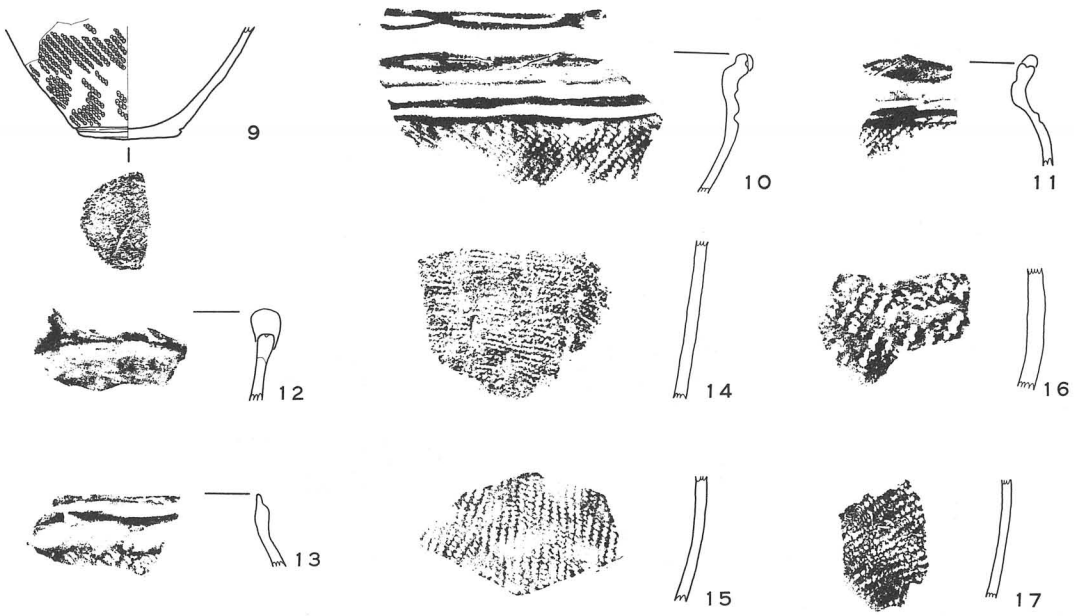
第7図　第4貝塚および同貝塚わき出土土器

第 5 貝 塚

第２，第３貝塚と同じく，暗褐色の砂質シルト層(第４図ａ－ａ′ 断面図 17層)の上に検出された。溜池で切られていて，その規模・平面形とも不明である。

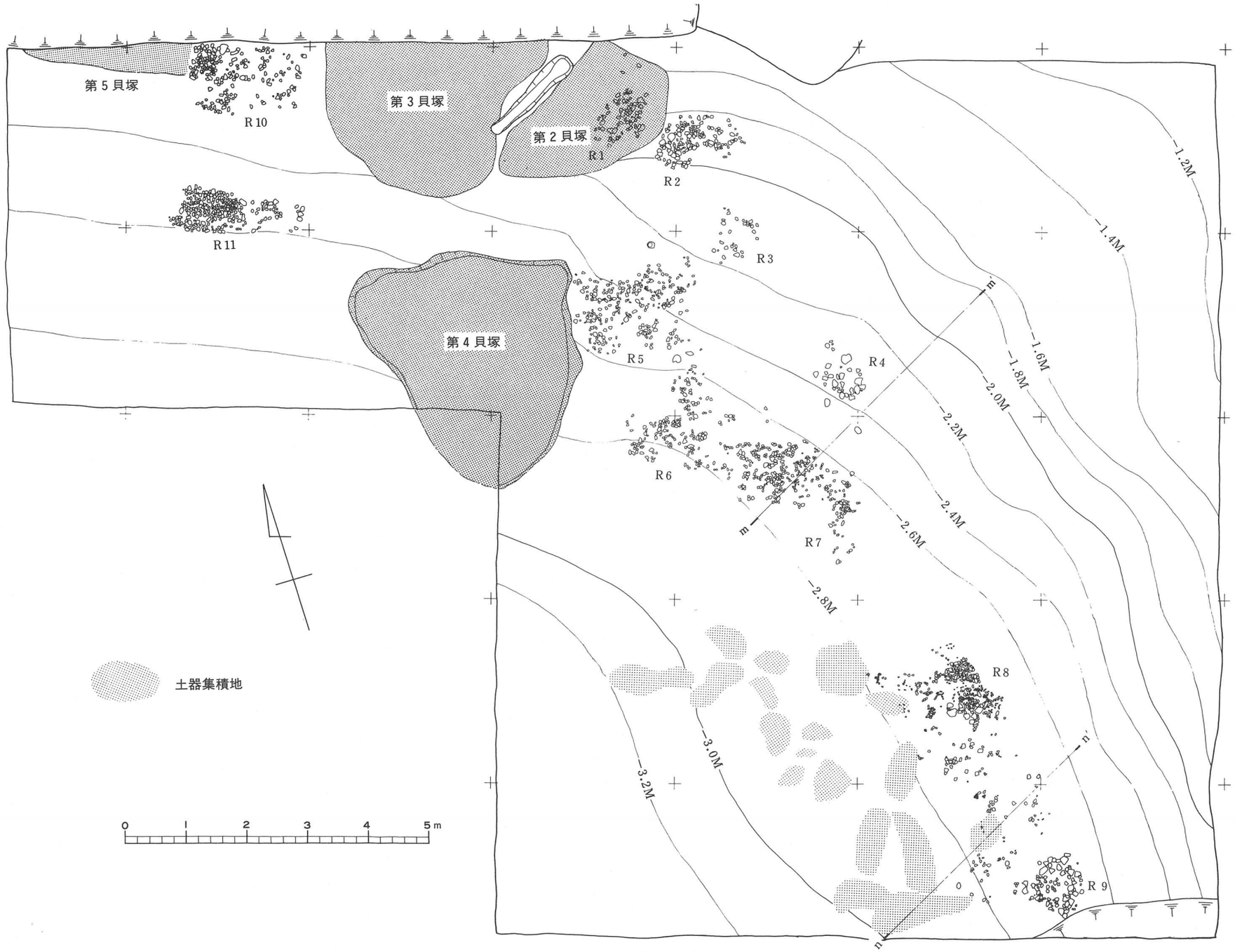
貝層の厚さは 15cm前後で，第２，第３貝塚と同じように，南西方向に傾斜している。層序から，第２，第３貝塚とほぼ同年代に形成されたものと推定される。

〔遺　物〕 貝類は破砕されたものが多く保存状態は良くない。ハマグリを主体としているが，ついで，アサリが多い。貝類以外の自然遺物は発見されなかった。貝層から，縄文土器の破片が９点出土した(第８図)。小鉢の底部が１点と，鉢形土器の口縁部４点，同胴部破片が４点である。



挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第8図	9	第５貝塚	小鉢	底部	－	－	－	4.0	0.4	ヘラミガキ(タテ)	縄文	黒褐色	黒褐色		
	10	第５貝塚	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.4	ヘラミガキ	縄文	にぶい橙色	黒色		口唇部に小さな突起ありその間に沈線
	11	第５貝塚	小鉢	口縁部	－	－	－	－	0.3	ヘラミガキ	縄文	黒色	黒褐色		口唇面に沈線あり
	12	第５貝塚	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.4	ヨコナデ	ヘラミガキ	橙色	橙色		口唇面に沈線あり
	13	第５貝塚	浅鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	ヨコナデ	縄文	黒褐色	灰褐色		
	14	第５貝塚	鉢	胴部	－	－	－	－	0.4	ミガキ	撚糸文	灰黄褐色	にぶい黄橙色		
	15	第５貝塚	深鉢	胴部	－	－	－	－	0.4	ヘラミガキ	縄文	黒褐色	灰黄褐色		
	16	第５貝塚	鉢	胴部	－	－	－	－	0.6	ナデ	縄文	灰褐色	黒褐色		
	17	第５貝塚	鉢	胴部	－	－	－	－	0.5	ミガキ	縄文	褐灰色	明赤褐色		

第8図　第５貝塚出土土器



第9図　焼礫郡および土器集積地平面図

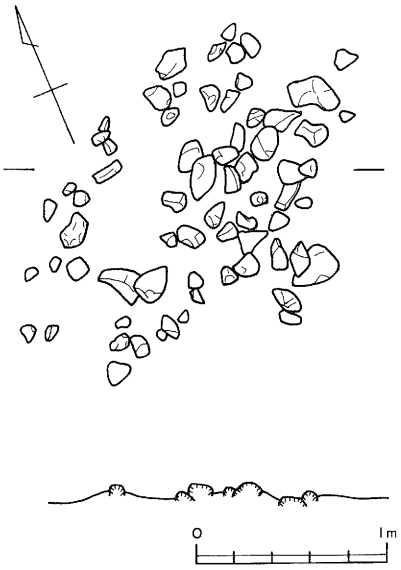
2．焼礫群および土器集積地と出土遺物

鬼ノ神山貝塚から，大きさの異なる角礫・円礫が多数出土した。これらの礫はいずれも火熱を受けて赤色を呈していた。平面観察によって，それらの礫にあるまとまりが見られたので，焼礫群と呼ぶことにした。焼礫群は，汀線に沿う形で入江を包み込むように半環状に分布している。まとまり毎に11支群に分けることができる（第9図）。ここでは，発見された順に番号をつけ，便宜的にＲ１～Ｒ11と名づける。

また，Ｄ５区を中心にして，焼礫群の下方に，製塩土器と推定される赤色の土器片が，びっしりと固まった状態で検出された。土器集積地と呼んでおく。

第１焼礫支群Ｒ1（第10図，図版４上）

Ｃ２区第５層で確認された。はじめ，捨てられた礫か流れ込みの礫の集まりと思われたが，調査が進むに従い，何かの目的で配石されたものと考えるに至った。第２貝塚の上を土で固め，その東端にかかる位置を数cm掘り込んで，4～5 cm 大の比較的粒ぞろいの礫を敷いている。角礫が主であるが，円礫も含まれている。礫はいずれも火熱を受けており，割れているものが多い。



第10図　第１焼礫支群

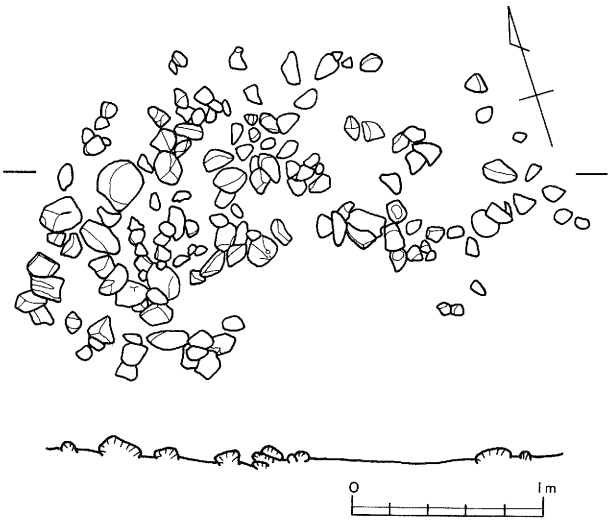
平面形が1.0ｍ×0.6ｍの楕円形をした比較的小さなものである。

礫の間から，製塩土器の細かい破片が小量検出された。

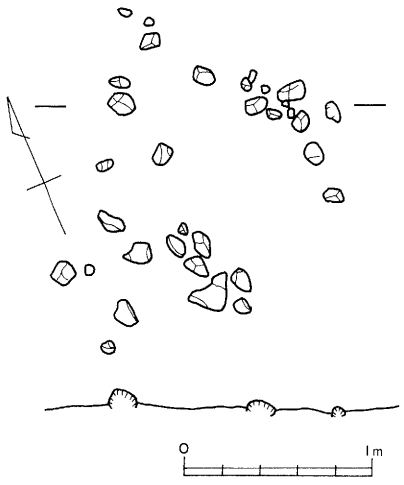
第２焼礫支群Ｒ2（第11図，図版４中）

Ｒ1の基底となる貝層（第２貝塚）を取り除いたら，薄い黒色土層があらわれたが，それと同じ層のＣ2～Ｄ2区から，新たに礫群が検出された。礫は５～10 cm大で，Ｒ１の礫同様赤く焼けており，割れ石が多い。

礫の間には，炭化物を含む黒色土が３



第11図　第２焼礫支群



第12図　第 3 焼 礫 支 群

～7 cmの厚さで堆積しており，その範囲は礫群の範囲よりやや広く1.7m²程度である。

その黒色土中に，赤色をした微細な土器片が散見された。

第 3 焼礫支群 R 3(第12図)

R2の南側D2～D3区にあり，R2と同じ層で確認された。礫は5 cm前後の大きさで円礫が多い。礫の数は少なくまばらに並んでいた。礫はやはり赤く焼けている。

礫の間にはR2と同じように炭化物混りの黒色土が堆積しているが，微細な土器片がわずかに見られた以外，遺物は発見されていない。

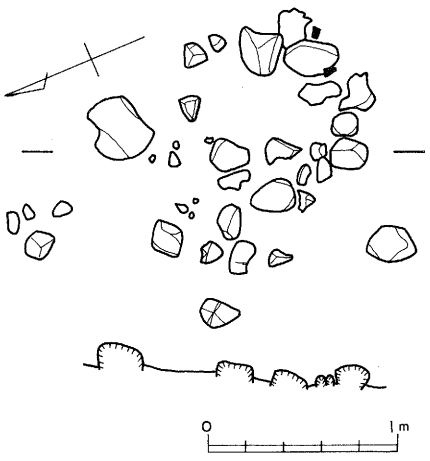
第 4 焼礫支群 R 4(第13図，図版4下)

D3区の南コーナーに位置しており，第4層で確認された。20 cm角の比較的大きな石も入っており，円礫の一部欠けたものを中心に，あるまとまりをもつ礫群である。礫はかなり強く火熱を受けたのか，脆くボロボロになったものもある。南方向にゆるやかに傾斜している。

礫の間には炭化物混りの黒色の砂質シルトが2～3 cmの厚さで堆積していた。縄文土器片が2点出土した。

第 5 焼礫支群 R 5(第14図，図版5上)

C3区中央,第4層で確認され，第4貝塚と並ぶ状態で検出された。3～5 cm大の小さな礫が多数検出されたが，平面形は不整形であって，意識的に配置されたものか，移動してきたものかどうかは不明である。

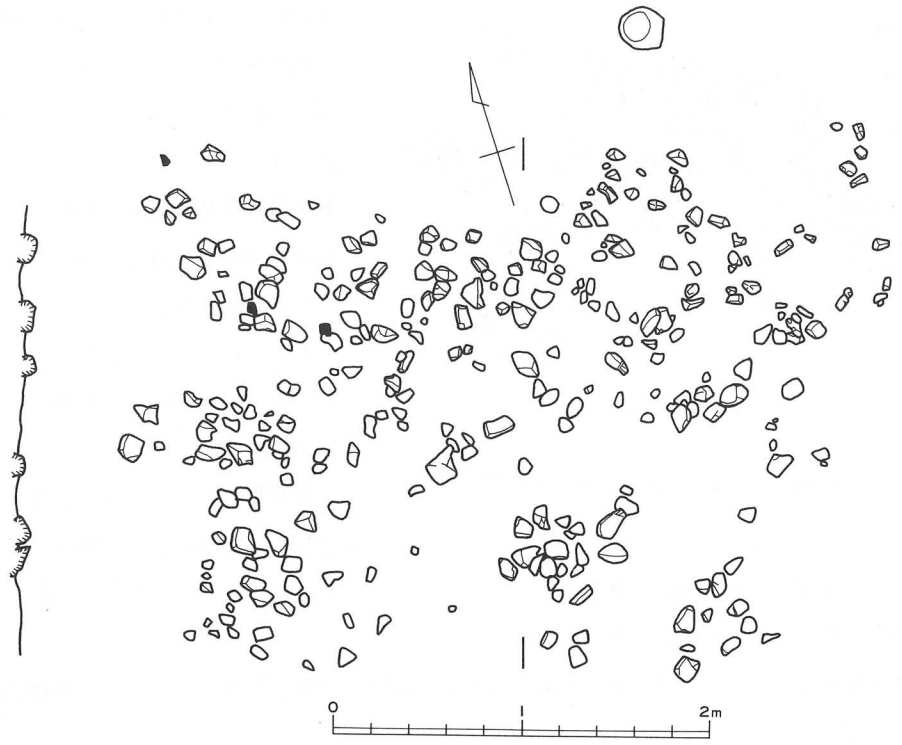


第13図　第 4 焼 礫 支 群

礫の間から炭化物混りの黒色砂質シルト層が検出されたが，赤色の土器細片が混入していた。

C2区寄りから，深鉢形土器片が底部を上にした形で出土した。また，礫の間から，縄文土器片が3点出土した。

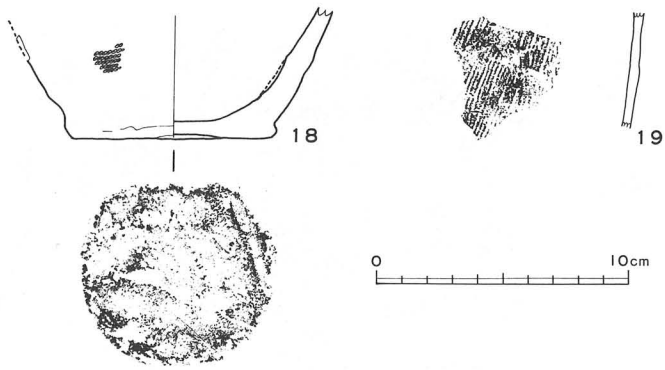
深鉢形土器の底部(第15図18)は，外面が火熱を受けて赤色化しており，一部剥離している。内面は火熱による焼けの痕跡が見られない。底面は荒くヘラ



第14図　第 5 焼 礫 支 群

ケズリされている。細かい縄文が施されている。胎土は細かい。

縄文土器片(同19)は鉢形土器の胴部と考えられる。撚糸文が施されている。胎土は石英混りであるが細かい。

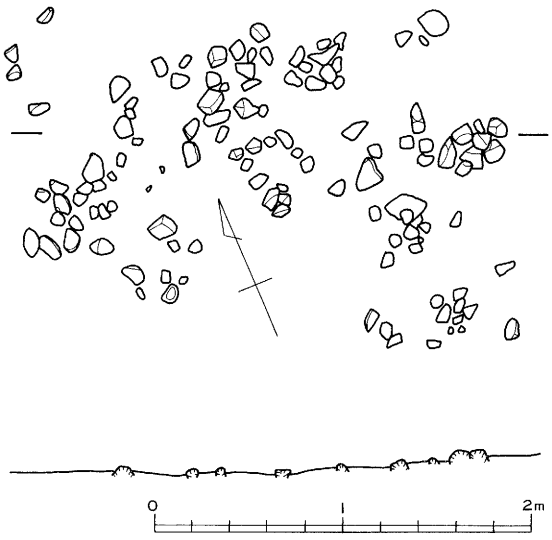


第 6 焼礫支群 R 6(第 16図)

Ｃ４区・Ｄ４区の境を中心として分布している。第４層で確認された。3～5 cmの小さな角礫が多い。すき間が多く，意図して配石されたのか，移動したものか判明しない。礫は火熱を受けて赤色を呈している。

挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第15図	18	Ｃ2－Ｒ5わき	深鉢	底部	－	－	－	7.8	0.6	ヘラミガキ(タテ)	縄文 ヘラケズリ	にぶい黄褐色	明赤褐色	8－4	火熱を受け，一部剝離
	19	Ｒ5		胴部	－	－	－	－	0.3	ヨコナデ	撚糸文	橙色	灰褐色		

第15図　第 5 焼礫支群出土土器



第16図　第 6 焼 礫 支 群

礫の間から炭化物混りの黒色砂質シルト層が検出され，その中に赤色土器の細片が混入していた。それ以外の遺物は出土しなかった。

第 7 焼礫支群Ｒ7(第 17図)

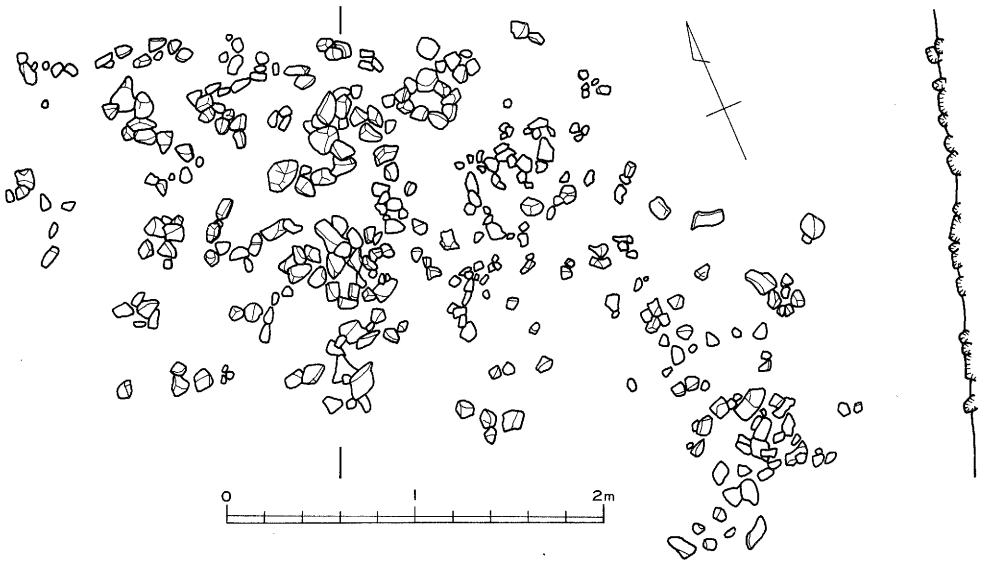
Ｄ４区第６層で確認された。Ｒ５，Ｒ６と同じく，黒色砂質シルト層を基底に大きな拡がりを示している。3～5 cm大の小さな角礫が多数,同一平面上に検出された。

礫が密集している部分と，すき間の大きな部分とが見られる。何かの目的で配石されたものが流されたのか，無秩序の感じを与える。礫は赤く焼けている。

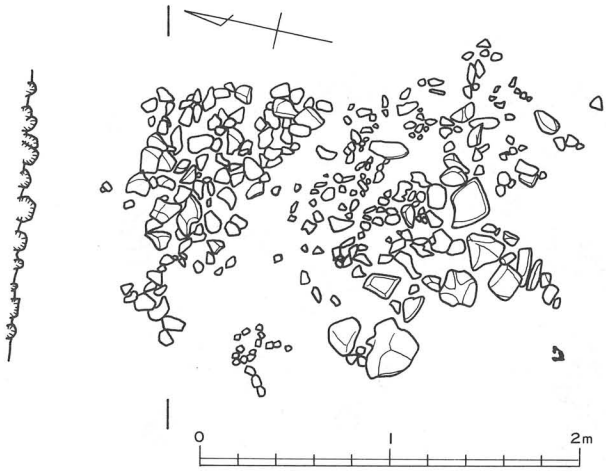
礫の間からは炭化物の薄い層とともに赤色の土器細片が検出された。その他の遺物は出土していない。

第 8 焼礫支群Ｒ8(第 18図，図版５中)

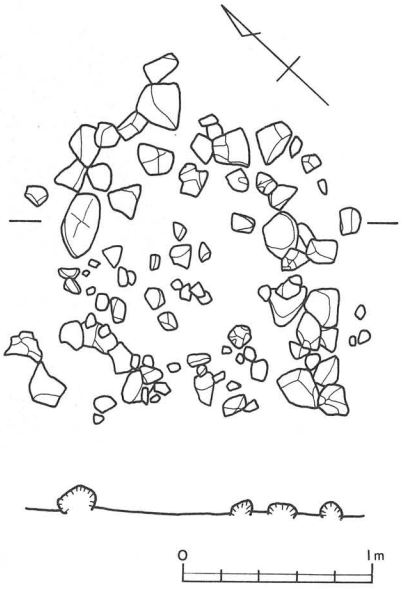
Ｅ５区，第６層の赤さび色を呈した砂質シルトの下から，全体的に赤い礫群が検出された。



第17図　第 7 焼 礫 支 群



第18図　第 8 焼 礫 支 群



第19図　第 9 焼 礫 支 群

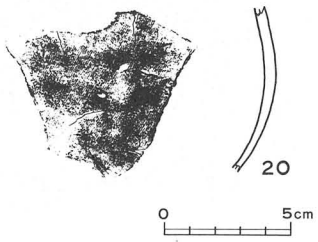
粘りのある黒色の砂質シルト層を基準としている。実測図からも明らかなように，東西 1.2 m，南北 0.7 mの長方形の平面形を有している。4 ～10 cm 大の角礫が比較的密にならんでいる。礫は焼けている。

Ｒ８の下方に，後述する土器集積地が見られ，赤色をした土器の薄い細片が数多く出土しており，中に縄文晩期と推定される土器片も含まれている。

第９焼礫支群Ｒ９（第19図，図版５下）

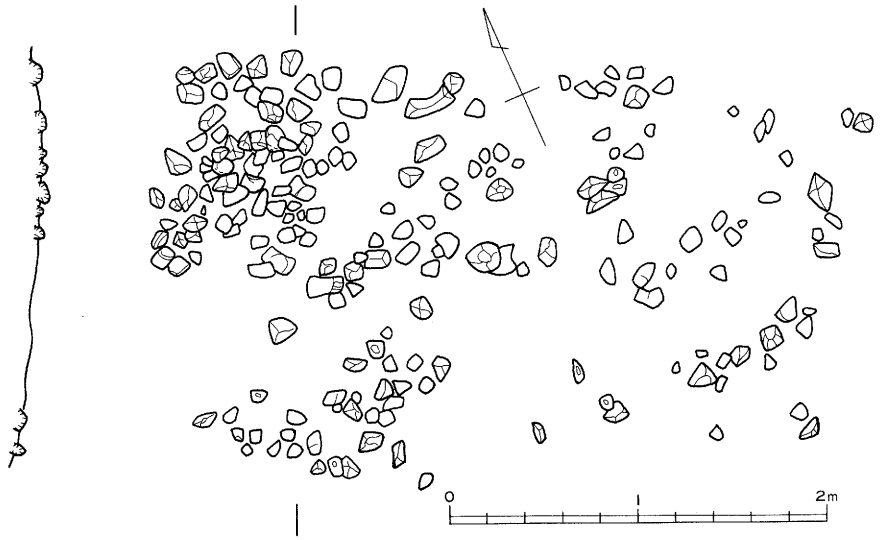
Ｆ６区下方で地山が急に落ち込むが，その上の黒色砂質シルト層でＲ９が検出された。10 ～ 18 cmとＲ１～Ｒ８の礫よりも大きめの角礫，円礫が，意図的に敷かれた形で検出された。平面形は東西 1.6 m，南北 2.0 mの楕円形である。中央部の礫が少なく空隙があるが，石が抜けたものと思われる。

下方から落ち込み部にかけて，赤色に焼けた土器細片の集積地が発見されている。また，Ｒ９わきから小鉢形土器の破片（第 20図）が出土した。内側に彎曲した胴部で，内面は斜めのナデ，外面はヨコのヘラミガキで滑らかに調整されている。胎土は細かい。



挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量（cm） 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第20図	20	Ｅ６－Ｒ９わき	小鉢	胴部	－	－	－・	－	0.4	ナデ	ヘラミガキ	橙色	にぶい橙色		

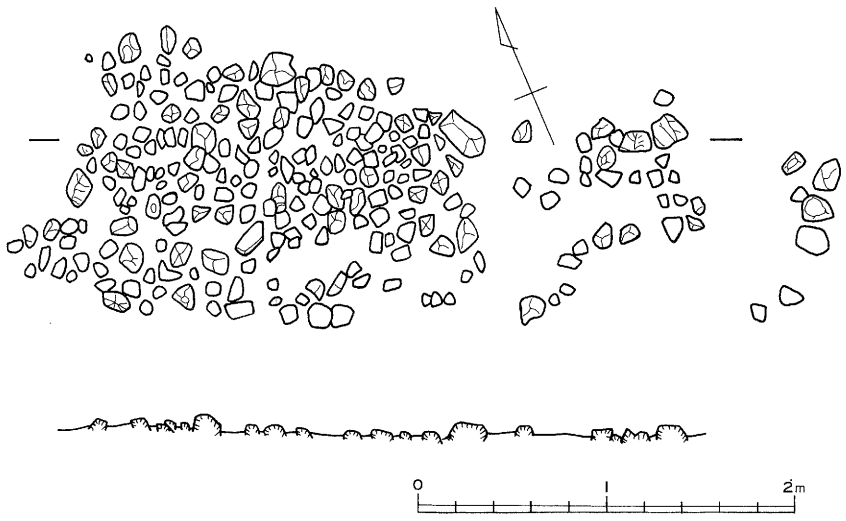
第20図　第 9 焼礫支群わき出土土器



第21図　第 10 焼 礫 支 群

第10焼礫支群R10(第21図)

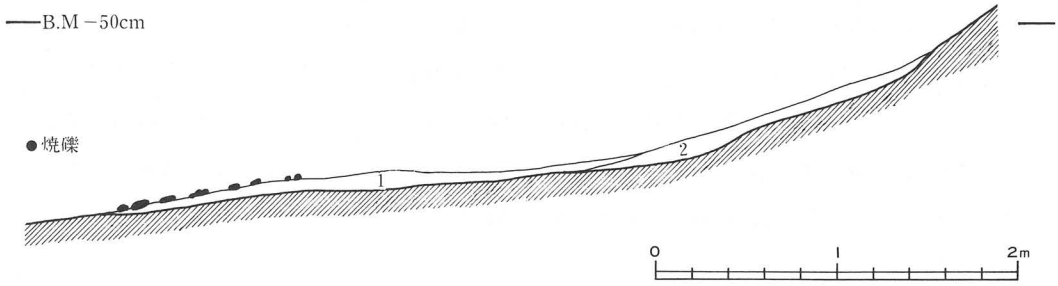
A 2区，第5貝塚の下層から検出された礫群である。礫は全面よく焼けている。調査途中の不注意から東側の一部の礫を取り除いてしまったが，実際は3～10 cm大の小さな礫が密に敷きつめられていた。平面形は3.6 m×2.0 mの長方形であろう。赤色の土器細片が見られた以外，遺物は出土しなかったが，縄文晩期の土器が出土した第5貝塚の下層なので，縄文晩期より新しいものではないと考えられる。



第22図　第 11 焼 礫 支 群

第11焼礫支群R11(第22図)

R10の南側のA 2区で検出された。同一平面上に5～10 cm大の小円礫および角礫を密に敷



挿図番号	層No.	土色	土質	備考	挿図番号	層No.	土色	土質	備考
第23図	1	黒 色(10YR$^{2}/_{1}$)	粘土質細砂	灰・木炭含む，製塩土器を多量に含む	第23図	2	黒褐色(10YR$^{3}/_{1}$)	シルト質細砂	粘性あり

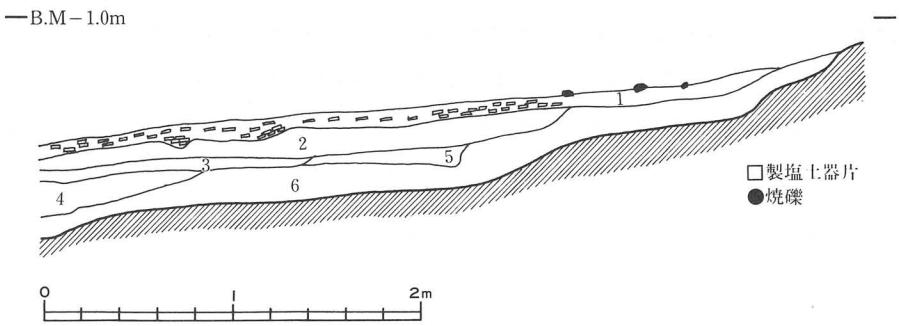
第23図　m－m′断面図

いた形で検出された。平面形は2.2ｍ×1.4ｍの長方形である。全面が火熱を受けて焼けている。R10と同じ黒色砂質シルト層にあり，炭化物が混じり，赤色の土器細片も検出された。

以上，11の焼礫支群について述べてきたが，Ｒ１を除いて，これら焼礫群の下からは別の遺構が検出されなかった。第23図はＲ５を含む中央部の断面図であるが，第２貝塚の上にあるＲ１を除く他の焼礫群の下もこれに類似しているものと推定される。

土器集積地と出土遺物

Ｒ４～Ｒ９の焼礫群の下方に赤く焼けた土器片の集積地が検出された。集積地は，Ｄ５区を中心にＣ５区，Ｅ５区，Ｅ６区にまたがり，大小15ブロックを数えることができる。集積地のある層は，焼礫群の基盤となっている黒色砂質シルト層と同一(第24図)とみなすことができる。焼礫群と関連があると思われるが，これについては「Ⅲ。考察４」で述べたい。集積



挿図番号	層No.	土色	土質	備考	挿図番号	層No.	土色	土質	備考
第24図	1	黒 色 (10YR$^{2}/_{1}$)	粘土質細砂	灰，木片，製塩土器片含む	第24図	4	灰黄褐色(10YR$^{4}/_{2}$)	細 砂	
	2	にぶい黄褐色 (10YR$^{5}/_{3}$)	細 砂	遺物わずかに含む		5	褐 灰 色(10YR$^{4}/_{1}$)	粘土質細砂	粘性あり
	3	褐灰色 (10YR$^{5}/_{1}$)	粘土質細砂	わずかに粘土あり		6	褐 灰 色(10YR$^{6}/_{1}$)	粘土質細砂	粘性強い

第24図　n－n′断面図

層の厚さは，場所によって異なるが，8～15cmある。

赤く焼けた土器片の他に，炭化物とともに，縄文土器破片が14点と，注口土器の注口部が1点出土した(35)。鉢形土器が多く，口唇部に突起のあるもの(22, 23, 24, 27)，頸部に平行沈線文のあるもの(31, 33)，や工字文のあるもの(22)などがある。詳しいことは後述するが，これらは，七ケ浜町二月田貝塚出土の第11類土器[註1]に類似しており，大洞Aに併行するものと推定される。

赤く焼けた土器片は無文粗製土器で，尖底部が58点出土した。口縁部および胴部破片は，数え切れないほど出土したが，大部分は1cm前後の細片である。図化できたものを第26図，第27図に示す。

この尖底土器片は，ⓐ器厚が0.3～0.5mmと薄手である。ⓑ文様がなく，表面が粗面状態のままであり，輪積痕が残っているものもある。ⓒ土器内面はヘラミガキ調整で平滑に仕上げられている。ⓓ二次的加熱を受けており，赤褐色や灰褐色を呈している。ⓔ剥離したり，壊れたりして細片化している，等の特徴をもっている。これに類似する尖底土器片は，七ケ浜町二月田貝塚[註2]や鳴瀬町里浜貝塚[註3]，松島町西ノ浜貝塚[註4]等で出土しており，縄文晩期の製塩土器[註5]と認められている。

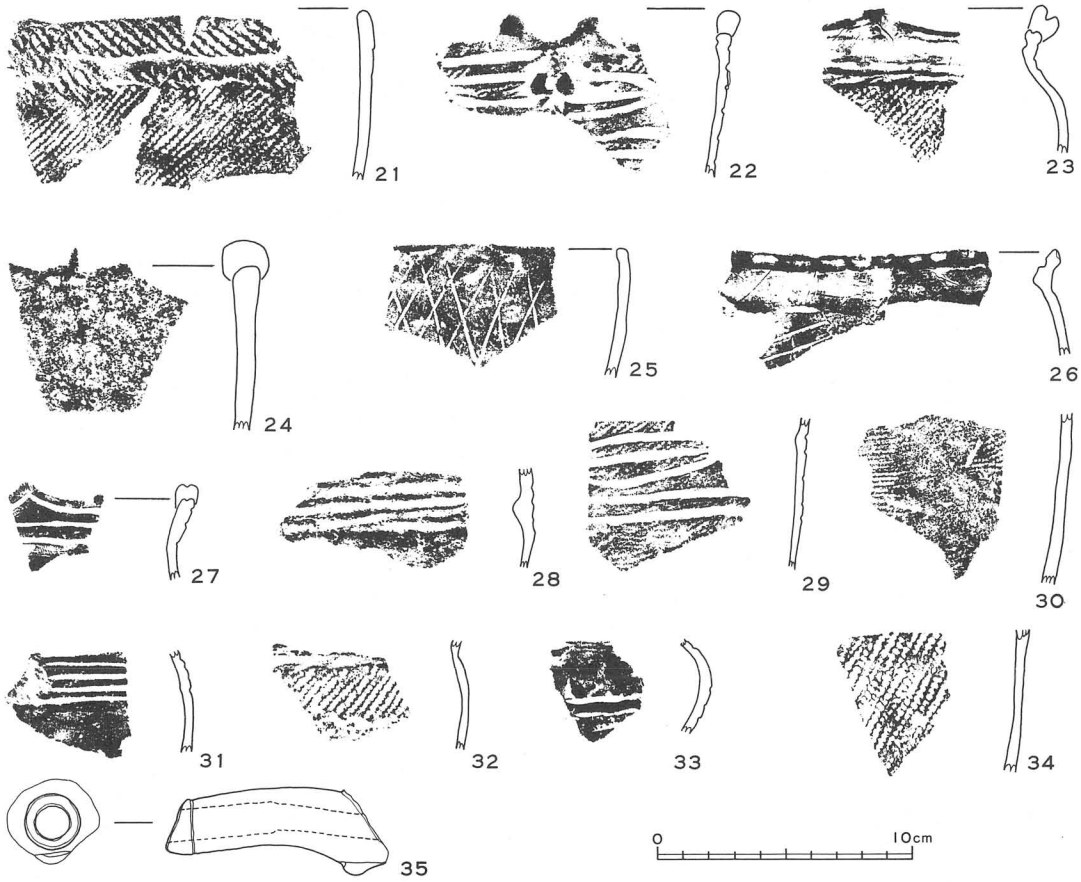
口縁部は内湾しながら外傾するものと，内湾しながら直立するものがある。この厚さで，中に濃縮された海水を入れてが熱したとき，よく割れないものだと思われる。底部を観察すると，底から胴部にかけて4～5cmの部分が最も強く熱を受けているのがわかる。底部は，基本的には尖底だが，径1.2cmぐらいの平底風のものもある。

また，平底の製塩土器と推定される底部片が4点出土している(第28図　T38～41)。T38，T39は，縄文晩期にしばしば見られるもので，底径が小さい。T40，41は浅鉢形と思われ，製塩土器でないかも知れない。色調などは似ており，二次的加熱も受けているので，一般の土器が転用されたのかも知れない。T41には，縄文が施文されている。

尚，出土製塩土器の形態分類は「Ⅲ.考察3」で述べるが，状況から見て，土器集積地は，製塩土器の捨て場とみていいだろう。

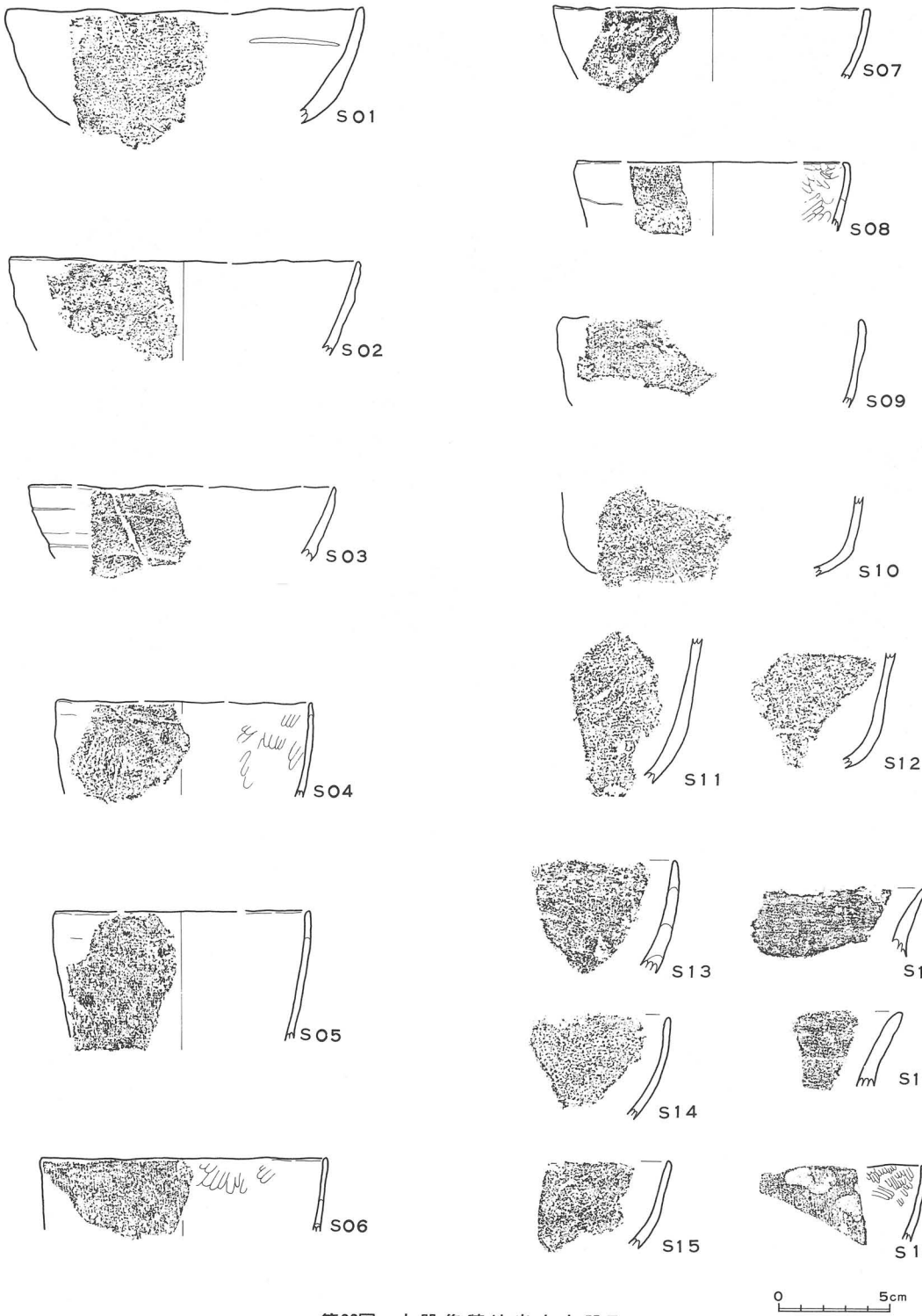
註

1) 塩釜女子高社会部「宮城県七ケ浜町二月田貝塚第二次発掘調査報告」『貝輪7』
2) 同　上
3) 日本塩業体系編集委員会「日本塩業体系史料編・考古」1978　日本専売公社。
4) 同　上
5) 同　上

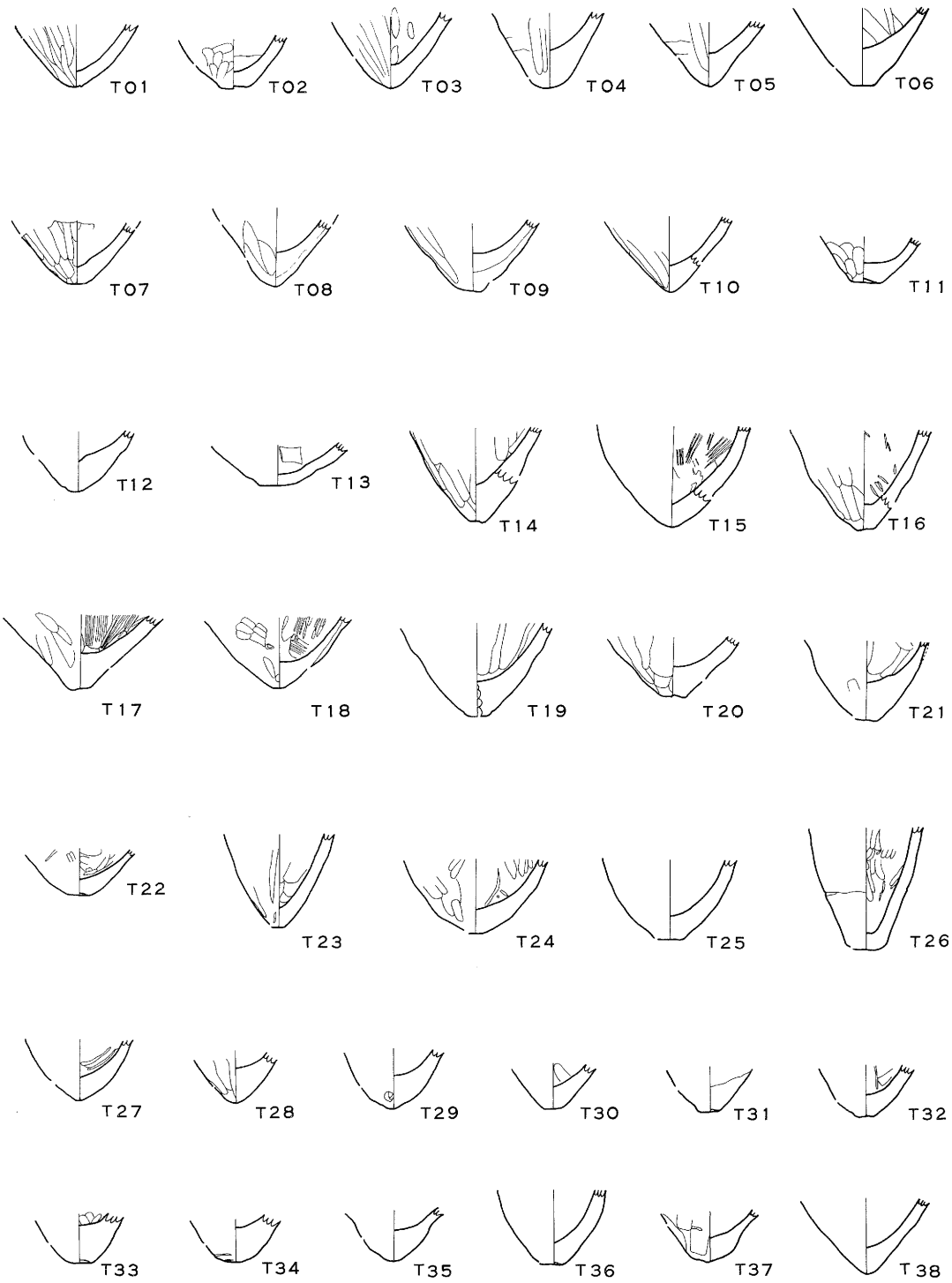


挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	種種	部位	法量（cm） 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第25図	21	土器集積地	深鉢	口縁部	－	14.4	14.4	－	0.6	ヨコナデ	縄文	橙色	赤褐色		
	22	土器集積地	深鉢	口縁部					0.5	ヨコナデ	撚糸文磨消	褐灰色	浅黄橙色		口唇部にB型突起，変形工字文
	23	土器集積地	小鉢	口縁部					0.5	ヨコナデ	縄文	黒色	黒褐色		口唇部にA型突起
	24	土器集積地	深鉢	口縁部					0.8	ナデ	不明（粗面）	にぶい橙色	橙色	10－8	口唇部に突起
	25	土器集積地	小鉢	口縁部					0.4	ヨコナデ	線刻沈文	灰白色	黒褐色	10－9	
	26	土器集積地 B2－4	小鉢	口縁部	－	13.4	14.6	－	0.4	ナデ	ヨコナデ	橙色	にぶい赤褐色	10－10	口唇部に押圧痕，図版は右一部のみ
	27	土器集積地	小鉢	口縁部					0.4	ナデ	ミガキ	浅黄橙色	浅黄橙色		口唇部に山形突起，沈線文
	28	土器集積地	深鉢	口縁部					0.3	不明	ヘラミガキ	黒色	にぶい褐色	10－11	沈線文
	29	土器集積地	深鉢	口縁部に近い					0.4	ヨコナデ	撚糸文磨消	にぶい黄橙色	浅黄橙色		沈線文
	30	土器集積地	鉢	胴部					0.6	不明	撚糸文磨消	褐灰色	浅黄橙色	10－7	
	31	土器集積地	小鉢	胴部肩					0.4	ヨコナデ	ヘラミガキ	浅黄橙色	にぶい橙色	10－12	平行沈線文
	32	土器集積地	鉢	胴部肩					0.3	ヨコナデ	縄文	にぶい橙色	褐灰色		
	33	土器集積地	小鉢	胴部肩					0.3	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙色	橙色		平行沈線文
	34	土器集積地	•						0.4	ナデ	縄文	にぶい褐色	赤褐色		
	35	土器集積地	注口土器	注口部					0.4	—	—	黄褐色	にぶい橙色	10－2	

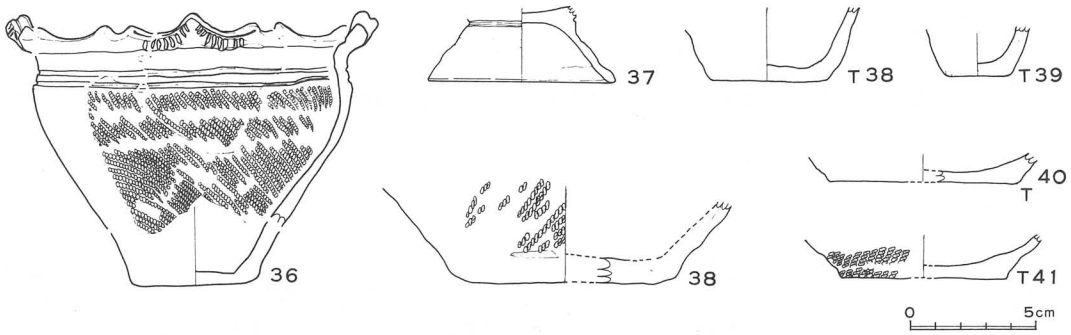
第25図　土地集積地出土土器



第26図　土器集積地出土土器Ⅱ



第27図　土器集積地出土土器Ⅲ



挿図番号	土器番号	出土地区 地区－番号	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第28図	T 36	土器集積地	浅鉢		10.8	14.8	14.8	5.0	0.4	ヘラミガキ	縄文	黒褐色＋にぶい橙色	黒褐色＋赤灰色	8－3	突起と刻み目あり。口唇部に沈線
	T 37	土器集積地	高杯	台部	－	－	－	7.4	0.3	ヘラミガキ	－	灰褐色	赤褐色	10－1	二次火熱受けている
	T 38	土器集積地	深鉢	底部	－	－	－	8.6	0.7	－	縄文	明褐色	暗褐色		
	T 39	土器集積地		底部	－	－	－	4.6	0.4	ヘラナデ	－	暗褐色	赤褐色	13－12	製塩土器
	T 40	土器集積地		底部	－	－	－	2.5	0.5	－	ヘラケズリ	赤褐色	灰色＋灰赤色	13－14	製塩土器
	T 41	土器集積地	浅鉢	底部	－	－	－	7.5	0.5	ヘラミガキ	－	橙色	赤褐色		製塩土器？
	T 42	土器集積地	浅鉢	底部	－	－	－	6.6	0.4	－	－	赤褐色	赤褐色	13－15	製塩土器？

第28図　土器集積地出土土器Ⅳ

挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	部位	法量(cm) 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	備考
第26図	S 01	土器集積地	口縁部	－	16.2	16.2	－	0.5～0.8	－	－	浅黄橙＋橙	浅黄橙色	製塩土器
	S 02	土器集積地	口縁部	－	15.9	15.9	－	0.4	－	－	にぶい橙＋淡赤橙	橙色	製塩土器
	S 03	土器集積地	口縁部	－	14.0	14.0	－		－	－	にぶい橙	橙色	製塩土器
	S 04	土器集積地	口縁部	－	11.7	11.7	－	0.2	ヘラミガキ	－	にぶい褐	橙色＋にぶい橙色	製塩土器
	S 05	土器集積地	口縁部	－	11.7	11.7	－	0.3	－	－	橙	橙色	製塩土器
	S 06	土器集積地	口縁部	－	13.0	13.0	－	0.2	ヘラミガキ	－	橙	橙色	製塩土器
	S 07	土器集積地	口縁部	－	14.3	14.3	－	0.3	－	－	橙	橙色＋にぶい赤褐色	製塩土器
	S 08	土器集積地	口縁部	－	11.9	11.9	－	0.3	ヘラミガキ	ヘラナデ	橙	橙色	製塩土器
	S 09	土器集積地	口縁部	－	14.0	14.0	－	0.3	－	－	橙	橙色	製塩土器
	S 10	土器集積地	胴部	－	－	－	－	0.4	－	－	にぶい橙	橙色	製塩土器
	S 11	土器集積地	胴部	－	－	－	－	0.4～0.7	－	－	浅黄橙	橙色	製塩土器
	S 12	土器集積地	胴部	－	－	－	－	0.4	－	－	浅黄橙	橙色	製塩土器
	S 13	土器集積地	口縁部	－	－	－	－	0.4～0.8	－	－	浅黄橙＋淡赤橙	橙色	製塩土器
	S 14	土器集積地	口部	－	－	－	－	0.3	－	－	橙	橙色	製塩土器
	S 15	土器集積地	口縁部	－	－	－	－	0.3	－	－	橙	橙色	製塩土器
	S 16	土器集積地	口縁部	－	－	－	－	0.4～0.6	－	－	橙	橙色＋灰褐色	製塩土器でない？
	S 17	土器集積地	口縁部	－	－	－	－	0.6	－	－	浅黄橙	橙色	製塩土器でない？
	S 18	土器集積地	口縁部	－	16.2	16.2	－	0.3	ヘラミガキ	－	明赤塚	橙色	製塩土器

挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	部位	法量（cm） 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	外面	色調 内面	外面	備考
第27図	T 01	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	ナデ	ヘラミガキ	橙色	橙色＋にぶい橙色	製塩土器
	T 02	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	－	ヘラミガキ	明赤褐色	明赤褐色	製塩土器
	T 03	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	－	ヘラミガキ	橙色	橙色	製塩土器，内面に白灰色の無機物が付着
	T 04	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	－	ヘラミガキ	褐灰色	橙色＋赤色	製塩土器
	T 05	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.6	－	ヘラミガキ	褐灰色	橙色	製塩土器
	T 06	土器集積地	底部	－	－	－	1.0	0.5	ヘラナデ	－	橙色	橙色	製塩土器
	T 07	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	アテ板痕あり	ヘラミガキ	橙色	橙色＋淡赤橙色	製塩土器
	T 08	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	－	ヘラミガキ	灰褐色	橙色	製塩土器
	T 09	土器集積地	底部	－	－	－	0.8	0.6	－	ヘラミガキ	灰褐色	橙色＋浅黄橙色	製塩土器
	T 10	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.4	－	ヘラミガキ	橙色	橙色＋灰褐色	製塩土器
	T 11	土器集積地	底部	－	－	－	1.4	0.4	－	ヘラミガキ	橙色	橙色	製塩土器
	T 12	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	－	（磨滅）	浅黄橙色	橙色	製塩土器
	T 13	土器集積地	底部	－	－	－	1.3	0.5	工具アテ痕あり	（磨滅）	にぶい橙色	橙色	製塩土器
	T 14	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	橙色	製塩土器
	T 15	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.6	ヘラ状工具によるナデ	（磨滅）	橙色	橙色＋灰赤色	製塩土器
	T 16	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐色	橙色	製塩土器
	T 17	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.6	工具によるナデ	ヘラミガキ	橙色	橙色	製塩土器
	T 18	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	工具アテ痕あり	ヘラミガキ	にぶい橙色	橙色	剝離している，製塩土器
	T 19	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	ヘラミガキ	（磨滅）	橙色	にぶい橙色＋橙色	製塩土器
	T 20	土器集積地	底部	－	－	－	1.2	0.6	－	ヘラミガキ	にぶい橙色	にぶい橙色	製塩土器
	T 21	土器集積地	底部	－	－	－	1.0	0.4	ヘラナデ	ヘラナデ	橙色	橙色＋灰褐色	製塩土器
	T 22	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	にぶい橙色＋明褐灰色	製塩土器
	T 23	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙色	橙色	製塩土器
	T 24	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	浅黄橙色	製塩土器
	T 25	土器集積地	底部	－	－	－	1.2	0.5	－	－	橙色	橙色	製塩土器
	T 26	土器集積地	底部	－	－	－	1.5	0.4	ヘラミガキ	－	橙色	にぶい橙色＋橙色	製塩土器
	T 27	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	ヘラアテ痕あり	－	にぶい橙色	浅黄橙色＋橙色	製塩土器
	T 28	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.6	－	ヘラミガキ	橙色	橙色	製塩土器
	T 29	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	－	－	にぶい橙色	灰褐色	製塩土器
	T 30	土器集積地	底部	－	－	－	0.8	0.5	－	－	橙色	橙色	製塩土器
	T 31	土器集積地	底部	－	－	－	－	－	－	－	にぶい赤橙色	橙色	底部内面剝離，製塩土器
	T 32	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.5	アテ痕あり	－	橙色	橙色	製塩土器
	T 33	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.7	ヘラミガキ	－	にぶい橙色	にぶい橙色	製塩土器
	T 34	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.7	－	－	橙色	橙色	製塩土器
	T 35	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.4	－	－	にぶい橙色	橙色＋淡赤橙色	製塩土器
	T 36	土器集積地	底部	－	－	－	0.8	0.6	－	－	にぶい橙色	橙色	製塩土器
	T 37	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.3	－	ヘラケズリ	にぶい橙色	橙色	製塩土器
	T 38	土器集積地	底部	－	－	－	－	0.4	－	－	橙色	浅黄橙色	製塩土器

3．竪穴住居跡と出土遺物

〔確認・重複〕 遺跡の北西部につくられた水田用溜池の切断面（S－S′断面図）から，遺構が判明し，D１区の地山面で竪穴住居跡が確認された。住居跡の堆積土の上に盛り土をした整地面で，ピット群と第１貝塚が発見されたが，地山面で重複する遺構はなかった。

〔平面形・規模〕 竪穴住居跡の北西半分は溜池で切られて現存せず，南西・東南の壁と床面の一部は削平されて失なわれているが，南隅の痕跡が検出されたので，平面形を長方形と推定できる。現存規模3.3ｍ×3.4ｍである。

〔堆 積 土〕 住居内の堆積は１層である。やや赤味のある褐色シルト層で，床面全面に堆積している。この上に撹乱された粘土質の盛り土がある。

〔床　　面〕 床面は地山の明黄褐色の凝灰岩を掘り，その上ににぶい褐色のシルト質粘土を平らに貼って叩きしめている。床面は南西方向に緩く傾斜している。貼り床の粘土は５～10cmの厚さでほぼ全面に及ぶが，東南側は削平されたためか，その痕跡が薄れて地山との区別がつけにくい。

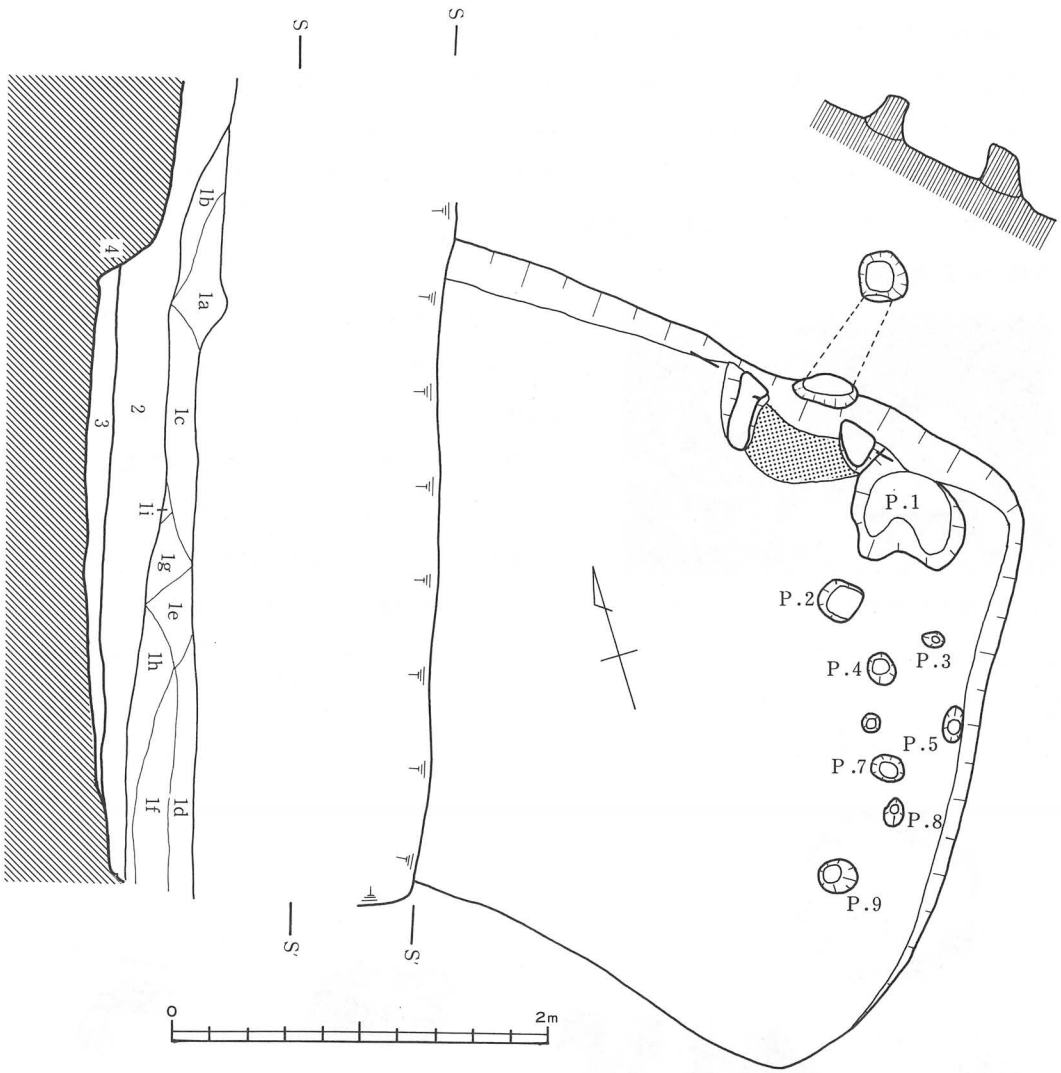
〔壁〕 地山を壁にしている。残存する壁高は最高32cmで，床面からの立ち上りは，立ち上り角度約130°であり，ゆるやかに外傾している。

〔周　　溝〕 なし

〔柱穴・貯蔵穴〕 貼り床面から９個のピットが検出された（第29図）。規模，深さ，配置等に規則性がなく，遺構に伴う柱穴とは考えられなかった。また，カマドわきのP.1は大きいが，深さが10cmと浅いので，貯蔵穴とは認められなかった。性格は不明。他のピットも性格不明である。

〔カ マ ド〕 住居北東壁の東寄りに付設されている。本体（焚き口部・燃焼部）と煙道部から成る。本体は，天井部が全て失なわれており，袖（側壁）が残るだけである。燃焼部内の堆積土に天井部崩落土が観察された。袖は内側に傾いており，立ち上り角は，内面84～90°，外面70～80°である。袖の保存状態は余り良くない。燃焼部内の最大幅は約50cmで，奥行は約40cmである。底面は熱を受けて赤変し硬い。燃焼部奥壁からトンネル状に地山が掘り抜かれ，住居外に煙道部が延びている。長さが約70cm，幅が平均25cmの規模である。先端には直径約25cm，深さ30cmの煙出し穴があった。

カ マ ド



ピット番号	大きさ（径）	深　さ	掘り方埋土色調	柱　痕	備　　考	ピット番号	大きさ（径）	深　さ	掘り方埋土色調	柱　痕	備　　考
P.1	65 × 40	10.0	暗褐色（10YR 3/3）	無		P.6	10	7.0	暗褐色（10YR 3/3）	無	
P.2	20 × 22	5.0	褐　色（10YR 4/3）	無		P.7	16 × 10	7.0	褐　色（10YR 4/4）	無	
P.3	10 × 6	7.0	褐　色（10YR 4/4）	無		P.8	12 × 7	8.0	褐　色（10YR 4/4）	無	
P.4	18	6.5	褐　色（10YR 4/4）	無		P.9	22 × 16	7.5	褐　色（10YR 4/3）	無	
P.5	18 × 10	9.0	褐　色（10YR 4/3）	無							

挿図番号	層 No.	土　　色	土　　質	備　　考	挿図番号	層 No.	土　　色	土　　質	備　　考
第29図	1a	褐　色（10YR 4/4）	砂質シルト	1a～1i 攪乱層	第29図	1g	灰褐色（7.5YR 4/2）	粘土質シルト	硬　い
	1b	暗褐色（7.5YR 4/3）	砂質シルト	2.5Y 5/4 の粘土がブロックで		1h	灰褐色（7.5YR 4/2）	粘土質シルト	
	1c	黒　色（7.5YR 2/1）	シ　ル　ト			1i	灰褐色（7.5YR 4/2）	シ　ル　ト	
	1d	褐　色（7.5YR 4/6）	シ　ル　ト	貝少し混入		2	暗褐色（7.5YR 4/3）	砂質シルト	
	1e	褐　色（7.5YR 4/4）	シ　ル　ト	貝少し混入		3	褐　色（7.5YR 5/4）	シ　ル　ト	貼り床層
	1f	暗褐色（7.5YR 4/3）	粘土質シルト	貝少し混入		4	明黄褐色（2.5YR 6/6）		（地　山）

第29図　竪穴住居跡

〔出土遺物〕 住居に伴うものとして貼り床面，カマドわき出土のものがある。

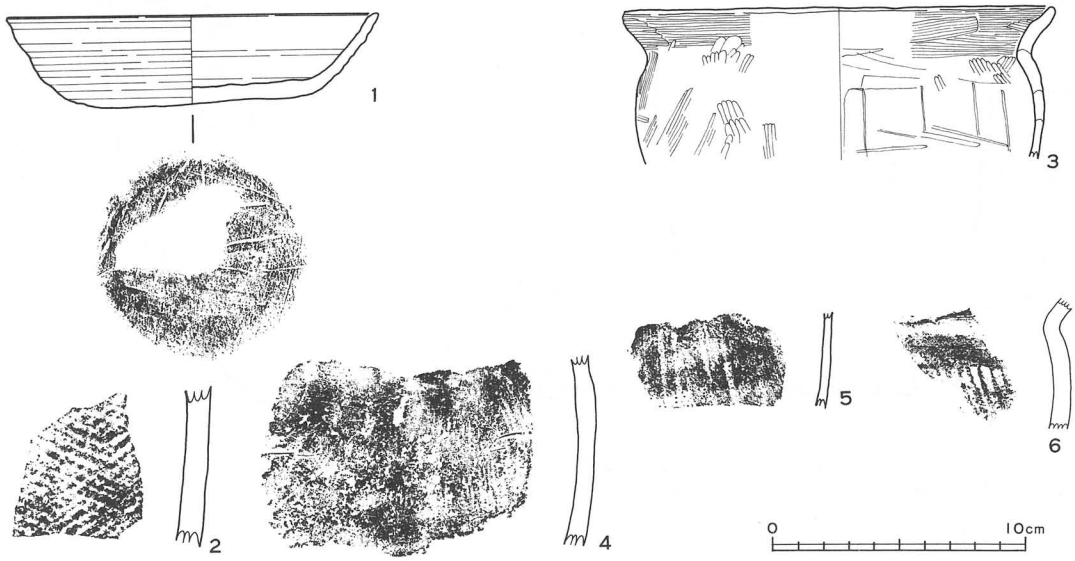
須恵器坏(第30図1)：体部から口縁部にかけて外傾する。底部切り離しがヘラ切り技法で再調整が加えられている。手持ちヘラケズリが施されており，平底である。

土師器甕(同6)：頸部破片で口縁部がくの字に外反している。内外面ともヨコナデ調整しているが，肩部に篦状工具による押圧文が施されている。

堆積土中出土遺物

須恵器甕(同2)：体部破片で外面にタタキ目があり，内面はロクロ仕上げされている。

土師器甕(同3～5)：小形甕(3)は口縁部がくの字に外反し，頸部に段はない。口縁部は内外面ともヨコナデ調整され，体部外面はヘラナデ，ヘラミガキが施されている。(4)は体部破片で内面がナデ，外面は刷毛目調整され，上端にミガキが施されている。(5)は甕かどうか不明である。



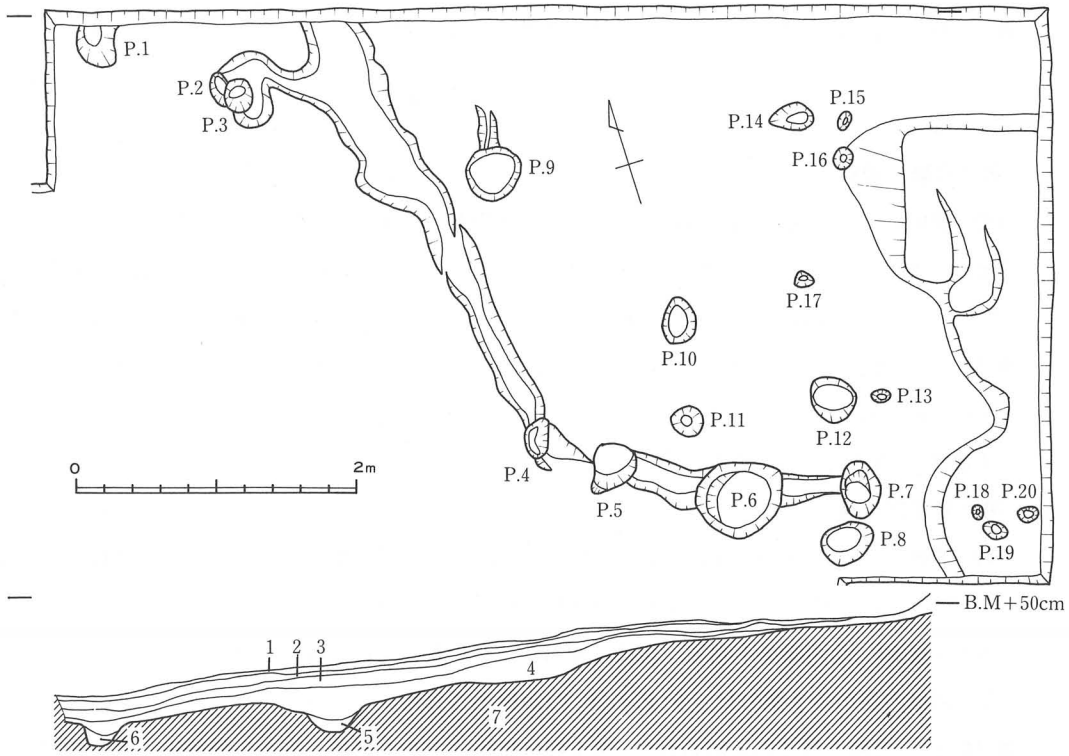
挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	種別	器種	法量(cm) 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第30図	1	貼床上	須恵器	坏	3.5	14.7	14.7	8.2	0.4	ロクロ	ロクロ	褐灰色	褐灰色	11－1	底部：ロクロヘラ切り後手持ヘラケズリ
	2	D1－堆積土	須恵器	甕	－	－	－	－	1.0	ロクロ	タタキ目	青灰色	褐灰色	11－5	タタキ目は格子状
	3	D1－堆積土	土師器	小形甕	推11.0	17.0	17.0	－	0.8	(仁)ヨコナデ (休)ヘラナデ	(山)ヨコナデ (休)ヘラナデ ヘラミガキ	橙色	橙色	11－4	
	4	D1－堆積土	土師器	甕	－	－	推18.0	－	0.8	ナデ	刷毛目 上端にミガキ	橙色	橙色		栗囲式か
	5	煙出し穴	土師器	甕	－	－	－	－	0.3	ヘラナデ	縦方向のナデ	橙色	橙色	11－6	
	6	カマドわき	土師器	甕	－	－	－	－	0.6	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	橙色		

第30図　竪穴住居跡出土土器

4．溝（第31図）

〔確認・重複〕　E区・F0区の地山面で確認された。P.4～P.7の4個のピットで切られているが，溝に付随したものか不明である。

〔形態・規模〕　削平されているのではっきりしないが，現存最大幅は上端40 cm，下端30 cm，深さ22 cmで「U」字状をしている。なお，溝は，調査区外の北側上方に延びている。



挿図番号	層No.	土　色	土　質	備　考	挿図番号	層No.	土　色	土　質	備　考
第31図	1	褐　色（7.5YR4/4）	シルト	表　土	第31図	5	褐　色（10　YR4/3）	シルト	
	2	褐　色（7.5YR4/6）	シルト			6	褐　色（10　YR4/3）	シルト	
	3	褐　色（7.5YR4/6）	シルト	黄・赤・白の斑入り		7	黄橙色（7.5YR7/8）		地　山
	4	黄褐色（10　YR5/6）	シルト	黄・灰の斑入り					

ピット番号	地区名	大きさ（径）	深さ	掘り方 埋土色調	柱痕	径	柱痕跡色調	備　考
P.1	E	30×25	16.0	褐　色（10YR4/3）				
P.2	E	18×13	9.0	褐　色（10YR4/5）				
P.3	E	22	14.5	褐　色（10YR4/4）				
P.4	F0	30×18	5.5	褐　色（10YR4/4）				浅い
P.5	F0	30	18.0	暗褐色（10YR3/3）				
P.6	F0	60×50	12.0	暗褐色（10YR3/3）				
P.7	G0	40×30	22.3	褐　色（10YR4/3）	○	8.0	暗褐色（10YR3/3）	赤・白・黄の斑入り
P.8	F0 G0	39×30	10.5	褐　色（10YR4/3）				
P.9	F0	40	6.5	褐　色（10YR4/4）				
P.10	F0	35×25	6.5	暗褐色（10YR3/3）				
P.11	F0	24×20	26.0	褐　色（10YR4/4）	○	10.0	暗褐色（10YR3/3）	
P.12	F0	32	10.0	褐　色（10YR4/4）				白灰の斑入り さらさらしている
P.13	G0	14×10	3.5	褐　色（10YR4/3）				浅くて小さい
P.14	F	27×20	3.0	褐　色（10YR4/4）				
P.15	G	15×10	4.0	褐　色（10YR4/4）				
P.16	F・G	16	4.5	褐　色（10YR4/4）				さらさらしている
P.17	F0	15×11	6.0	褐　色（10YR4/4）				粘りあり
P.18	G0	12×10	4.0	褐　色（10YR4/3）				小さい
P.19	G0	19×13	3.0	褐　色（10YR4/4）				方　形
P.20	G0	14×10	4.5	褐　色（10YR4/4）				黄の斑入り 粘りあり

第31図　溝　遺　構

〔堆 積 土〕 溝内の堆積土は1層だけで，第31図・第5層の，さらさらした褐色シルト層である。同図のピット内の堆積土と同じである。

〔ピット群〕 溝上および溝に囲まれた区域内で，20個のピットが検出された。いずれも地山面で確認された。ピットの形は長円形に近いものが多いが，不整形のものも含まれている。大きさが10～60 cm，深さが3～26 cmとかなりばらばらであった。柱穴が検出されたのは2個(P.7, P.11)であった。

〔遺　　物〕 溝内およびピット内からの出土遺物はなかった。

5．竪　穴　遺　構（第32図，図版6）

第1号竪穴遺構

〔確認・重複〕 F1区の地山面で確認された。他の遺構との重複はなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は2.40 m×1.52 mの方形に近い楕円形である。削平のためか，壁はなだらかである。深さは，最深部で19.0 cmであるが，全体的に浅い。遺構内にピットはない。

〔堆 積 土〕 堆積土は2層認められた。第1層は褐色シルト層で，第2層は黄，赤の斑入り褐色シルト層である。

〔出土遺物〕 遺構内からの遺物は出土しなかった。

第2号竪穴遺構

〔確認・重複〕 E1区の地山面で確認された。住居跡に近い部分がはっきりしないので断言できないが，調査段階では，他の遺構との重複は認められなかった。

〔平面形・規模〕 北西部が不明で，規模は明らかでないが，平面形は南北辺1.9 mの方形であろう。遺構内部から2個のピット(P.1，P.2)が検出された。

〔堆 積 土〕 堆積土は2層認められた。第1層は黒褐色シルト層で，細かい貝砕片と炭化物が混入している。第2層は白・黄・茶色の斑入り褐色シルト層で，P.1, P.2の底面に堆積していた。

〔ピ ッ ト〕 P.1, P.2とも浅く，柱穴の痕跡はなかった。

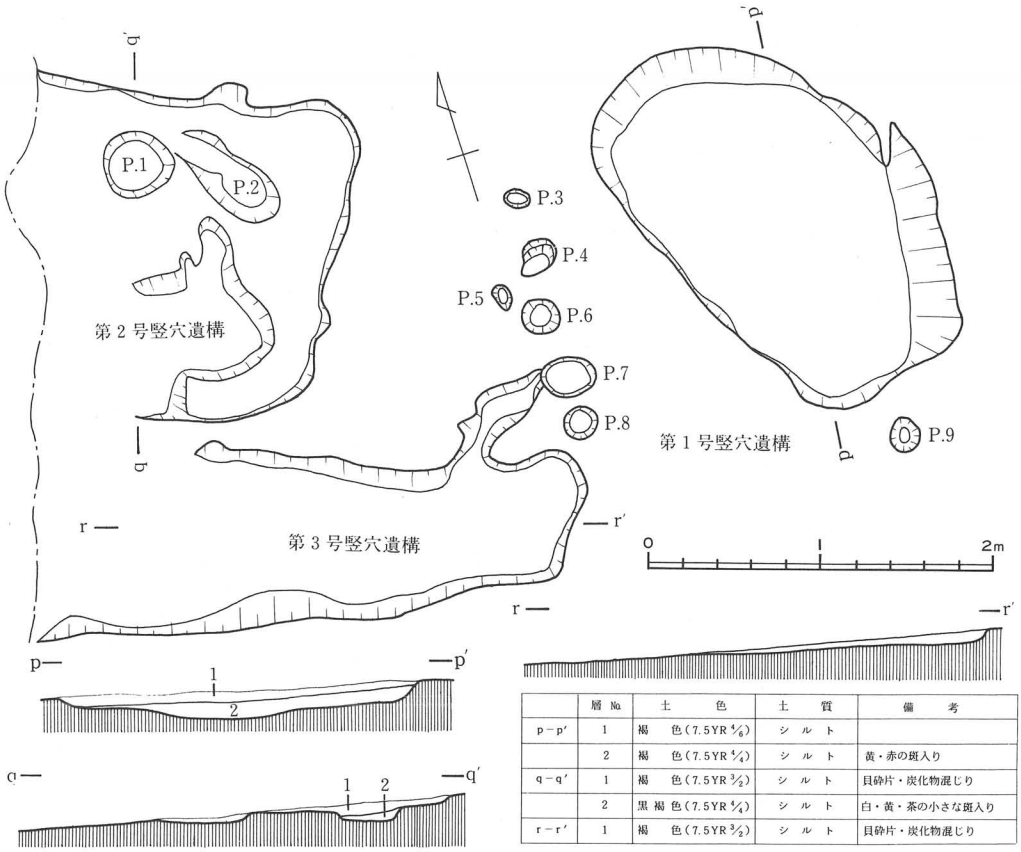
〔出土遺物〕 第1層内から鉄滓が8点出土している。

第3号竪穴遺構

〔確認・重複〕 E1区，F1区の南端の地山で確認された。他の遺構との重複はなかった。

〔平面形・規模〕 北西部の壁が検出されなかったのでその規模は不明である。最深部で9 cmの浅い竪穴である。

〔堆 積 土〕 1層しか認められなかった。貝の砕片と炭化物が混じっている黒褐色シルト層である。



	層 No.	土色	土質	備考
p－p′	1	褐色（7.5YR 4/6）	シルト	
	2	褐色（7.5YR 4/4）	シルト	黄・赤の斑入り
q－q′	1	褐色（7.5YR 3/2）	シルト	貝砕片・炭化物混じり
	2	黒褐色（7.5YR 4/4）	シルト	白・黄・茶の小さな斑入り
r－r′	1	褐色（7.5YR 3/2）	シルト	貝砕片・炭化物混じり

ピット番号	地区名	大きさ（径）	深さ	掘り方埋土色調	備考	ピット番号	地区名	大きさ（径）	深さ	掘り方埋土色調	備考
P.1	E 1	40	8.5	褐色（7.5YR 4/4）	第2竪穴遺構内	P.6	F 1	22	7.5	黒褐色（10YR 2/2）	
P.2	E 1	60×30	5.3	褐色（7.5YR 4/4）	第2竪穴遺構内	P.7	F 1	32×22	27.0	黒色（10YR 2/1）	
P.3	F 1	14×12	13.0	黒褐色（10 YR 2/2）	土師器片出土	P.8	F 1	20	5.3	黒色（10YR 2/1）	
P.4	F 1	25×18	5.0	黒褐色（10 YR 2/2）		P.9	F 1	20×16	11.0	明褐色（10YR 3/3）	白・黄の斑入り炭化物少々
P.5	F 1	14×10	6.0	黒色（10 YR 2/1）							

第32図　竪穴遺構

〔ピット〕 竪穴遺構内から検出されなかったが，北東端から北方に6個発見された。P.7が27 cmと深く，その他は浅かった。柱痕の認められるピットはなかった。

〔出土遺物〕 鉄滓が5個出土した。土器はP.3から土師器片が出土している。

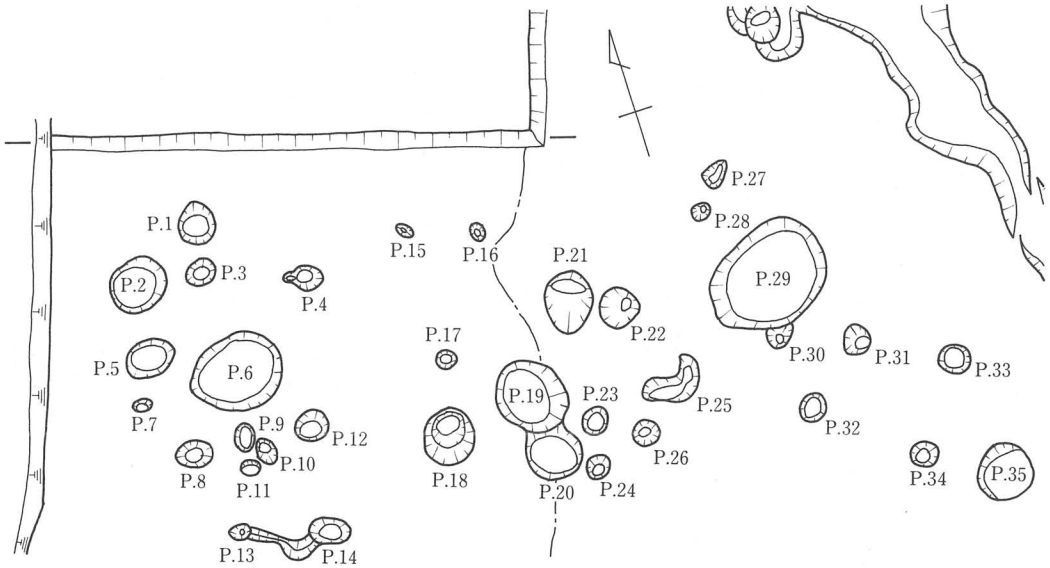
6．ピット群（第33図，図版6下）

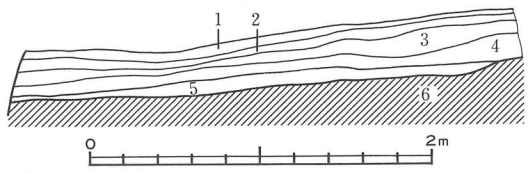
〔確認〕 P. 1～P. 18はD0区の整地面で，P. 21～P. 35はE0区の地山面で確認された。P. 19，P. 20は地山面と整地面の境目で確認された。

〔規模〕 大きさは10 cm～70 cmとまちまちで，深さもさまざまである。柱痕の認められ

たのはP.31のみであるが，深さが54 cmにも達した。P.1～P.12は，P.6を中心にしてあるまとまりが見られる。図中の一点鎖線から左が整地面であるが，その境目のP.19，P.20は整地してから掘ったものであり，これらのピットがほぼ同時期につくられたことを示唆するものであろう。しかし，性格は不明である。

〔出土遺物〕 P.18，P.29から土師器片が出土している。





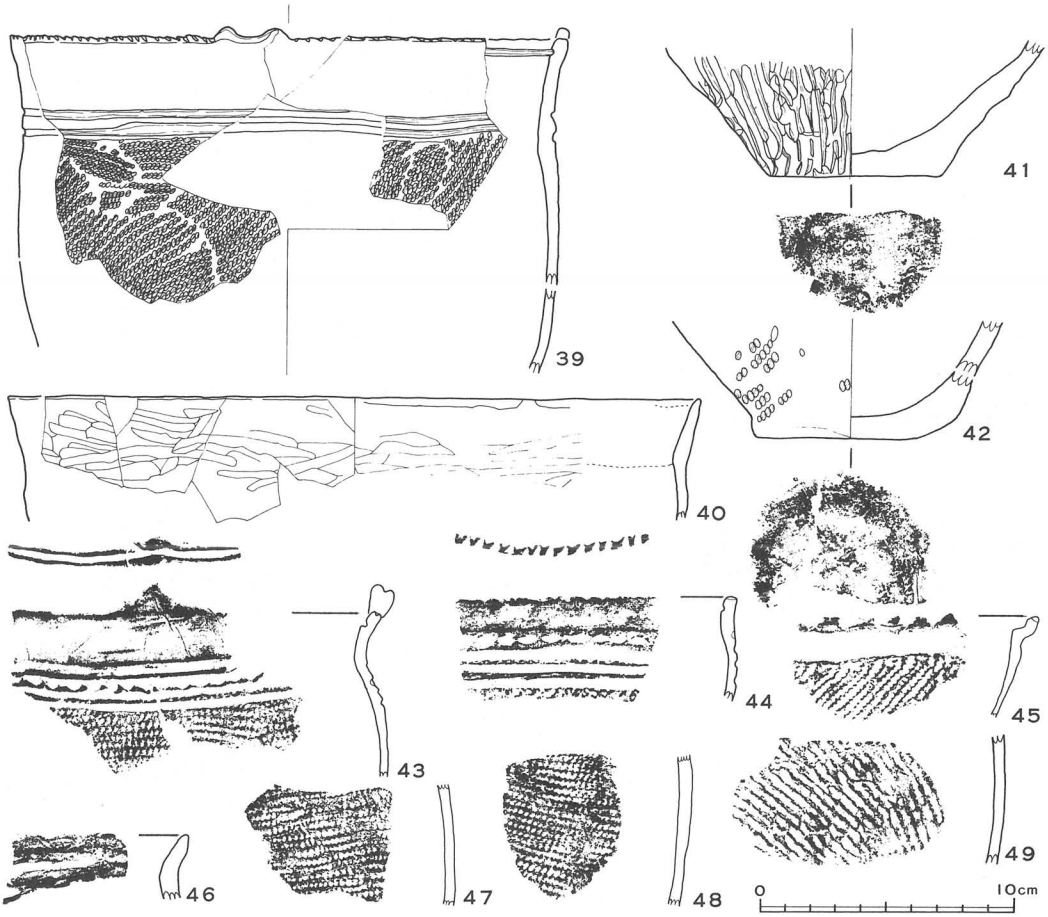
挿図番号	層No.	土　　色	土 質	備　　考
第33図	1	褐　色(7.5YR4/4)	シルト	(表　土)
	2	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	
	3	褐　色(7.5YR4/6)	シルト	黄・赤・白の斑入り
	4	黄褐色(10 YR5/6)	シルト	黄・灰の斑入り
	5			(整地層)
	6	黄橙色(7.5YR7/8)		(地　山)

ピット番号	地区名	大きさ(径)	深さ	掘り方埋土色調	柱痕	径	柱痕跡色調	備　　考
P.1	D 0	24×20	11.0	黒褐色(7.5YR3/1)				
P.2	D 0	32	9.0	暗褐色(7.5YR3/2)				
P.3	D 0	15	9.0	褐　色(7.5YR3/2)				
P.4	D 0	15×12	8.0	黒褐色(7.5YR3/1)				
P.5	D 0	19×24	8.0	褐　色(7.5YR5/4)				
P.6	D 0	55×45	17.3	褐灰色(7.5YR5/1)				硬い粘土層
P.7	D 0	10×8	6.5	褐　色(7.5YR5/4)				
P.8	D 0	20×16	14.8	暗褐色(7.5YR3/2)				
P.9	D 0	14×13	9.5	暗褐色(7.5YR3/2)				
P.10	D 0	19×12	13.0	暗褐色(7.5YR3/2)				
P.11	D 0	12×10	13.0	暗褐色(7.5YR3/3)				
P.12	D 0	20×14	2.0	暗褐色(7.5YR3/2)				
P.13	D 0	9	5.0	褐　色(7.5YR5/2)				
P.14	D 0	26×18	11.0	褐　色(7.5YR5/2)				
P.15	D 0	12×6	7.5	褐　色(7.5YR5/3)				
P.16	D 0	14×10	4.5	暗褐色(10YR3/3)				粘りあり
P.17	D 0	10	3.0	褐　色(7.5YR5/4)				
P.18	D 0	30×26	6.0	褐　色(7.5YR5/3)				土師器片出土
P.19	E 0	44×40	12.5	褐　色(7.5YR5/4)				
P.20	E 0	32×26	23.5	暗褐色(7.5YR3/3)				粘土層
P.21	E 0	30×20	9.0	褐　色(7.5YR5/4)				
P.22	E 0	26×23	14.5	暗褐色(7.5YR3/2)				粘りあり
P.23	E 0	15	4.0	褐　色(10 YR5/6)				
P.24	E 0	14	6.5	褐　色(10 YR5/6)				
P.25	E 0	40×20	6.5	黄褐色(5　YR5/6)				さらさらしている
P.26	E 0	15	4.0	褐　色(10 YR5/6)				白灰黄の斑入り
P.27	E 0	20×12	11.5	褐　色(10 YR5/4)				
P.28	E 0	10	6.0	褐　色(10 YR5/4)				
P.29	E 0	70×56	10.8	褐　色(10 YR5/4)				土師器片出土
P.30	E 0	14×12	6.0	褐　色(10 YR5/6)				
P.31	F 0	20×17	54.0	褐　色(10 YR5/4)	○	8	暗褐色(10YR3/2)	
P.32	F 0	14	4.5	褐　色(10 YR5/4)				
P.33	F 0	16	10.8	褐　色(7.5YR5/6)				砂質シルト
P.34	F 0	13	12.0	褐　色(10 YR5/3)				
P.35	F 0	30×28	11.5	褐　色(10 YR5/4)				

第33図　ピ　ッ　ト　群

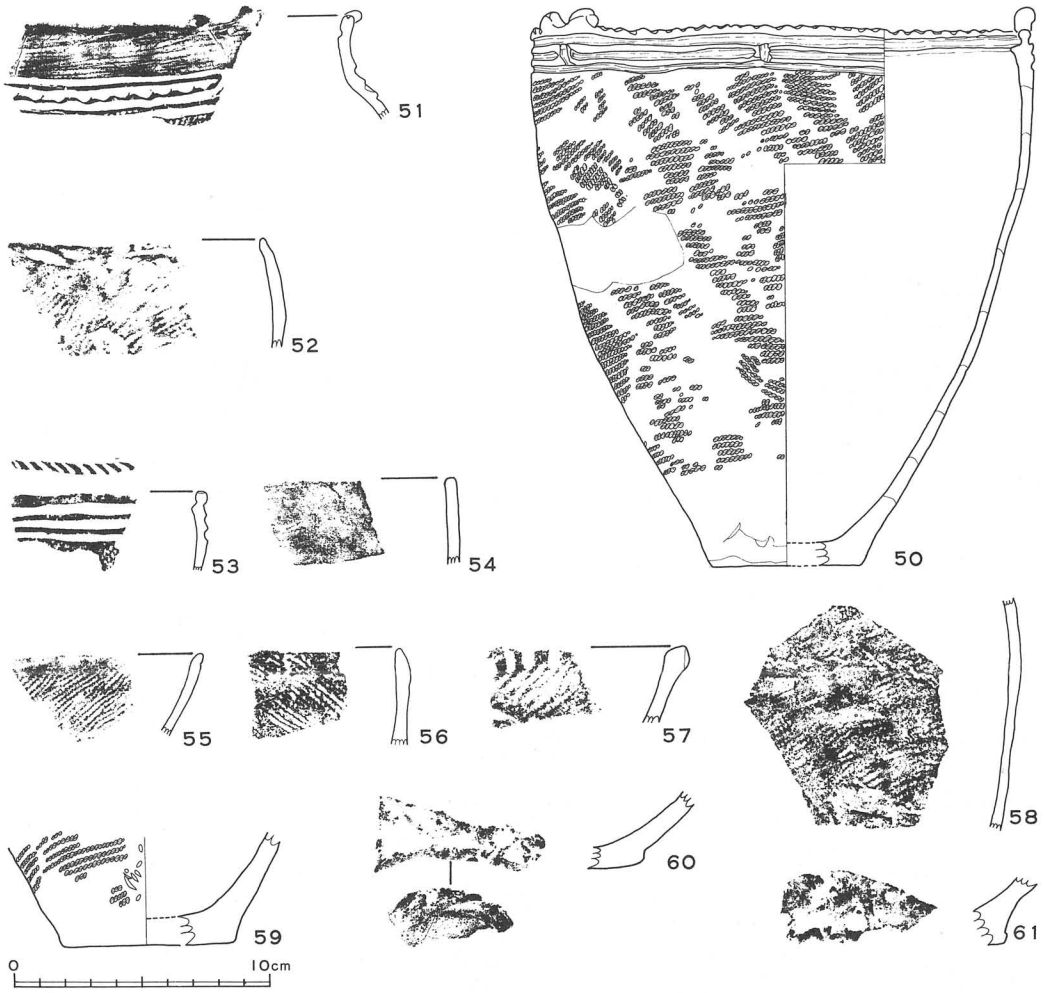
7．遺構以外からの出土遺物

縄文土器（第34～36図・図版7～10）



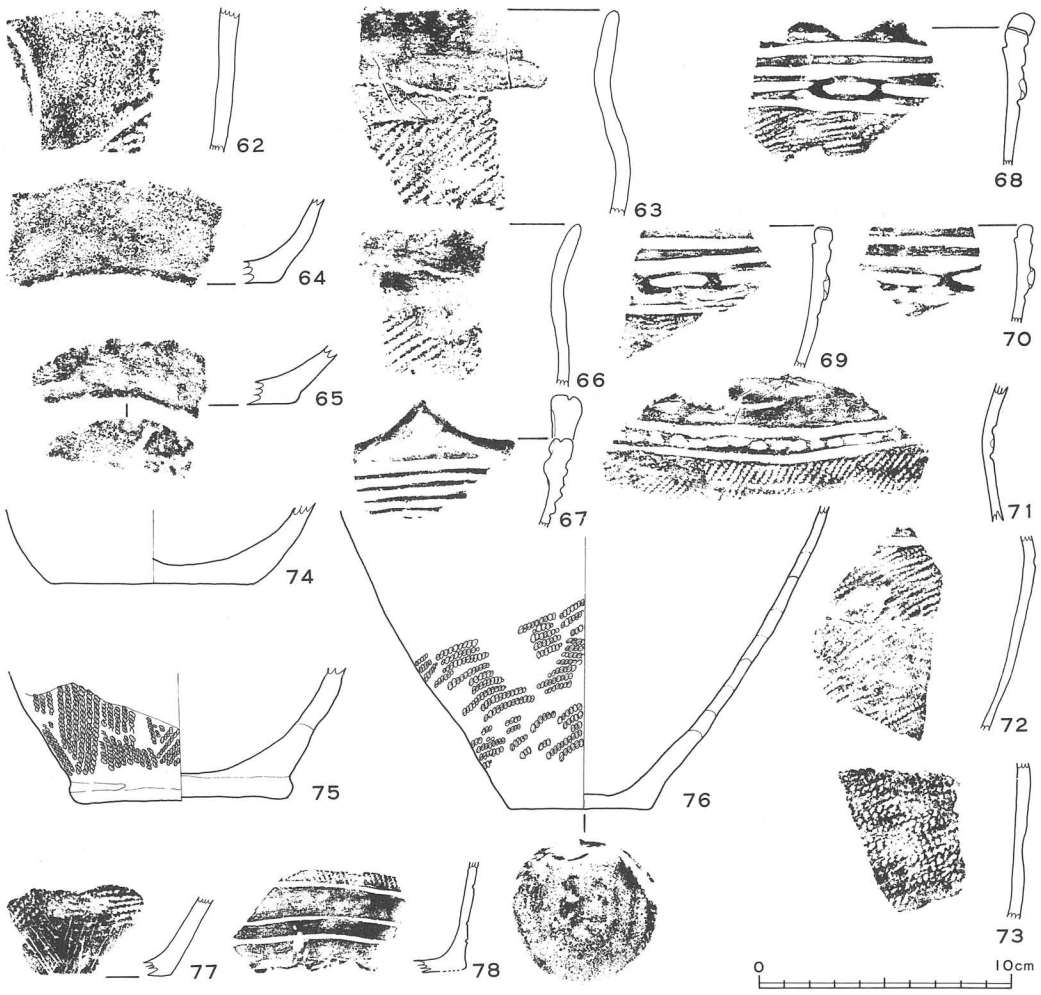
挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量（cm） 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第34図	39	A 2 － 4	深鉢	口縁部	－	22.0	22.0	－	0.4	ヘラミガキ	縄文	黒褐色	黒褐色	7 － 2	口唇部に刻目,B型小突起
	40	A 2 － 4	深鉢	口縁部	－	27.4	27.4	－	0.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	黒褐色	9 － 4	
	41	A 3 － 4	浅鉢	底部	－	－	－	6.8	0.7	ナデ	櫛引掻状文	明褐色	橙色	8 － 5	
	42	A 2 － 4	深鉢	底部	－	－	－	7.7	0.7	ナデ	縄文	灰黄褐色	灰褐色	8 － 4	
	43	A 2 － 4	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.4	ヘラミガキ	縄文	明黄褐色	にぶい黄橙色	9 － 2	口唇部にA型山形突起,沈線
	44	A 2 － 4	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.4	ヘラミガキ	縄文	黒褐色	黒褐色	9 － 6	口唇部に刻目
	45	A 2 － 4	浅鉢	口縁部	－	－	－	－	0.3	ヘラミガキ	縄文	橙色	浅黄橙色	10 － 4	口唇部に連続山形突起
	46	A 2 － 4	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙色	橙色	10 － 9	
	47	A 2 － 4		胴部	－	－	－	－	0.4	ナデ	縄文	にぶい黄橙色	黒褐色		
	48	A 2 － 4		胴部	－	－	－	－	0.5	不明	縄文	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		
	49	A 2 － 4		胴部	－	－	－	－	0.4	ナデ	縄文	橙色	明赤褐色		

第34図　A 2 区第 4 層出土土器（41はA 3 区）



挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量（cm） 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第35図	50	B2－4，B3－4 D5－3	深鉢		22.2	19.6	19.6	6.0	0.4	ヘラミガキ	縄文	明褐色	灰黄褐色	8－1	口唇部にB型小突起，刻目，工字文
	51	B 2 － 4	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.4	ヘラミガキ	縄文	明黄褐色	明黄褐色	9－7	口唇部に山形突起沈線
	52	B 2 － 4	小鉢	口縁部	－	－	－	－	0.3	ヘラミガキ	縄文	にぶい黄橙色	褐色	10－5	
	53	B 2 － 4	浅鉢	口縁部	－	－	－	－	0.4	ナデ	ヘラミガキ	橙色	橙色		口唇部に刻目
	54	B 2 － 4	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	ナデ	ヘラミガキ	橙色	にぶい橙色		
	55	B 2 － 4	浅鉢	口縁部	－	－	－	－	0.3	ナデ	撚糸文	橙色	にぶい黄橙色		
	56	B 2 － 4	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	ミガキ	縄文	にぶい橙色	にぶい黄橙色		
	57	B 2 － 4	浅鉢	口縁部	－	－	－	－	0.6	不明	縄文	にぶい黄橙色	浅黄橙色		口縁部に列点風刻線
	58	B 2 － 4	鉢	胴部	－	－	－	－	0.4	ナデ	縄文	にぶい黄橙色	褐灰色		
	59	B 2 － 4	深鉢	底部	－	－	－	6.8	0.7	ナデ	縄文	浅黄橙色	橙色	図版8－8	
	60	B 2 － 4	浅鉢	底部	－	－	－	推6.6	0.7	不明	ナデ	浅黄橙色	明黄褐色		
	61	B 2 － 4	浅鉢	底部	－	－	－	－	0.7	ナデ	ヘラナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色		

第35図　B 2 区第 4 層出土土器



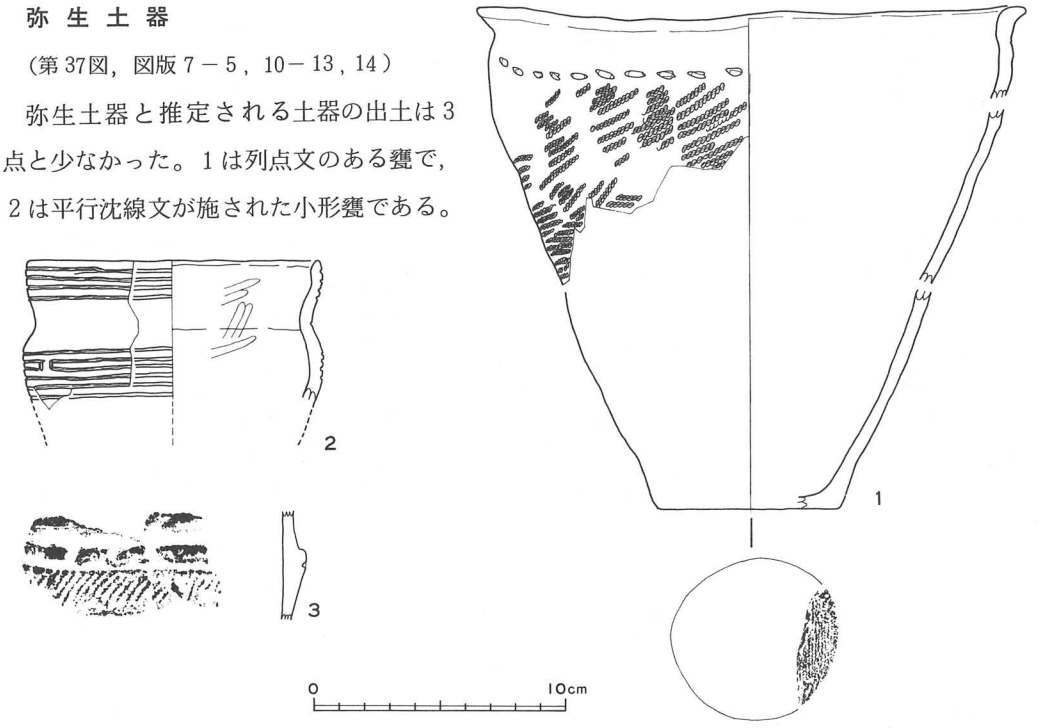
挿図番号	出器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量（cm） 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	外面	色調 内面	外面	図版番号	備考
第36図	62	C3－砂層	深鉢	胴部	－	－	－	－	0.6	ナデ	想定沈線文	にぶい黄褐色	明褐色		
	63	D5－4	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	ナデ	縄文	橙色	にぶい褐色	10－3	
	64	D3－3	深鉢	底部	－	－	－	－	0.5	不明	不明	明赤褐色	明赤褐色		2次加熱
	65	D3－3	浅鉢	底部	－	－	－	推8.2	0.5	不明	不明	橙色	明赤褐色		2次加熱
	66	E4－黒砂土	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	ナデ	縄文	明褐色	にぶい褐色		
	67	E5－黒砂土	鉢	口縁部	－	－	－	－	0.4	ヘラミガキ	ナデ	灰白色	橙色	9－5	口唇部A型山形突起，沈線
	68	E4－5	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	ミガキ	縄文	橙色	浅黄橙色	9－1a	工字文，口唇部にB型突起，刻目
	69	E4－5	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	ミガキ	縄文	橙色	浅黄橙色	9－1b	工字文，口唇部に刻目
	70	E4－5	深鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	ミガキ	縄文	橙色	にぶい橙色	9－1c	工字文，口唇部に刻目
	71	E4－5	深鉢	口縁部 胴部	－	－	－	－	0.5	ヘラミガキ	縄文	にぶい褐色	にぶい橙色	9－3	列点文
	72	E4－5	深鉢	胴部	－	－	－	－	0.4	ヨコナデ	縄文	橙色	橙色		
	73	E5－7	－	胴部	－	－	－	－	0.4	ナデ	縄文	明褐色	浅黄橙色		
	74	E4－6	深鉢	底部	－	－	－	7.7	0.7	－	－	橙色	明赤褐色		
	75	E4－6	深鉢	底部	－	－	－	5.5	0.7	ナデ	縄文	暗褐色	明赤褐色	8－4	2次加熱のため剝離
	76	不明	－	胴部 底部	－	－	－	5.6	0.4	－	－				
	77	不明	－	底部	－	－	－	－	0.6	ナデ	縄文	灰褐色	橙色		胴部下部に刻線
	78	不明	－	底部	－	－	－	－	0.3	ナデ	ヘラミガキ	にぶい褐色	黒褐色		平行沈線

第36図　C～E区出土土器

弥 生 土 器

（第37図，図版７－５，10－13，14）

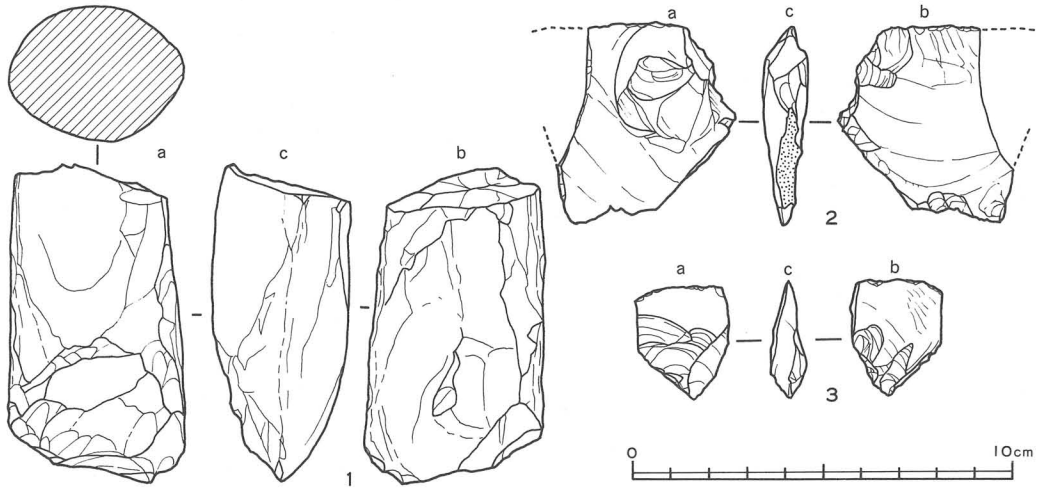
弥生土器と推定される土器の出土は３点と少なかった。１は列点文のある甕で，２は平行沈線文が施された小形甕である。



挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量（cm） 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第37図	1	C5－6，D5－4	甕		20	21.6	21.6	7.0	0.5	ヘラミガキ	縄文	暗褐色	明褐色	7－5	頸部に列点文あり
	2	D 4 － 3	小形甕	口縁部	－	11.5	12.0	－	0.5	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ	黒色	明赤褐色	10－13	
	3	不明	鉢	口縁部	－	－	－	－	0.5	不明	ヨコナデ 縄文	明褐色	明褐色	10－14	隆常，刺突文あり

第37図　出土弥生土器

石　　器（第38図，図版14－1～3）



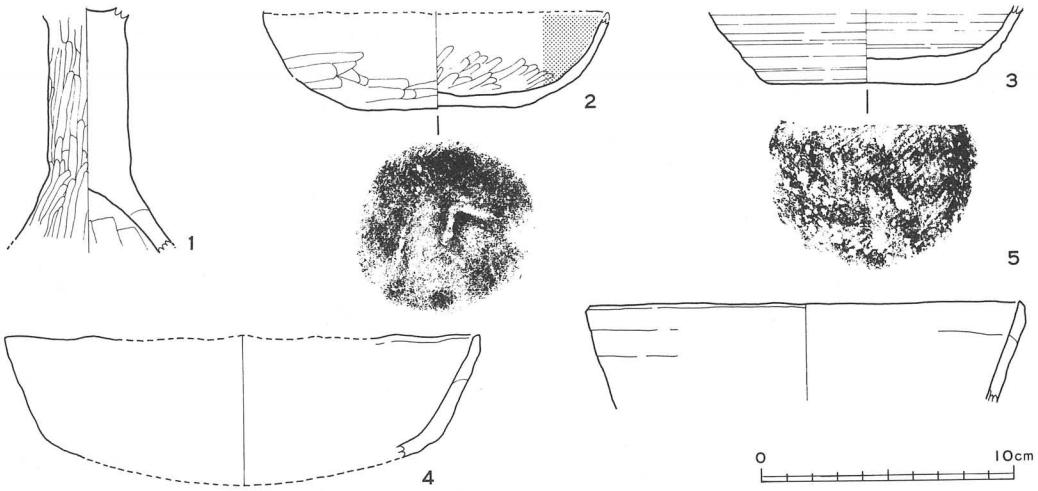
第38図　出土石器

挿図番号	番号	種別	石質	大きさ(cm) 長軸	短軸	厚さ	出土地区 地区－層位	図版番号	備考
第38図	1	磨製蛤刃石斧		8.4	4.7	3.5	A 2 － 4	14 － 1	a面に剝離痕，頭部破損
	2	ブレイド	頁岩	5.3	4.5	1.2	C 3 － 4	14 － 2	b面下端にリタッチあり
	3	刃器	頁岩	3.0	2.4	1.0	B 2 － 4	14 － 3	b面左下端に2次的剝離痕あり

発掘区内から，磨製の蛤刃石斧など3点の石器が出土した。その他剝片が数点見られた。

土師器(第39図1，2，4，5，図版11－7，3)

高坏脚部(1)1点，坏(2，4，5)3点が出土した。高坏脚部は外面がタテにヘラケズリされており，坏(2)は底部がヘラケズリされ，ヘラミガキ後内面が黒色処理されている。

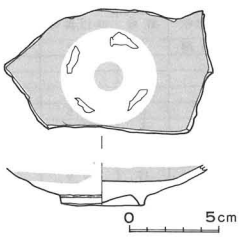


挿図番号	土器番号	出土地区 地区－層位	種別	器種	法量(cm) 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	外面	色調 内面	外面	図版番号	備考
第39図	1	E 5 － 4	土師器	高坏脚部	－	－	－	－	－	－	ヘラミガキ	－	明赤褐色	11 － 7	
	2	F 5 － 2	土師器	坏	推3.8	推13.8	推13.8	7.2	0.4	ヘラミガキ 黒色処理	ヘラミガキ	黒色	明褐色	11 － 3	底部ヘラケズリ
	3	表採	須恵器	坏	－	－	－	7.0	0.4	ロクロ	ロクロ	灰白色	黄灰色	11 － 2	底部静止糸切り
	4	E 2 － 2	土師器	坏	推6.0	18.8	18.8	－	0.5	不明	不明	明褐色	明褐色		
	5	E 2 － 2	土師器	坏	－	17.4	17.4	－	0.4	ミガキ	－	明褐色	明黄褐色		2次的加熱痕あり

第39図　土師器・須恵器

須恵器(第39図3，図版11－2)

内外面ロクロ調整された坏が採集された。底部を静止糸切りで切り離したのち，周辺部をヘラケズリしている。



緑釉陶器(第40図，図版14－4)

高台の坏が1点出土した。内外面ともロクロ調整後に緑釉が

挿図番号	出器番号	出土地区 地区－層位	器種	部位	法量(cm) 器高	口径	最大径	底径	器厚	調整 内面	外面	色調 内面	外面	図版番号	備考
第40図	1	D 4 － 3	坏	体部底部	－	－	－	4.5	0.4	ロクロ・施釉	ロクロ・施釉	青緑	青緑	14 － 4	陶枕の痕跡あり

第40図　緑釉陶器

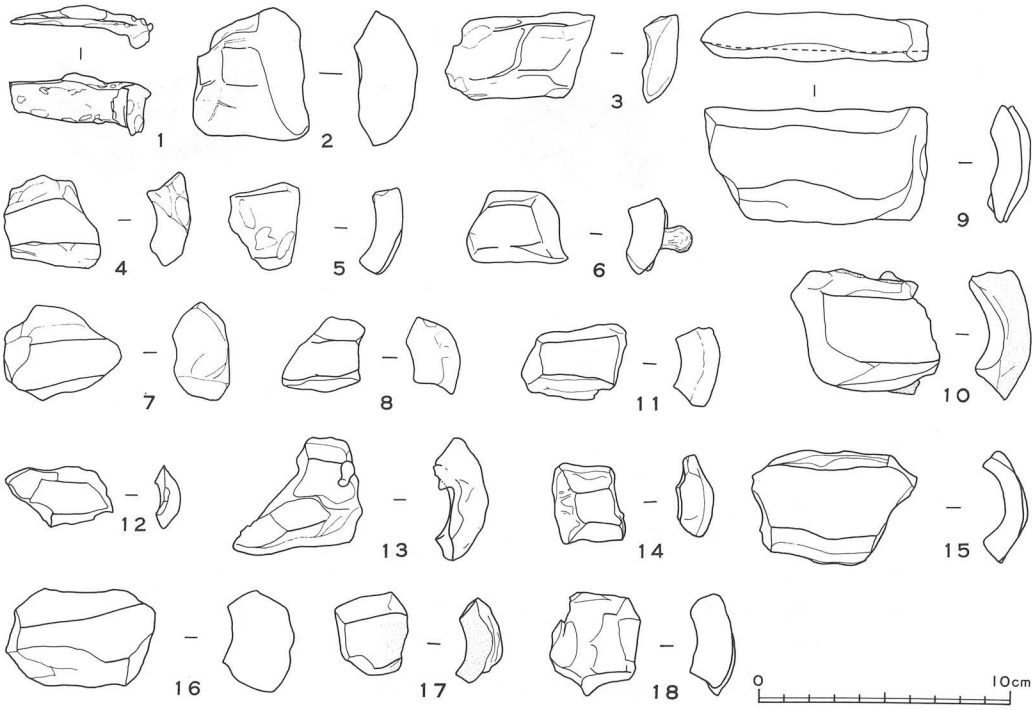
施されている。高台内側はロクロ使用で1回で削り取られており，底面もロクロ使用でヘラで切り離されている。また，高台底面4カ所に陶枕の痕跡があった。

鉄　製　品(第41図1，図版14－5)

D3区2層から，刀子状の鉄製品が1点出土した。途中でほぼ直角に曲がっている。炭素含有量の極めて少ない鍛造品である。

吹子の羽口(第41図2～19，図版14－6～11)

D1区，E2区を中心に17個の羽口片が出土した。いずれも縦に割れた破片で，耐火粘土としては良好といえない胎土で成形されている。内面は棒を引き抜いたのか，軸方向に滑らかに仕上げられており，外面はヘラケズリされている。鉄滓付着のものが5片あった。



挿図番号	番号	羽口番号	出土地区 地区一層位	法量(cm) 内径	外径	器厚	色調 内面	外面	図版番号	備考
第41図	2	羽1	C2－3	2.6	6.6	2.0	褐色	灰色		
	3	羽2	D1－3	2.8	6.0	1.6	褐色	明褐色	14－8	スサ入り
	4	羽3	D1－3	2.8	6.0	1.6	明褐色	赤褐色	14－9	スサ入り
	5	羽4	D1－3	3.0	6.0	1.5	褐色	黄褐色		
	6	羽5	D1－3	2.6	6.0	1.2	明褐色	明褐色		鉄滓付着
	7	羽6	D1－3	2.8	6.8	2.0	褐色	褐色		
	8	羽7	D1－3	2.8	6.4	1.8	褐色	褐色		
	9	羽8	E2－2	3.6	6.0	1.2	赤褐色	赤褐色	14－6	
	10	羽9	E2－2	3.0	6.2	1.6	赤褐色	灰黒色	14－7	
	11	羽10	E2－2	3.0	5.8	1.4	褐色	灰黒色	14－10	
	12	羽11	E2－2	2.8	4.4	0.8	灰黒色	黒色	14－11	
	13	羽12	表採	3.4	6.4	1.5	灰黒色	赤褐色		鉄滓付着・スサ入り
	14	羽13	表採	2.8	5.2	1.2	黒褐色	赤褐色		鉄滓付着
	15	羽14	表採	3.4	5.0	0.8	赤褐色	灰色		鉄滓付着
	16	羽15	表採	3.4	8.0	2.3	赤褐色	灰色		
	17	羽16	表採	3.4	6.0	1.3	赤褐色	赤褐色		鉄滓付着
	18	羽17	表採	3.6	6.8	1.6	赤褐色	灰色		
	19	羽18	表採	3.6	8.0	2.2	黒褐色	赤褐色		

第41図　出土鉄製品・羽口

III. 考　　察

2次にわたる調査によって検出された遺構と出土遺物について，II章でその概略を述べた。この章では，その成果に基づいて若干の考察を行うこととする。尚，製塩土器と鉄滓，それに焼礫群については，それぞれ一項を設けた。

1．土器の年代

縄文土器

深鉢，鉢，浅鉢，注口土器が出土した。深鉢が多く，装飾的な精製土器より実用的で非装飾的な粗製土器が多かった。資料が少ないので，深鉢の口縁部資料で年代を考察する。

深鉢の口縁部で図化した資料は，19点と数少なかったが，口縁部，頸部の文様で分類したものを第1表に示した。口唇部，口縁部に文様をもつもの(A類)ともたないもの(B類)に二分した。

A類の中で，工字文の施文されているもの(22, 50, 68～70)はすべて，口縁部にB字形突起をもっていた。工字文のないものには，口縁部に刻み目をもち，頸部に2～5条の沈線が平行に走り，刺突文が施文されたもの(44)，口唇部に沈線のあるA字形突起をもつもの(10, 67, 43, 51)がある。また，A類の深鉢の口縁部裏面には，一条の沈線が施されている。

B類で，頸部に文様のないもの(B－II)の口縁部は，くの字に外反する甕に近い器形のもの(40, 46, 63, 66)と直立のもの(4, 54)とがある。4の頸部に軽い段がある。B－Iには頸部に浅い沈線が施され，胴部の文様帯と画する。

第1表　口縁部資料による深鉢の分類

口唇部・口縁部の文様			頸部の文様	土器番号
A類 文様をもつもの	I. 口縁部にA字形突起をもつもの	口唇部に沈線をもつもの	ⓐ平行な沈線をもつもの	⑩ ⑰
			ⓑ平行な沈線，刺突，文をもつもの	㊸ ㊶
	II. 口唇部にB字形突起をもつもの	口唇部に刻み目をもつもの	ⓐ工字文をもつもの	㊿ ㊽～㊿
			ⓑ平行な沈線をもつもの	㊴
		口唇部に刻み目をもたないもの	ⓒ工字文をもつもの	㉒
	III. 口唇部に刻み目をもつもの		平行な沈線，刺突文をもつもの	㊹
B類 文様をもたないもの			I. 縄文，浅い沈線をもつもの	21，56
			II. 文様をもたないもの	4, 40, 46, 54, 63, 66

（注）　土器番号○は，口縁部裏面に一条の沈線のあるもの

A類の文様帯は，口縁部周辺に集約されており，B類の形態の特徴とも合せ，七ケ浜町二月田貝塚出土の第11類土器[註1]に類似している。大洞A式に比定することができよう。

浅鉢と鉢は，深鉢と伴出しており，大洞A式に比定するものと考えられる。さらに，縄文を全然もたず，肩部から底部にかけて格子状線刻文が鋭く施文された鉢(5)や，斜格子状に線刻された鉢(25)，口唇部に指頭による押圧文のある線刻文をもつ鉢(26)，櫛状工具による引掻文をもつ鉢(39)が，上記深鉢に伴出していることを注意しておきたい。

弥生土器

第37図1の甕は，頸部がくびれて，口縁部が強く外反している。頸部には右から横方向に列点文が施され，胴部には縄文が施されている。底面には布目痕がある。これは桝形囲式に比定[註2]される。

同2の小形甕は，頸部がくの字にくびれ，口縁部はやや内湾している。外面はヘラミガキされ，内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。口縁部に4本の沈線が平行に走り，肩部から胴部にかけて工字文風の文様と沈線文が平行に施されている。工字文風の文様には縄文晩期後葉の名残りが見られ，大泉式に併行するものか。

同3の鉢形土器は，口唇部を欠くが，口縁部の近くに隆帯が走り，刺突文が見られる。地文は縄文である。天王山式に比定[註3]されるものと推定できる。

土師器

竪穴住居跡の堆積層から出土した小形甕(第30図3)は，頸部がくびれ，口縁部は強く外反している。口縁部は内外とも横ナデされ，胴部は外面がヘラミガキ，ヘラナデされ，内面はヘラミガキされている。頸部に段が認められず，住社式のもの[註4]と推定される。

第39図2の坏は，ロクロを使用していないもので，内外面とも段等の変化が見られない。全面にヘラミガキが施され，内面はヘラミガキののち黒色処理されている。これは，宮崎町早風遺跡出土の坏D類[註5]と類似しており，国分寺下層式に比定される。

同1の高坏脚部は，外面全体を上から下へヘラミガキされ，内面にはアテ痕が見られる。古墳時代のものと推定される。同4の坏は磨滅がひどく，技法は不明だが，器形的に国分寺下層式か。また，同5の鉢形土器は，胴部が直線的に外傾し，口縁部には丸味がない。外面に輪積痕が見られ，内面にはヘラミガキの痕跡がある。バケツ形の製塩土器片と思われる。

須恵器

第30図1は，竪穴住居跡床面から出土した平底の坏である。ヘラ切りでロクロから離されたのち，手持ちヘラケズリで調整されている。調整は，底面を一定方向にヘラケズリしてから，底部周辺を4回ヘラケズリして仕上げている。この特徴をもつ坏には，8世紀前半～中葉の年代が与えられている[註6]。

表採の坏(第39図3)は，ロクロ静止糸切りののち，底部周辺に手持ちヘラケズリ調整されている。8世紀中葉に編年[註7]されている。

註

1) 塩釜女子高社会部 「宮城県七ケ浜町二月田貝塚第二次発掘調査報告」『貝輪7』
2) 伊藤玄三 「弥生文化の発展と地域性6東北」『日本の考古学Ⅲ』 1966 河出書房
3) 中村五郎 「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』 1976 寧楽社
佐藤信行 「上ノ原A遺跡出土土器の編年的位置」『上ノ原A遺跡』 1978 一迫町教育委員会
4) 宮城県文化財調査報告書第35集 『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ(岩切鴻ノ巣遺跡)』 1974 宮城県教育委員会
5) 宮城県宮崎町文化財調査報告書第3集 『早風遺跡発掘調査報告書』 1980 宮崎町教育委員会
6) 岡田茂弘・桑原滋郎 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『多賀城跡調査研究所紀要Ⅰ』 1976 <第2類b>に該当。
7) 同上 <第 4 類>に該当。

2．遺構の年代

貝塚の年代

発見された五つの貝塚のうち，土師器の細片を含む第1貝塚が最も新しい。第1貝塚は，竪穴住居跡の堆積層の上に盛り土した整地層を掘り込んで形成されているので，当然，竪穴住居廃棄後のものである。住居跡は，後述するように，8世紀前半～中葉と推定されるから，第1貝塚の形成年代は8世紀中葉以降であろう。

a－a′断面図(第4図)を見ると，第3貝塚と第5貝塚は8a層の下にあり，ほぼ同年代に形成されたものと思われる。第5貝塚から出土した土器(第8図)は縄文晩期の特徴をもっている。また，8aの層は，A2区，B2区では第4層に相当しており，これらの層から出土した土器(第34図，第35図)が，前項で述べた如く，大洞A式にあたるものと推定されるので，第3貝塚と第5貝塚は，縄文晩期後葉に形成されたと見ることができる。

第2貝塚は，第3貝塚形成後につくられた溝状遺構の堆積層の上に一部重複して形成されている。第3貝塚より新しいが，第3貝塚の上層の第5層の下にあり，時期的に大きな隔たりはないと考えられる。

第4貝塚は，貝塚およびその脇から出土した土器が，前項で大洞A式に比定されたことや貝塚がB2区第4層と同じ層にあることから，縄文晩期後葉に形成されたものと考えられる。

以上のことから，第3～第5貝塚が縄文晩期後葉に，少し遅れて第2貝塚が，そして，第1貝塚は奈良時代中期以降に形成されたものと推定される。

土器集積地の年代

びっしりと固まって堆積していた赤色粗面尖底土器は，前述したように，縄文晩期の製塩土器である。さらに，伴出した深鉢(第25図，21，22)は，前項で検討した結果，大洞A式に比定されるものと推定された。土器集積地は縄文晩期後葉の製塩土器の捨て場と考えられる。

焼礫群の年代

焼礫群からは3点の土器片(第15，16図)しか出土しなかった。縄文晩期から弥生時代のものと思われるが，決め手となる文様がなく，口縁部も欠けているので，遺物からの年代判定はむずかしい。他の遺構との層位関係で年代を推定してみる。

焼礫群R1は，第2貝塚上の固くしまった堆積土の上にあり，第2貝塚より新しいが，検出状況から見て，第2貝塚の時期より大きく隔たるとは思えない。縄文晩期後葉以降のものだろう。

つぎに，R10は，a－a′断面図(第4図)から明らかなように，第5貝塚の下にあった。第5貝塚の形成より古い。縄文晩期後葉かそれ以前のものと思われる。

m－m′断面図(第23図)，n－n′断面図(第24図)を見ると，R6，R8の基盤が，製塩土器を含む土器集積地の層と同じ層であることがわかる。このことから，土器集積地の形成時期と同じ縄文晩期後葉のものと推定される。

他の焼礫群も，R6，R8と同じ層と見られるので，やはり縄文晩期後葉のものだろう。

竪穴住居跡の年代

D1区で検出された竪穴住居跡の貼り床面から，須恵器の坏(第30図1)が出土し，前項で検討した結果，8世紀前半～中葉の坏と判明した。カマドわきからは土師器の甕片，煙出し穴から土師器が出土しているが，時代は不明である。また，堆積層から住社式と推定される土師器の甕(第30図3)が発見された。矛盾があるが，貼り床面から出土した須恵器坏をもって，住居跡の年代としたい。奈良時代の遺構と推定できる。

その他の遺構の年代

E0，F0区の溝およびその周辺のピット群(第33図)は，削平されており，溝やピットに堆積している土層も新しいものである。年代不明，性格不明の遺構である。

E1～F1区で検出された3つの竪穴遺構も，他の遺構との重複もないし，出土土器も第3号竪穴遺構周辺のP.3からの土師器片1点だけなので，年代の判断はむずかしい。

D0～E0区で検出された35個のピット群は，竪穴住居を廃棄したのちに整地された層に掘られているが，第1貝塚との先後関係は不明である。　P.18，P.19から土師器片が出土しているが，小破片なので年代判定の決め手にはならない。

以上をまとめると，鬼ノ神山貝塚の各遺構の推定年代は第2表のようになる。

第2表　鬼ノ神山貝塚検出遺構の推定年代

時代	土器型式	発見された遺構	出土遺物
縄文晩期	大洞B 大洞BC		
	大洞C1 大洞C2		
	大洞A 大洞A′	第3，第5，第4 貝塚 第2 貝塚 土器集積地 R11 焼礫群 R2～R10 焼礫群 R1 焼礫群	深鉢・浅鉢 鉢・注口土器・製塩土器
弥生時代	小泉式 桝形囲式 円田式 十三塚式 天王山式		小形甕 甕 鉢
古墳時代	塩釜式		
	南小泉式		
	住社式 栗囲式		土師器甕 高坏脚部
奈良時代	国分寺下層式	竪穴住居跡 ピット群 竪穴遺構？	土師器坏 須恵器坏
平安時代	表杉ノ入式	第1貝塚	羽口 鉄滓

3．製塩土器について

出土製塩土器の形

土器集積地を中心に出土した赤色の粗面土器が，製塩土器であることはすでに述べた。

細片が多く，図化できたのは少なかった(第26，27図)がいくつかに分類できた。

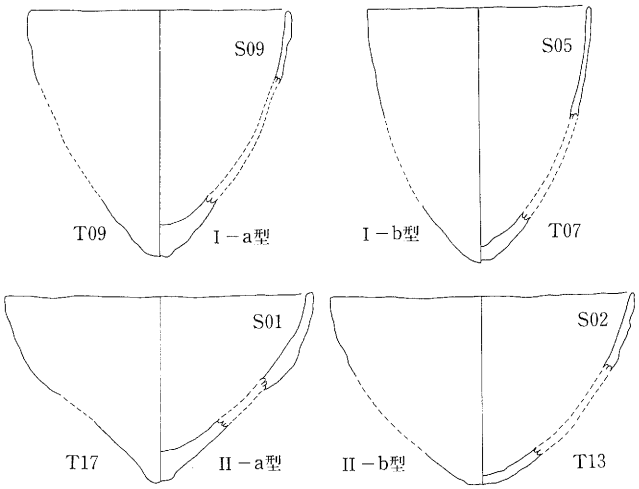
口縁部は，器厚が2～4mmと薄く，内弯しながら外傾するもの(S01，S02，S03，S07など)と，内弯しながらほぼ直立するもの(S04，S05，S06など)の2種に分かれる。

底部は，尖底と平底がある。

平底は，4点しか出土せず，底径が推定2.5～7.5cmとまちまちである。あてはまる口縁部はないが，深鉢形のものと推定される。

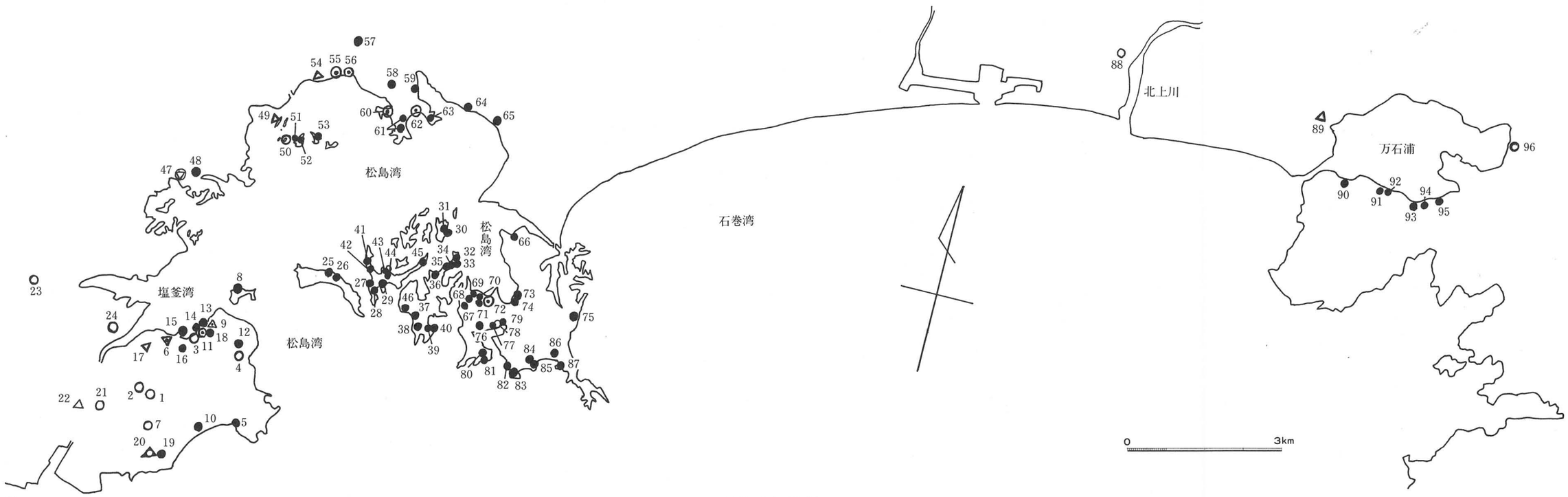
尖底には，底径が1cm内外の小さな平底風のもの(T02，T11，T26など)も含めた。内面の底部が砲弾状につぼめられ，尖底そのものと基本的に変わらない形態だからである。尖底土器は，底部が鋭角のもの(T03，T04，T05など)と鈍角のもの(T13，T24など)に二分される。

口縁部と底部を組合せて22種類を図上復元してみた。口縁部の断面のカーブと，底部の断面のカーブを円滑につなぐ方法で作図したので，途中の変化があれば全くちがうものになる。あくまでも推定図であるが，第42図Ⅰ－aに類似した深鉢形の器形が最も多く6割を占めた。口径は11～16cmで，器高は推定9～14cmである。



第42図　製塩土器推定復元例（1/4）

従来，平底の製塩土器は，大洞A，A′式に併行する尖底土器から変化したもので，きわめて小さな平底は別にして，弥生時代以降の遺物と言われてきた。[註1)] ところが，藤沼邦彦氏は，大洞C_2式の時期の「仙台湾沿岸の製塩土器は，高さ20～30cmの単純な形の深鉢で，小さな平底をもつ。(中略)この土器は大洞A式以降になると，平底から尖底，もしくはきわめて小さい平底に変化する[註2)]」と述べ，平底が尖底に先行する見解を出している。すると，仙台湾における製塩土器の形はつぎのように変化したと言えるだろう。



○縄文時代（晩期）
◎縄文～弥生時代
△弥生時代
◎縄文～奈良・平安時代
●奈良・平安時代

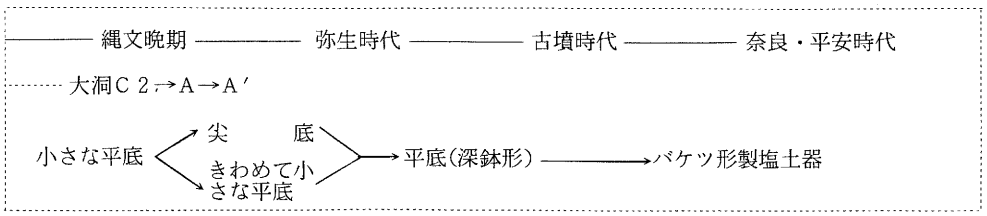
番号	出土遺跡	所在地	推定年代
①	鬼ノ神山貝塚	七ケ浜町菖蒲田浜字鬼ノ神山	縄文(晩期)
2	野山遺跡	七ケ浜町菖蒲田浜字野山	縄文(晩期)
3	林崎貝塚	七ケ浜町吉田浜字林崎囲	縄文(晩期)
④	二月田貝塚	七ケ浜町吉田浜字二月田	縄文(晩期)
5	表浜貝塚	七ケ浜町花淵浜字表浜	平安
⑥	東宮貝塚	七ケ浜町東宮浜字寺島	弥生～平安
7	阿賀沼貝塚	七ケ浜町菖蒲田浜字小塚	縄文(晩期)
8	馬放島貝塚	七ケ浜町馬放島	平安
9	清水洞塚	七ケ浜町代ケ崎浜字清水	弥生～平安
⑩	長須賀遺跡	七ケ浜町花淵浜字長須賀	平安
⑪	水浜貝塚	七ケ浜町代ケ崎浜字水浜	弥生～平安
12	神明遺跡	七ケ浜町吉田浜字神明	奈良・平安
13	土浜A貝塚	七ケ浜町代ケ崎浜字清水土浜	奈良・平安
14	土浜B貝塚	七ケ浜町代ケ崎浜字清水土浜	奈良・平安
15	丑山遺跡	七ケ浜町東宮浜字丑山	奈良・平安
16	小友遺跡	七ケ浜町東宮浜字小友	奈良・平安
17	小畑貝塚	七ケ浜町東宮浜字要害	弥生
18	清水貝塚	七ケ浜町代ケ崎浜字清水	奈良・平安
19	諏訪神社前遺跡	七ケ浜町菖蒲田浜字林合	奈良・平安
20	笹山貝塚	七ケ浜町松ケ浜字笹山	縄文，弥生
21	大代貝塚	七ケ浜町	縄文(晩期)
22	大代囲洞窟	多賀城市大代五丁目	弥生
23	塩釜神社境内	塩釜市一森山	縄文(晩期)
24	一本松貝塚	塩釜市一本松	縄文(晩期)
25	すりす浜遺跡	塩釜市浦戸桂島字すりす浜	平安
㉖	梅ケ浜貝塚	塩釜市浦戸石浜字梅ケ浜	平安
27	元屋敷貝塚	塩釜市浦戸野々島	平安
28	毛無崎囲貝塚	塩釜市浦戸野々島字毛無崎囲	平安
29	吹越囲B貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字吹越囲	平安
30	朴島南貝塚	塩釜市浦戸朴島字窪沢	平安
31	朴島北貝塚	塩釜市浦戸朴島字窪沢	平安
32	寺崎貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字寺崎	平安
33	東三百浦囲貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字東三百浦囲	平安
34	東三百浦囲A遺跡	塩釜市浦戸寒風沢字東三百浦囲	平安
35	東三百浦囲B遺跡	塩釜市浦戸寒風沢字東三百浦囲	平安
36	虎杖浜貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字虎杖浜	平安
37	前浜囲貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字前浜囲	平安
38	平戸貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字平戸	平安
39	平戸C貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字平戸	平安
40	いしやり浜貝塚	塩釜市浦戸寒風沢	平安
41	根崎貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字根崎	平安
42	平和田囲遺跡	塩釜市浦戸野々島字平和田囲	平安
43	長浜貝塚	塩釜市浦戸野々島字長浜	平安
44	新田貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字新田	平安
45	薬ケ崎貝塚	塩釜市浦戸野々島字薬ケ崎	平安
46	うなり田貝塚	塩釜市浦戸寒風沢字うなり田浜	平安
47	浜田洞窟	利府町赤沼字井戸尻	縄文～弥生
48	井戸尻遺跡	利府町赤沼字井戸尻	奈良・平安
49	福浦島貝塚	松島町松島字福浦島	弥生
50	引通島遺跡	松島町松島字引通島	縄文(晩期)

番号	出土遺跡	所在地	推定年代
51	焼島貝塚	松島町松島字焼島	奈良・平安
52	焼島貝塚	松島町松島字焼島	奈良・平安
53	九ノ島貝塚	松島町松島字九ノ島	奈良・平安
54	鷺鳥貝塚	松島町磯崎字鷺鳥	弥生
㊺	西ノ浜貝塚	松島町磯崎字西ノ浜	縄文～平安
㊻	館ケ崎遺跡	松島町磯崎字西ノ浜	縄文～平安
57	元手樽製塩跡	松島町元手樽	奈良・平安
58	銭神製塩跡	松島町手樽字銭神	奈良・平安
59	新田遺跡	松島町手樽字新田	平安
60	銭神貝塚	松島町手樽字銭神	縄文～平安
61	堀籠遺跡	松島町手樽字堀籠	奈良・平安
62	大浜貝塚	松島町手樽字大浜	縄文～平安
63	名込遺跡	松島町手樽字名込	奈良・平安
64	古浦貝塚	松島町手樽字七十里	奈良・平安
65	東遺跡	鳴瀬町大塚字東	奈良・平安
66	江ノ浜貝塚	鳴瀬町宮戸字江ノ浜	奈良・平安
67	蛤浜製塩遺跡	鳴瀬町宮戸字蛤浜	奈良・平安
68	後田A遺跡	鳴瀬町宮戸字後田	平安
69	後田B遺跡	鳴瀬町宮戸字後田	平安
70	大畑貝塚	鳴瀬町宮戸字大畑	平安
71	大畑遺跡	鳴瀬町宮戸字大畑	平安
72	里浜貝塚	鳴瀬町宮戸字里浜	縄文～平安
73	西大振場遺跡	鳴瀬町宮戸字西大振場	平安
74	深海遺跡	鳴瀬町宮戸字深海	平安
75	小室貝塚	鳴瀬町宮戸字小室	平安

番号	出土遺跡	所在地	推定年代
76	萱和田遺跡	鳴瀬町宮戸字萱和田	古墳～平安
77	大浜貝塚	鳴瀬町宮戸字大浜	奈良・平安
78	大浜A遺跡	鳴瀬町宮戸字大浜	縄文
79	大浜B遺跡	鳴瀬町宮戸字大浜	—
80	大メカル山貝塚	鳴瀬町宮戸字大目軽山	平安
81	横根遺跡	鳴瀬町宮戸字横根	平安
82	田尻A遺跡	鳴瀬町宮戸字田尻	奈良・平安
83	田尻B遺跡	鳴瀬町宮戸字田尻	奈良・平安
84	西権助遺跡	鳴瀬町宮戸字西権助	平安？
85	三サ河B遺跡	鳴瀬町宮戸字三サ河	奈良・平安
86	元屋敷遺跡	鳴瀬町宮戸字元屋敷	平安
87	大浜遺跡	鳴瀬町宮戸字大浜	—
88	永厳寺貝塚	石巻市羽黒町1	縄文(晩期)
89	垂水囲貝塚	石巻市渡波字垂水	奈良・平安
90	梨木畑貝塚	石巻市渡波字梨木畑	奈良・平安
91	胡桃浜貝塚	石巻市渡波字胡桃浜	奈良・平安
92	一本杉貝塚	石巻市渡波字須崎浜	奈良・平安
93	大浜遺跡	石巻市渡波字大浜	平安
94	屋敷浜貝塚	石巻市渡波字屋敷浜	平安
95	青木浜遺跡	石巻市渡波字青木浜	奈良・平安
96	沼津貝塚	石巻市沼津字出外	縄文？

註）番号○囲は製塩遺構が確認された遺構である。

第43図　宮城県における製塩土器出土分布図



この器形の変化はどうして起きたのだろう。特に，平底→尖底→平底という変化が生じたのは何故か。それなりの技術的な変化があったものと思われる。それは，製塩炉の形態の変化からかも知れない。あるいは，生産量の増大がその要因かも知れない。今後の課題の一つである。

製塩土器制作の技法

製塩土器の特徴は，器厚がきわめて薄いことと，内面がよく研磨されていることである。また，底部はヘラケズリされているものが多い。輪積痕が明瞭に残っている場合もある。

尖底土器をつくるにはまず，平底にしておいて，下から上へ輪積みをして，内面をアテ板などを使って強く押しつけたり，ヘラミガキをし，ていねいに仕上げる。底部は砲弾状に仕上げる。この時，ヘラケズリで成形したものもある。ついで，底部外面をヘラケズリで下から上へ成形してゆく。口縁部にはケズリの痕跡は見られないが，ナデ痕の認められるものがある。後藤和民氏の言う「洗い出し法」[註3)]がつかわれたどうかはわからない。

宮城県内における製塩土器出土地

宮城県内で，製塩土器が発見された遺跡を第43図に示す。[註4)]松島湾周辺に集中しており，ついで万石浦周辺で発見されている。いずれも，その時代の小さな入江の奥にあり，貝塚をともなう遺跡に多いのも特徴である。縄文，弥生時代の遺跡は少なく，奈良，平安時代に増加しており，社会的な変化，要因をうかがわせる。また，縄文晩期の遺跡を拠点にして拡大していくさまが，地図上から想像できる。

註

1）後藤勝彦 「東北に於ける古代製塩技術の研究」『宮城史学２』 1972
2）藤沼邦彦 「東北」『縄文土器大成④ 晩期』 1981 講談社
3）後藤和民 『縄文土器をつくる』(中央新書) 1980 中央公論社
4）宮城県文化財調査報告書73『宮城県遺跡地図・地名表』 1980 宮城県教育委員会 をもとに宮城県文化財調査報告書58「宮戸島貝塚群」『宮城県ほ場整備関連遺跡詳細分布調査報告書』 1978 宮城県教育委員会および註１）文献を参考にして作成。

4．焼礫群の性格について

鬼ノ神山貝塚で検出された焼礫群について，R1～R11の11支群に分けて前述した。これをまとめると，以下のようになる。

1) これらの焼礫群は，小さな入江の奥の，標高約2mの汀線に近い砂地に立地している。

2) 礫の間や礫群の周囲に，赤色の土器細片を含む黒色の灰層が広がっている。

3) R1～R4およびR9～R11の7支群は，楕円形・矩形のまとまりある平面形を有している。他方，R5～R8の4支群は不整形である。どの支群の表面も平らでない。

4) どの礫も強い火熱を受けて赤褐色に焼けており，脆くなって亀裂を生じたものが多い。

5) 焼礫群は，R9を除き，径が5～10cmの小さな円礫，角礫で構成されている。R9には，20cm前後の比較的大きな礫が使用されている。

6) 焼礫群からの土器片の出土は極めて少ない。

7) 焼礫群の下方の地点で，尖底部を主とする多くの製塩土器細片の堆積が検出された。

8) 伴出土器の編年から，焼礫群の形成年代は縄文晩期(大洞A)と推定される。

さて，これらの焼礫群は，どういう目的で何に用いられたのだろうか。その性格を考えてみたい。

まず，単なる流れ込み，あるいは廃棄であって，あるプランをもって設けられた遺構ではない，ということが想定される。3)でのR5～R8を見るとその可能性もある。しかし，少なくとも調査区内から，もとの遺構が検出されず，たとえ，流れ込みか廃棄としても，何に使用されたものが流れ込んできたのか，棄てられたのか不明である。しかも，どの支群もほぼ旧汀線に近い同一レベル上で検出されたことや，礫の堆積状態や灰層の範囲から見て，礫の多少の移動はあったろうが，全ての礫が流れ込んだものとか廃棄物とは考えられない。むしろ，検出された地点で一定の役割を果たした遺構と考えたい。

つぎに，礫がことごとく赤褐色に焼けていることから，炉跡を想定した。調理，暖房，照明のための炉は，縄文晩期にはすでに住居内に設けられているのが一般的である。ところが，焼礫群の周囲には，ⓐ住居跡のプランが見られず，ⓑ床面にあたる硬い層が検出されず，住居跡と認められる遺構はなかった。しかも，焼礫群は，住居に不適当な汀線に近い砂地にある。従って，住居内に設けられた炉跡とは考えられない。しかし，礫がボロボロになるくらい強い火熱を受けているので，火を焚いた跡であることはまちがいない。住居外で，特殊な用途につかわれた炉跡であろう。

次に，7)の製塩土器集積地とのかかわりから，製塩遺跡の中の一つの遺構という線を検討したいと思う。これまで，この両者の関係を避けて，焼礫群だけを取りあげたのには理由が

ある。1つは，縄文晩期に比定される製塩遺跡の調査報告の中に類例がないこと。もう1つは，焼礫群だけで何がわかるかを探るためで，その結果，特殊な用途の炉跡の可能性を示唆できた。しかし，第23，24図から明らかなように，層位的にも，この二者を切り離して考えるわけにはいかない。むしろ，結びつけて考えるのが自然であろう。また，鬼ノ神山貝塚が，製塩遺跡の地形的条件「背後に燃料木を供給するのに適した山や丘陵があることと，その時代の海浜に近く所在すること」[註1)]を充足して立地していることも傍証になろう。

製塩遺跡は，これまで発表されている発掘調査報告を見ると，①製塩炉，②製塩炉付属遺構，③作業場遺構，④製塩土器の捨て場などで構成されている。もっとも，これらすべてがまとめて検出されたことはほとんどない。④の製塩土器の捨て場をもって，製塩遺跡と称していることが多い。

この中で，③は，灰土を踏みしめた製塩炉周辺にひろがるタタキ面[註2)]のことだが，当遺跡からは検出されていない。製塩土器集積地は，前述したように④とみていい。従って，焼礫群は残る①②の可能性が強い。

しかし，発見された炉跡が①の製塩炉であることを証明するのは難しい。近藤義郎氏は，製塩土器との共存関係や他の遺構との関係から製塩炉と認められたものを6種類に分類[註3)]され[註4)]た。そして，松島湾等の製塩遺跡で検出され，製塩炉跡と報告されている灰土の拡がりについては，「これらが灰土による炉体の残骸であるのか，それとも放出された夥しい灰が他の物質と結合して固化したものか，いまのところ結論は下しがたい[註5)]。」と述べている。

第3表　製塩炉の分類（註3文献より作成）

種類		特徴	遺跡例
Ⅰ煎熬炉	a石敷炉K型	• 平面形は小判形，楕円形。 • 20～30 cm大の扁平な角礫が中心。 • 敷石面は平坦で壁面，堤あり。 • 炉底が一方に傾斜。	香川県喜兵衛島 南東浜遺跡など
	b石敷炉F型	• 平面形は長円形，隅丸矩形。 • 20～30 cm大の角礫，栗石。 • 敷石面は平坦で，壁面，堤はなし。 • 炉底はほぼ平坦	福井県船岡遺跡など
	c石敷炉X型	• 平面形は不整形。 • 石は大きさまちまちの角礫，円礫。 • 敷石面は凸凹で，すき間あり。 • 壁面，堤なし	福井県岡津遺跡など
	d石囲炉	• 石で側を囲った炉	山口県波雁が浜遺跡など
	e土堤炉	• 土砂を堤をめぐらした炉	岡山県王泊遺跡など
Ⅱ焼塩炉		• 壁体．天井部をもつ壁体の炉	香川県ナカンダ浜遺跡など

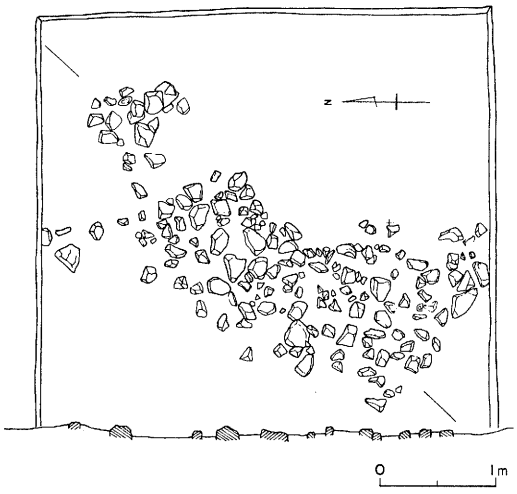
さて，鬼ノ神山貝塚からは，製塩炉跡とされる灰土(緻密な灰層)の拡がりが検出されず,製塩炉跡に想定できるのは焼礫群だけである。検出された焼礫群に類似した製塩炉跡は，福井県岡津遺跡の１～４号炉跡[註6]や吉見浜遺跡のＦ－２，Ｆ－10[註7]に見ることができる。第３表の＜石敷炉Ｘ型＞に分類されている。＜石敷炉Ｘ型＞は，他の石敷炉が，扁平な角礫や，栗石を密に敷いて表面を平らにした炉であるのに対し，「もと固定的に敷き並べられてあったものが破壊されたのか，それとも現状がもとの状態に近いものか，あるいは作業のたびに石を配し支えの如く置いたものか，何れとも判別しがたい[註8]」炉跡のことである。

Ｘ型の石敷炉が一定の平面プランをもたず，石組みが粗でまばらなのは，製塩土器の形態と関連があるからだろうと思う。岡津式製塩遺跡のばあいは，土器が丸底のため，「こうした石組みは丸底土器を固定させるための施設であり，この石組みがかまど的役割を果たしたと推定[註9]」されている。

また，吉見浜遺跡の土器は支脚を用いていて,「支脚を置いてから，それを支えるために配石した感」があり，そのため「一定のプランを有せず」「きわめて散漫な」敷石になっているのだと推定されている[註10]。

このように見てくると，鬼ノ神山貝塚の場合も，焼礫群を＜石敷炉Ｘ型＞の製塩炉跡とみることが可能である。出土した製塩土器がほとんど尖底土器だから，平らな敷石面に立てたり，砂に安定直立させるのは難かしく，石の間隙に尖底土器を据えたか，尖底部を砂にさしたててから，それを支えるために配石したかであろうと推定される。敷石は，熱を下に逃がさず，下部からの湿気もある程度遮断するという利点をもつ。

第44図　福井県岡津遺跡
４号炉跡（註６文献から）



第45図　福井県吉見浜遺跡Ｆ－２炉（註7文献から）

ところで，県内の製塩遺跡から，焼礫群に類したものの検出が皆無かというとそうではなく，塩釜市の梅ケ浜遺跡[註11]と松島町の館ケ崎遺跡[註12]で検出されているので一言触れておきたい。

梅ケ浜遺跡では，「遺構(製塩窯跡)の回りから特に，遺跡西側に顕著であるが幅30～40 cmもある赤く焼けた石の群列が検出[註13]」された。報告書ではその性格について何も言っていないが後藤勝彦氏は「窯跡中に見られる岩と同じく赤く焼けていた。窯跡を区画するものなのかも知れない[註14]」として製塩窯跡付属遺構の中に入れている。

館ケ崎遺跡について，加藤孝氏は「凝灰岩の割り石を底面一面に敷きつめて，窯の床を作った[註15]」と報告，割り石を製塩炉の敷設と見ている。発表された実測図[註16]を見ると，夥しい量の焼石が検出されたことがわかる。

後藤氏の製塩炉の分類では，炉(窯)の中の焼け石について余り触れられていないが，上記の二つの例を見るなら，石敷炉の可能性があるのではないか。今後の発掘例をまって，鬼ノ神山貝塚の焼礫群と，これらの焼け石との関連について再検討すべきだと思われる。

以上，焼礫群の性格について考察をすすめてきたが，以下の2点にまとめることができる。

(1) 焼礫群の性格を考える際，層位的にも土器集積地(製塩土器の捨て場)との関係を無視できず，従って，製塩遺構の一つと見ることができる。

(2) 縄文晩期の製塩遺跡で，現在まで類例は発見されていないが，製塩炉跡(石敷炉X型)である可能性が高いと思われる。

註

1) 石部正志「製塩遺跡」『考古資料の見方<遺跡編>』地方史マニュアル5所収　柏書房
2) 近藤義郎「土器製塩の話4・炉址」『考古学研究106』 1980 (考古学研究会)
3) 同　上
4) 後藤勝彦「東北に於ける古代製塩技術の研究」『宮城史学2』 1972
この中で，後藤氏は，不整形の楕円状か長方形状にひろがる緻密な灰層の堆積面上を製塩窯跡とし，<A型窯跡>薄紫色の緻密な硬い灰層のもの，<B型窯跡>明るい灰色の緻密な灰層のもの，の2型に細分している。
5) 註2に同じ
6) 「岡津製塩遺跡－第1次・第2次発掘調査報告－」 1980　福井県小浜市教育委員会
7) 若狭考古学研究会「吉見浜遺跡－若狭における土器製塩遺跡の研究－」 1974
8) 註2に同じ
9) 註6に同じ
10) 註7に同じ
11) 塩釜女子高社会部「宮城県塩釜市浦戸石浜海ケ浜製塩遺跡の発掘調査報告」『貝輪3』 1967
12) 加藤孝「宮城県宮城郡松島町磯崎西ノ浜館ケ崎古代製塩遺跡出土品目録の作成」『東北文化研究所紀要9』 1978
13) 註11に同じ
14) 註4に同じ
15) 註12に同じ
16) 同　上

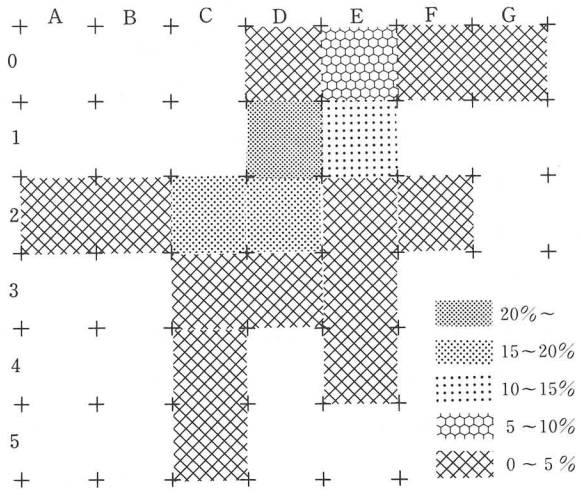
5．出土鉄滓について

1. 鉄滓の出土状況

鬼ノ神山貝塚から591点の鉄滓(てつさい)(俗称カナクソ)が出土した。出土地区は，第46図に明らかなように，Ｄ１区を中心にＣ２区，Ｄ２区，Ｅ１区に集中している。鉄滓包含層は第２層が多いが，前述した竪穴住居跡の床面および堆積土中より26.7％も出土しているのは注目すべきことである。

大きさはまちまちで，10ｇに満たないものから，2,200ｇに及ぶものまであるが，50ｇ未満が82.9％もある。

椀形鍛冶滓に類似した形状のもの24個を数えるが，他は形状不定である。



第46図　鉄滓の出土

全体的に表面が赤錆のような色調で，粗鬆な小孔が見られる。炭を噛み込んでいるものが８点あった。これは，表面が比較的滑らかなガラス状の製錬滓とは異なる様相を呈している。鍛冶滓と思われるが，製錬滓としても鉄の回収率の悪いものと推定できる。出土状況からみて，竪穴住居跡とほぼ同じ奈良時代以降，平安時代の遺物と考えられる。

第４表　鉄滓の出土地区と重量

（•印は椀形滓と推定されるもの）

重量gf ＼ 地区 ＼ 層位	A2	B2	C2		C3	C4	C5	D0		D1				D2			D3		E0			E1		E2	E3	E4	F0	F2	G0	
	2	2	2	3	3	3	6	2	3	2	3	堆	住	表採	2	3	2	3	表採	2	3	2	3	2	3	3	2	表採	表採	
＜ 25			71			1		5			1	87	55	4	53	33	1	1	1		49	23	39	26	11	2				5
25 ～ 50			10					1				1	1		2				1				4	1		1				
50 ～ 75			5									•1/2	6		1				1	1	1		3	3		2				2
75 ～ 100	1		2			1			•1		1	1	1	1			2				1	1		2	1					
100 ～ 125		•1		2					•1/1			1	1		2								2	1	1	1				
125 ～ 150															1	•1									1					
150 ～ 175			1			•1/1		1							1	1										1				
175 ～ 200																						•1			2	1				
200 ～ 225						1	•1			•1	•1	1					1	1						•1						
225 ～ 250			•1/1		1																						•1			
250 ～ 275			1		1																		•1							
275 ～ 300															1														•1	
300 ＜			•1/1	•1																				1		•1	•1		•4	
合　計	1	•1	92/•2	•1/1	2	•4/1	•1	7	•1/2	•1	•2/1	92/•2	64	5	61	34/•1	4	2	3	1	51	24/•1	48/•1	34/•1	16	8/•1	•1	•1	7/•5	

第5表　鉄滓供試試料の調査項目

符号	出土地区 地区－層位	調査項目			備考
		化学分析	X線回折	顕微鏡組織	
KF－1	C 2 － 2	○		○	椀形鍛冶滓
KF－2	C 2 － 3	○	○	○	
KF－3	竪穴住居堆積土	○	○	○	
KF－4	竪穴住居床面	○	○	○	
KF－5	竪穴住居床面	○		○	

2. 調査方法

多数の出土鉄滓の中から，竪穴住居跡出土のものをはじめとする5点を試料とし，つぎの調査を行なった。

ⓐ　肉眼観察

ⓑ　光学顕微鏡観察－試料を水道水でよく洗浄して乾燥させた後，2つに切断し，一方を顕微鏡観察試料にした。残りを成分分析およびX線回折の試料に供した。試料はグラインダで形を整えてから，ヘメリーペーパ＃350，＃600，＃800，＃1000，＃1500，＃2000で研磨し，酸化クロムを研磨剤としたバフ仕上げをした。

ⓒ　粉末X線回折法－試料中の元素，酸化物がどんな形状で鉄滓を構成しているかを知るため，粉末X線回折法で鉱物組成を同定した。試料を粉末にして，鉄(Fe)をターゲットとするディフラクト・メータにかけて，X線回折線図を記録して，それをASTMカードと照合して物質の同定をした。

ⓓ　化学組成－試料を乳鉢で細かい粉末に摺りつぶして，湿式化学分析や蛍光X線分析・原子吸光等の分析方法で，含有元素・酸化物の定量を求めた。

3. 調査結果

試料No. KF－1～KF－5の順で述べる。顕微鏡組織は図版17～18に載せ，X線回折

第6表　鉄滓のX線回折

試料	出土地区	F	W	M	M•Fe	G	I	A
KF－2	鬼ノ神山貝塚　C2区第3層	1	2	2	－	－	－	－
KF－3	鬼ノ神山貝塚　竪穴住居堆積層	2	1	3	－	－	－	3
KF－4	鬼ノ神山貝塚　竪穴住居床面	3	－	2	－	4	1	－

F：*Fayalite* $2FeO \cdot SiO_2$　M•Fe：金属鉄　A：Al_2O_3　W：*Wustite* FeO
G：*Goethite* $Fe_2O_3 \cdot H_2O$　M：*Magnetite* Fe_3O_4　I：*Ilmenite* $FeO \cdot TiO_3$
1(多)～4(小)：推定判定順位

の結果は第6表に示す。鉄滓の組織は検鏡箇所によって異なる場合が多いので，試料毎に2～4枚の写真を掲載した。ついで，(TiO_2／T・Fe)と(造滓成分／T・Fe)の関係を図化したが，比較のため，同年代と推定される他の遺跡から出土した鉄滓のそれもプロットした。

(1) KF－1

C2区第2層から出土した椀形鍛冶滓。表皮は褐色を呈し小孔がみられる。破面は気孔が多く，黒褐色をしており，炭の噛み込みが認められる。比重5.7。

鉱物組織(図版17)は，試料断面の上部と下部でその様相を異にする。上方(a)は，白色粒状のウスタイト(*Wustite*：FeO)がよく発達し，長柱状の灰色結晶フェアライト(*Fayalite*：$2FeO \cdot SiO_2$)が粒間を埋めている。中央部(b，c)から下方(d)にかけて，灰白色多角形状のマグネタイト(*Magnetite*：Fe_3O_4)が増加してくる。このような変化は鍛冶滓にしばしば見られる。

化学組成(第7表)は，造滓成分($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$)が24.2％と，供試試料中もっとも高かったが，全鉄量(T・Fe)の55％にすぎず，鍛冶滓か，還元の悪い製錬滓に類似した値を示した。二酸化チタン(TiO_2)は6.72％あった。

(2) KF－2

C2区第3層から出土した鉄滓。表皮は赤褐色を呈し小孔がある。破面は黒褐色で気孔が少ない。比重5.4。

鉱物組織(図版17)は，全体的に灰色板状のフェアライトと微結晶のウスタイト，フェアライト，ガラス質からなる共晶部が存在する。X線回折(第6表)でもフェアライトが最も強く検出され，ついで，マグネタイト，ウスタイトの順で検出された。ゲーサイト(*Goethite*:$Fe_2O_3 \cdot H_2O$)は認められず，金属鉄(M・Fe)は痕跡程度だった。

化学組成(第7表)は，KF－1と同じように，T・Feが

第7表　鉄滓の化学分析結果

(東北大学金属材料研究所分析室)

No.	試料	全鉄 T・Fe	金属鉄 M・Fe	酸化第1鉄 FeO	酸化第2鉄 Fe_2O_3	二酸化硅素 SiO_2	酸化アルミニウム Al_2O_3	酸化カルシウム CaO	酸化マグネシウム MgO	酸化マンガン MnO	二酸化チタン TiO_2	酸化クロム Cr_2O_3	硫黄 S	五酸化燐 P_2O_5	バナジウム V	銅 Cu	合計	造滓成分	造滓成分 T・Fe	TiO_2 T・Fe	備考
KF1	鬼ノ神山貝塚 C2区	44.2	1.54	29.8	28.1	17.1	4.68	1.36	1.06	0.23	6.72	0.008	0.031	0.28	0.059	0.026	90.8	24.2	0.55	0.152	椀形鍛冶滓
KF2	鬼ノ神山貝塚 C2区	48.5	1.41	29.8	34.2	15.6	4.86	0.60	0.96	0.19	3.89	0.006	0.031	0.33	0.087	0.048	92.0	22.0	0.45	0.080	
KF3	鬼ノ神山貝塚 D0区	53.6	1.59	45.2	24.1	11.5	3.89	0.83	1.24	0.31	6.14	0.008	0.032	0.42	0.13	0.033	95.1	17.5	0.33	0.115	
KF4	鬼ノ神山貝塚 D1竪穴住居跡	40.4	0.97	31.5	21.3	9.66	4.44	1.14	3.06	0.86	22.8	0.032	0.033	0.20	0.41	0.060	96.5	18.3	0.45	0.564	
KF5	鬼ノ神山貝塚 D1竪穴住居跡	51.0	1.40	48.4	17.1	15.6	4.79	1.23	0.82	0.17	3.04	0.002	0.028	0.54	0.054	0.13	93.3	22.4	0.44	0.060	

高く，造滓成分がT・Feの45％と低かった。TiO_2は3.89％と比較的低く，T・Feの8％しかなかった。鍛冶滓であろう。

(3) KF－3

D0区第2層から出土した鉄滓。表皮は褐色を呈し，焼けただれたようなぶつぶつがある。破面は黒褐色で横に平たい気孔が認められた。比重6.1。

鉱物組織(図版17)は，全体的に白色ぶどう状のウスタイトがよく発達しており，部分的にはウスタイトのみの箇所も観察された。地は灰色柱状のフェアライトである。これは，X線回折の結果(第6表)にもよくあらわれており，ウスタイトが最強で検出され，ついでフェアライト，二酸化アルミニウム(Al_2O_3)の順で検出された。マグネタイトは余り強く検出されず，M・Feはわずかに認められた。また，KF－2，KF－3とも，チタン(Ti)はTiO_2，TiOでマンガン(Mn)はMnOの形状で検出された。

成分組成(第7表)は，T・Feが53.6％と高く，造滓成分はわずかに17.5％で，T・Feの33％に過ぎなかった。TiO_2が6.14％あり，全体的にKF－1と類似した化学組成をもつ。

(4) KF－4

D1区竪穴住居跡のカマド脇から出土した鉄滓。表皮は赤褐色を呈し赤錆の感じがする。全体的に黒褐色の破面だが，部分的に金属光沢に近い灰色の面を見る。比重6.3。

鉱物組織(図版18)は，他の供試試料のそれと全く違って，格子組織の大きなイルミナイト(*Ilmenite*:FeO・TiO_3)と白色板状の結晶プシュド・ブルーカイト(*Pseude－brookite*:2FeO・TiO_2)，ガラス質で構成されている。X線回折(第6表)では，イルミナイト，マグネタイトおよびフェアライトが同定された。

成分組成(第7表)でも，TiO_2が22.8％と非常に高く，供試試料中，特異な鉄滓である。その割には，造滓成分が18.3％と低く，T・Feの45％に過ぎず，鉱物組織中のイルミナイトの存在を裏づけている。

住居内から出土したので，鍛冶滓だろうと考えたが，顕微鏡による鉱物組織，それに化学組織を加えて鑑定すると，製錬滓と推定され，鍛冶に関係のない滓の混入と思われる。鉄収率が悪かったか，還元途中の炉内滓だろう。

(5) KF－5

D1区竪穴住居跡の床面から出土した2.8 cm×3.6 cmの小さな鉄滓。表面は褐色を呈し，小孔が多い。破面は黒褐色で，炭の噛み込みが見られる。

鉱物組織(図版18)は，灰色長柱状のフェアライトを地に，白色ぶどう状のウスタイトがよく発達しているのを示している。典型的な鍛冶滓の組織である。

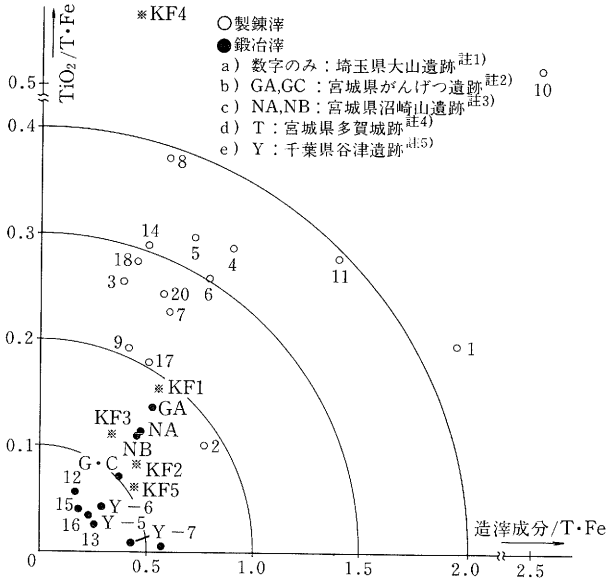
成分組成（第７表）は，TiO_2が3.04％と低く，KF－２と類似した組成だが，酸化第一鉄（FeO）が48.4％と高く，ウスタイトの存在を裏づける。これは，精錬過程での酸化作用で生じた鍛冶滓であることを示している。

(6) TiO_2／T・Fe －造滓成分／T・Fe相関図

出土鉄滓が，製錬，鍛冶のどの過程で形成されたかをより確実に判断するため，第47図のような相関図を作成した。参考のため，県内出土の鍛冶滓と関東地方の製錬滓・鍛冶滓のそれもプロットした。

関東地方出土鉄滓の場合は，製錬滓と鍛冶滓の区別が割合はっきりしているのが分かる。その中間に県内出土の鍛冶滓がある。

KF－４は製錬滓と推定されるが，他の製錬滓と比べるとTiO_2／T・Feが非常に高く，原鉱砂鉄中のTiO_2含有量が大きいことを示している。



第47図　鉄滓のTiO_2／T・Fe－造滓成分／T・Fe相関図

KF－１，２，３，５は，県内に於ける平均的な鍛冶滓で，関東地方のそれより，TiO_2／T・Feが高く，未還元鉄部分を多く含んだ素材を鍛造した際発生したものだろう。

4. ま と め

(1) 鬼ノ神山貝塚出土鉄滓は，竪穴住居跡や第１貝塚と同じく，奈良～平安時代の遺物といえる。

(2) 鍛冶滓が多いが，中に製錬滓が混入している。

(3) 鍛冶滓，製錬滓ともに赤目系砂鉄を原鉱にしたものと思われるが，鍛冶の素材は未還元鉄部分を多く含んでいたと推定される。

≪謝辞≫　本稿作成にあたり，成分分析やＸ線回折を行って下さった東北大学金属材料研究所・佐藤敬氏に衷心より感謝致します。生前，仲介の労を取って下さった元広島大学教授故丸山益輝氏のご冥福をお祈り致します。

註

1） 大澤正巳「大山遺跡を中心とした埼玉県出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』 1979 埼玉県教育委員会。
2） 鴇田勝彦「鉄滓について」『がんげつ遺跡』 1977 瀬峰町教育委員会。
3） 鴇田勝彦「宮城県豊里町沼崎遺跡鍛冶遺構と出土鉄滓」『沼崎山遺跡』 1980 豊里町教育委員会。
4） 窪田蔵郎「多賀城鍛冶工房遺構と出土鉄滓」『多賀城調査研究所年報1976』 1977
5） 大澤正巳「千葉市谷津遺跡を中心とした千葉県下の古代製鉄について」 1981 たたら研究大会。

鬼ノ神山貝塚出土の貝類

金子浩昌

1

鬼ノ神山貝塚からは5カ所で貝塚が知られ，それらを今回の発掘によって調査することができた。貝塚の個々についての規模，形成時期は別項に詳述されている通りであるが，その概要は，第2・3・5貝塚が大洞A・A′期，特にA期に比定されるものであり，第1貝塚は歴史時代の平安初期のものとみられている。ただ，第4貝塚については，その時期を明らかにし得るような資料が検出されなかったという。

鬼ノ神山貝塚における貝塚の規模は5つの貝塚が各様であって，トレンチのセクションでみる限りでは，第3貝塚が最も規模が大きく，それに比べて他の貝塚はいずれもはるかに規模の小さいものであった。今，それぞれの貝塚についての概要を述べる。

第1貝塚

c～c′ *section* において検出された貝塚で，長さ1.3m，最も深いところで15cmを算する程のものである。貝層は混土貝層を呈するもので，貝の保存は比較的良好で，種類もウミニナ，スガイ，オキシジミ，マガキなど僅かではあるが含まれていた。

貝塚の主体となる貝はアサリであって，ハマグリはその⅓程度を占めるものであった。

アサリは殻長 ℓ 43.0，殻高 h 32.0 mmになるのが最大型で，これに近い殻の数は右側殻で3個位であって，その他は ℓ 35.0，h 40.0 mm前後のものであった。

ハマグリは，ℓ 27.0，h 40.0 mm前後の中型が約⅔，ℓ 31.0，h 30.0 mm 前後の小型の殻が約⅓含まれていた。

第1貝塚では珍らしく，オキシジミが1個ではあるが検出され，ウミニナ，スガイも各1個あった。しかし，これらはいずれも破損していて，大きさを正確に知るまでに至らなかったものである。マガキの出土も9個ではあったが検出された。殻は小さく，h 40.0～70.0 mm程度のものであった。

第2貝塚

a～a′ *section* でみると，長さ1.4m，厚いところで40 cm程である。この貝塚については，サンプリング資料が手元にないので詳細を欠くが，おそらくアサリを主体とした混土貝塚であり，次に述べる第3貝塚と貝殻の性格としては大差のないものであったと思われる。

第 3 貝 塚

最も規模の大きい貝塚で，a～a′*section* 図では長さ 3.4 m，厚いところで 80 cmに達するものであった。貝層も混土貝層ではあるが，他の貝塚に比べては混土率も低く，その点では純貝層的な感じのするものであったようである。

貝はアサリを主体として，貝の保存状況も良好であった。アサリは ℓ. 45.0，*h*. 35.0 mm前後のものが大型で，これは全体の 1 割に満たぬ程である。数の多いのは ℓ. 33.0，*h*. 25.0 mm前後の中小型のものであることは他の貝塚と変りないようである。

ハマグリは，アサリに比べてかなり少なく，⅙程度の数であった。殻形は，ℓ. 65.0，*h*. 53.0 mmが最大型で僅かに 1 個をみたのみであり，ℓ. 48.0，*h*. 38.0 mm が中型のもので 1 割弱，その他は ℓ. 35.0，*h*. 33.0 mmの小さい殻であった。

シオフキがやや目立ったのもこの貝層である。ℓ. 43.0，*h*. 35.0 mmの殻から，ℓ. 48.0 *h*. 43.0 mm位の殻がみられた。シオフキの殻形は，アサリやハマグリに比べて大きな差が目立たぬようである。これは，別の地域の貝塚の場合でも同じような傾向をみる。

マガキは，30 個程の殻があったが，ほぼ完存するのは 9 個で，*h*. はいずれも 50.0 mm 未満，小さい殻は *h*. 36.0 mmであった。このような小さいカキの 1 個は左右の殻が合わさっ

第 8 表　各貝塚における貝類の出現率表

貝塚 / 貝類	第 1 貝 塚			第 3 貝 塚			第 4 貝 塚			第 5 貝 塚		
	R	L	%	R	L	%	R	L	%	R	L	%
腹　足　綱												
ス　ガ　イ	0		0	0		0	0		0	0		0
ウ　ミ　ニ　ナ	0		0	36		3.60	0		0	3		0.98
ホソヤツメタガイ	0		0	0		0	0		0	3		0.98
二　枚　貝　綱												
マ　ガ　キ	0	0	0	15	15	1.50	0	0	0	0	0	0
ハ　マ　グ　リ	(3)	9	18.75	(108)	129	12.92	(18)	20	19.2	(204)	219	71.57
オキシジミガイ	0	0	0	2	2	0.20	0	0	0	0	0	0
ア　サ　リ	36	(24)	75.0	(711)	765	76.65	84	(78)	80.77	75	(51)	24.50
シ　オ　フ　キ	3	0	6.25	51	(27)	5.10	0	0	0	(3)	6	1.96
計	48		100	998		99.97	104		99.97	306		99.99

※ 同一層より幾つか採集されているブロック土のうち，貝殻の保在の良い資料を選び，約 27,000 cm^3 の採集土より検出したものである。

ているものであった。

オキシジミは，左右の殻が各3個，別個体のものがあったにすぎない。

巻貝にウミニナがあったが，12個中4個が最大殻径10.0 mm以上になり，他は径6.0～7.0 mm位の細かい殻を含むものであった。

第 4 貝 塚

y－y′ *section* の5層でみられた長さ2.3 m，厚さ10 cm程の混土貝層である。貝殻の保存が悪く，破砕された殻が多いために殻の数量を調べるのが困難であった。また，ハマグリ，アサリのように形態的によく似ている貝では，殻表面が剝離してしまうと区別するのが難しくなる。このようなわけで，表記した数字には誤りがあるかも知れないのであるが，アサリを主体とする様相がここでもみられたことはほぼ間違いないであろう。ただ，殻形については，完存する殻が数個を数えるのみで，全体的な性格をうかがうことができない。

第 5 貝 塚

a－a′ *section* の第12層にみられた混土貝層で，第3貝塚の延長上にある。長さは2.8 mで厚さは部分的であるが,15cm位である。この層も貝殻の保存は必ずしも良好ではなく，採集されている貝殻片の量の割には完存もしくはそれに近い貝殻が少ない。この貝層での特徴は，ハマグリとアサリの比率がこれまでの層の場合と異なり，ハマグリが主体でアサリがこれに次いでいる。この点は注目しておいてよい特徴であろう。

ハマグリは，ℓ. 55.0，h. 45.0 mmのが最大型で，ℓ. 48.0，h. 40.0 mm位までの中型のものが約⅕で，他はℓ. 40.0 mm未満の小型のものになる。小型のハマグリのやや多い傾向がありそうである。アサリは，ℓ. 36.0，h. 26.0 mm 前後のものが多かった。

その他には，シオフキが僅かにあり，巻貝でウミニナ3とホソヤツメタガイ3個があった。ホソヤツメタガイは最大殻径40.5 mm程の小形のものであった。

2

鬼ノ神山貝塚に点在する貝塚から採集された動物関係の遺物は上記した貝類のみであった。種名は次の通りである。

軟体動物　*Mollusca*

腹 足 綱　*Gastropoda*

1　ス　ガ　イ　*Lunella coronata coreensis*

2　ウ ミ ニ ナ　*Batillaria multformis*

3　ホソヤツメタガイ　*Neverita hosoyai*

二枚貝綱　　*Pelecypoda*

1　マ　ガ　キ　　*Crassostrea gigas*

2　ハ マ グ リ　　*Meretrix lusoria*

3　オキシジミガイ　　*Cyclina sinensis*

4　ア　サ　リ　　*Ruditapes philippinarum*

5　シ オ フ キ　　*Mactra veneriformis*

腹足類3種，二枚貝類5種，計8種である。貝塚から知られる貝の種類としては少ない方であり，特に，七ケ浜町の貝塚としては非常に少ない例ではないかと思うのである。例えば同じ七ケ浜町にある縄文後晩期の二月田貝塚などでは，腹足綱12種，二枚貝綱13種，計25種類が知られ，この程度のがまた，普通の貝塚での様相といっても過言ではあるまい。もっとも，貝塚における貝種数は，その立地する自然的な条件に深くかかわるもので，七ケ浜町の半島状の地形に分布する貝塚の多くは，外海系の特徴をもつ例が知られるのである。例えば，大木囲貝塚の前期貝塚ではスガイを主体とする厚い貝層が堆積し，また前述した二月田貝塚でも，アサリを主体としながら，各種の岩礁性の小型の巻貝－スガイ，クボガイ，コシダカガンガラ，イシダタミーを多く含むものであった。このような貝塚に比べると，鬼ノ神山での例は，アサリを主体としてハマグリ，オキシジミ，シオフキという砂泥底種のみに限られるというもので，七ケ浜貝塚群のなかでは特殊な貝類相とみなければならないと思う。おそらく，鬼ノ神山での貝類の採集は，貝塚のある低丘陵の南にあった小さな入江内で行なわれたものであろう。貝塚の立地が，この地域の他の貝塚に比べて外海に近く位置しないで，入江の殆んど最奥部にあることと無関係ではないであろう。それにしても，決して広くはない入江の奥である。貝の採集にそれ程適した場所とも思われない立地状況は，やはり貝採集を主目的とした立地ではなかったように思うのである。

ところで，本貝塚での特徴に，貝塚から鳥，獣，魚類などの骨を全く出土しなかったことがある。全くその痕跡もみられなかったことは，この地域の貝塚としては珍しい例といわねばならないであろう。同じ七ケ浜町にある弥生時代の貝塚である東宮浜での場合は，鳥，獣，魚類の骨をかなりの量出土し，さらに漁撈用の銛頭なども知られている。これらの貝塚に比べると，鬼ノ神山貝塚の場合は如何にもこうした遺物に乏しい。ただ，貝塚における遺物の出土状況が，すべて当時の様相を示しているとは限らず，場合によっては，貝殻とその他の獣，魚類は別々に捨てることがある。縄文晩期の遺跡には，骨のみの集積例が知られている。そのようなものが本遺跡において特に検出されていないが，皆無であったとはいいきれぬであろう。また，焼骨となって細片ではあるが，骨がかなりの量出土することもある。これも晩期の例に多い。このような点も，今後の調査に注意していかねばならないであろう。

Ⅳ. ま　と　め

(1) 鬼ノ神山貝塚は，宮城県宮城郡七ケ浜町菖蒲田浜鬼ノ神山にあり，舌状台地に挟まれた小さな入江の奥に立地している。

(2) 発掘の結果，貝塚５，焼礫支群 11，竪穴住居跡１軒のほか，多数のピット群，溝跡，竪穴遺構が検出され，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，それに多数の製塩土器片，鉄滓が出土した。

(3) ５貝塚のうち，第１貝塚は奈良末～平安時代に，他の４貝塚は縄文時代晩期（大洞Ａ式）に形成されたものと推定される。いずれも，アサリ，ハマグリを主体にした小規模の貝塚で，鳥，獣，魚類の骨など貝類以外の自然遺物は発見されなかった。

(4) 竪穴住居跡は，床面出土の須恵器坏の編年から８世紀前葉から中葉まで使用されたと推定される。

(5) 多数のピット群，溝跡，竪穴遺構は，竪穴住居廃棄後の遺構と考えられるが，決め手がなく，性格，年代とも不明である。

(6) 土器集積地は，縄文時代晩期（大洞Ａ式）の製塩土器の捨て場と推定される。

(7) 焼礫群は，縄文時代晩期（大洞Ａ式）の製塩遺構と推定され，製塩炉である可能性が強い。

(8) 鉄滓は，ほとんどが鍛冶滓であり，中に製錬滓が混入していた。いずれも，赤目系砂鉄を原鉱としたと推定される。

野　山　遺　跡

〔A 地 区〕

Ⅰ．調査の方法と経過

1．調査の方法

調査は，開墾時の切り通し面より西側の比較的平坦な地域を対象にして行った。この地域を設定したのは，これまでこの地域から土器が採取されたという記録があることや，地形の観察からである。

調査区は，地形等高線に沿って，北西－南東方向に21m，北東－南西方向に12mとし，3m単位のグリットを設定した。地区名は，北西側より南東側へ，アルファベットでA～G，北東側より南西側へ，算用数字で1～4と設定した。調査は，以上の28グリット内について実施した。面積は252m²である。

遺構の図面作成に当っては，遣り方を設定し，遺跡周辺の地形図作成に当ってはトラバースを組んだ。

2．調査の経過

8月7日(日)晴　午後から，器材の準備点検を行う。

8月8日(月)雨　鍬入式。雨のため発掘作業は中止する。

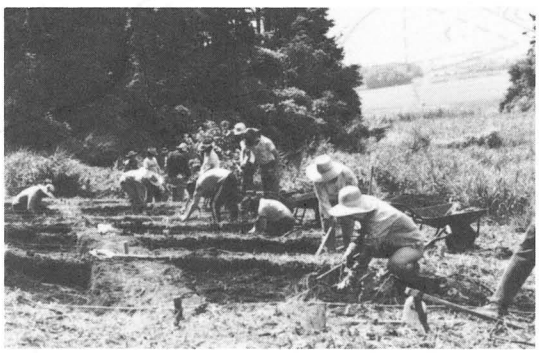
8月9日(火)曇後晴　1区，2区の表土を剝ぐ。

8月10日(水)晴　3区の表土を剝ぐ。続いて1区，2区，3区の第2層を掘り始める。平行して，発掘区の方位，位置を確認する。

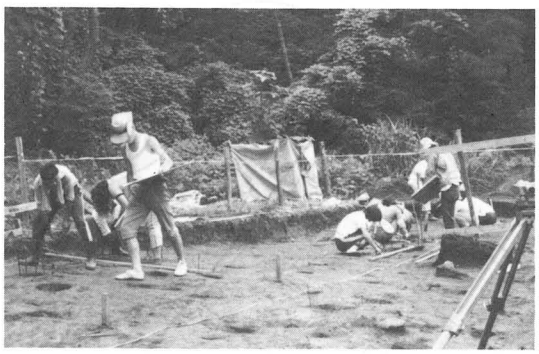
8月11日(木)雨　雨のため，発掘作業は午前中のみ。E1区，E2区，F1区，F2区，G2区の発掘作業を行う。

8月12日(金)晴　1区，2区，3区を，遺構面まで掘り下げる。10－14，01－11の畦をはずす。

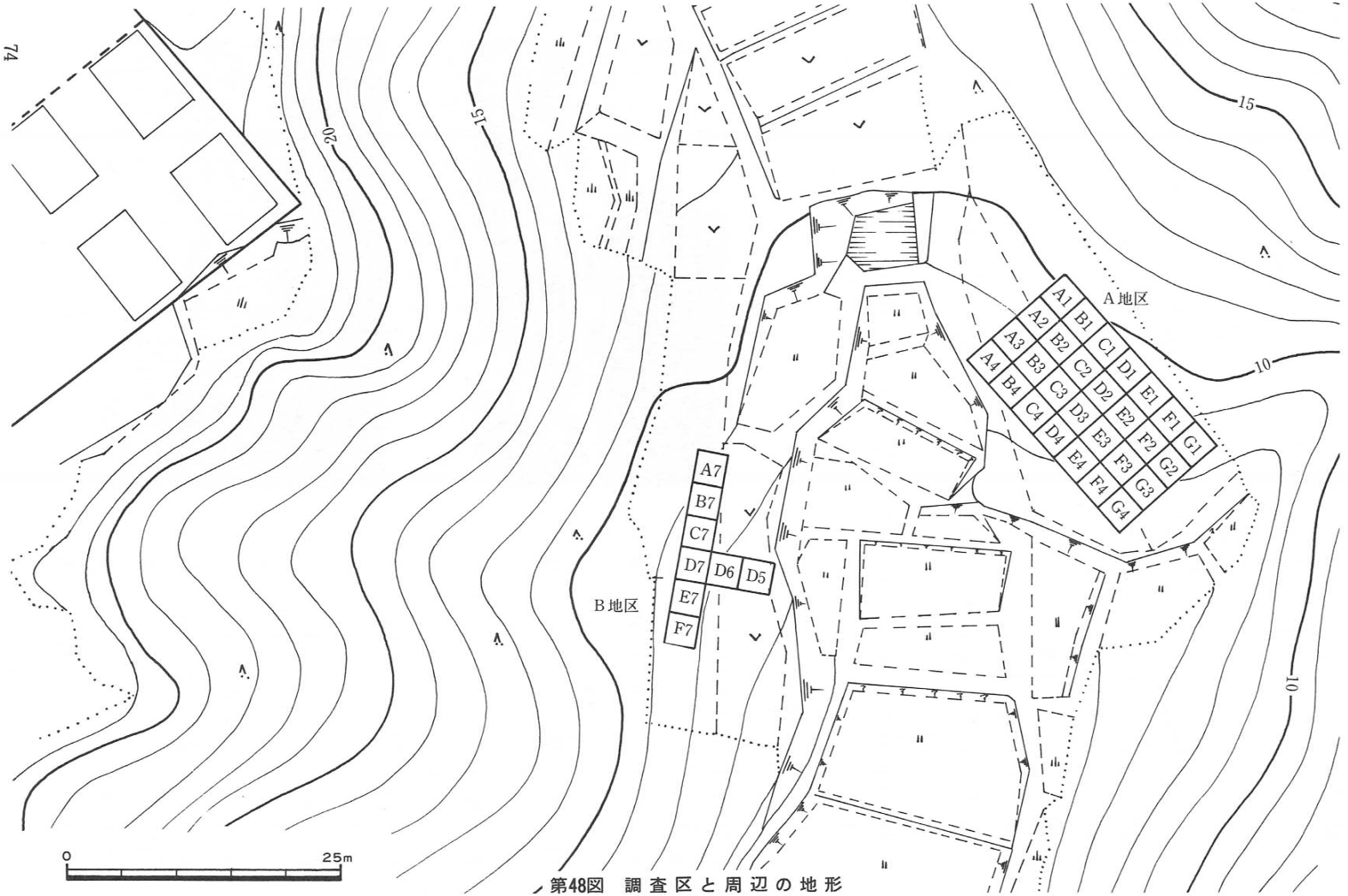
8月16日(火)雨後晴　南西側に発掘



発 掘 風 景



実 測 風 景



第48図　調査区と周辺の地形

区を広げ，４区を設定し，表土より遺構面まで掘り下げる。１区，２区，３区の精査をする。

８月17日(水)雨　　雨のため，発掘作業は午前中のみ。遣り方の設定。

８月18日(木)雨　　雨のため，発掘作業は午前中のみ。４区を精査する。11－31の畦をはずす。

８月19日(金)晴　　遺構面全体の精査をする。その結果，多数のピット，および土坑の輪郭を確認する。30－31，31－41，34－36，34－44の畦をはずす。

８月20日(土)曇　　土坑５，土坑６の精査をする。02－22，31－33，04－14，16－36の畦をはずす。

８月21日(日)曇後晴　　22－42，33－34，25－45，36－46，16－17，36－37の畦をはずす。20－27，03－43の畦のセクション図を作成する。その後，20－24，25－27，03－43の畦をはずす。

８月22日(月)晴　　土坑１，土坑２，土坑３，土坑７の精査をする。14－34，24－25，05－25，06－16の畦をはずす。

８月23日(火)曇時々小雨　　土坑４，土坑８，ピットの精査をする。平面実測に入る。

８月24日(水)晴　　土坑２，土坑５，土坑６内のセクション図を作成する。平行して，遣り方の撤去作業，遺構面のレベル取り，平面図の作成を行う。

８月25日(木)晴　　土坑１，土坑３，土坑４，土坑７，土坑８内のセクション図を作成する。全体の観察を進める中で土坑９を検出し，その発掘作業を行い，記録する。最後に全体の写真撮影をする。

II. 遺構の検出

9基の土坑と190個のピットが検出された。土坑2，土坑3，土坑4，土坑7，土坑9の5基は，北西－南東方向に並んで位置し，山側に3基，土坑7の谷側に1基が位置している。

ピットは，B3区，B4区，C4区，E4区，F3区，F4区を除く22区から検出されている。

1. 基本層位

発掘区内における堆積土は，山際のA1区で約22cm，谷側のG4区で約55cmと，地形等高線に沿って低くなるほど厚くなっていた。

堆積土に若干ではあるが，陶器片，オハジキ等が含まれていたこと。出土土器の大半が細片で量が少ないこと。遺構の確認が，地山直上の堆積土層面で見られたことなどから，堆積土の移動撹乱があったと考えられるが，遺構面(地山面)までの堆積土は，一応3層に大別される。上部から第Ⅰ層・第Ⅱ層・第Ⅲ層とした。

〔第 Ⅰ 層〕　黒褐色(10YR$^{2}/_{2}$)シルト層で，全域に分布する。層厚は10～36cmである。

〔第 Ⅱ 層〕　黒色(10YR$^{1.7}/_{1}$)シルト層で，軟らかく水分が多い。北側を除く地域に分布し，低地に行くほど層厚を増す。

〔第 Ⅲ 層〕　暗褐色(10YR$^{3}/_{3}$)シルト層で，やや砂っぽく，にぶい黄褐色(10YR$^{5}/_{4}$)の粒を含む。層厚は4～20cmである。

地山は，凝灰岩の風化した二次堆積で軟らかく，にぶい黄褐色(10YR$^{4}/_{3}$)をしている。地山面は，北－南へ8～10度の勾配で傾斜している。

2. 遺　　構

土　　坑

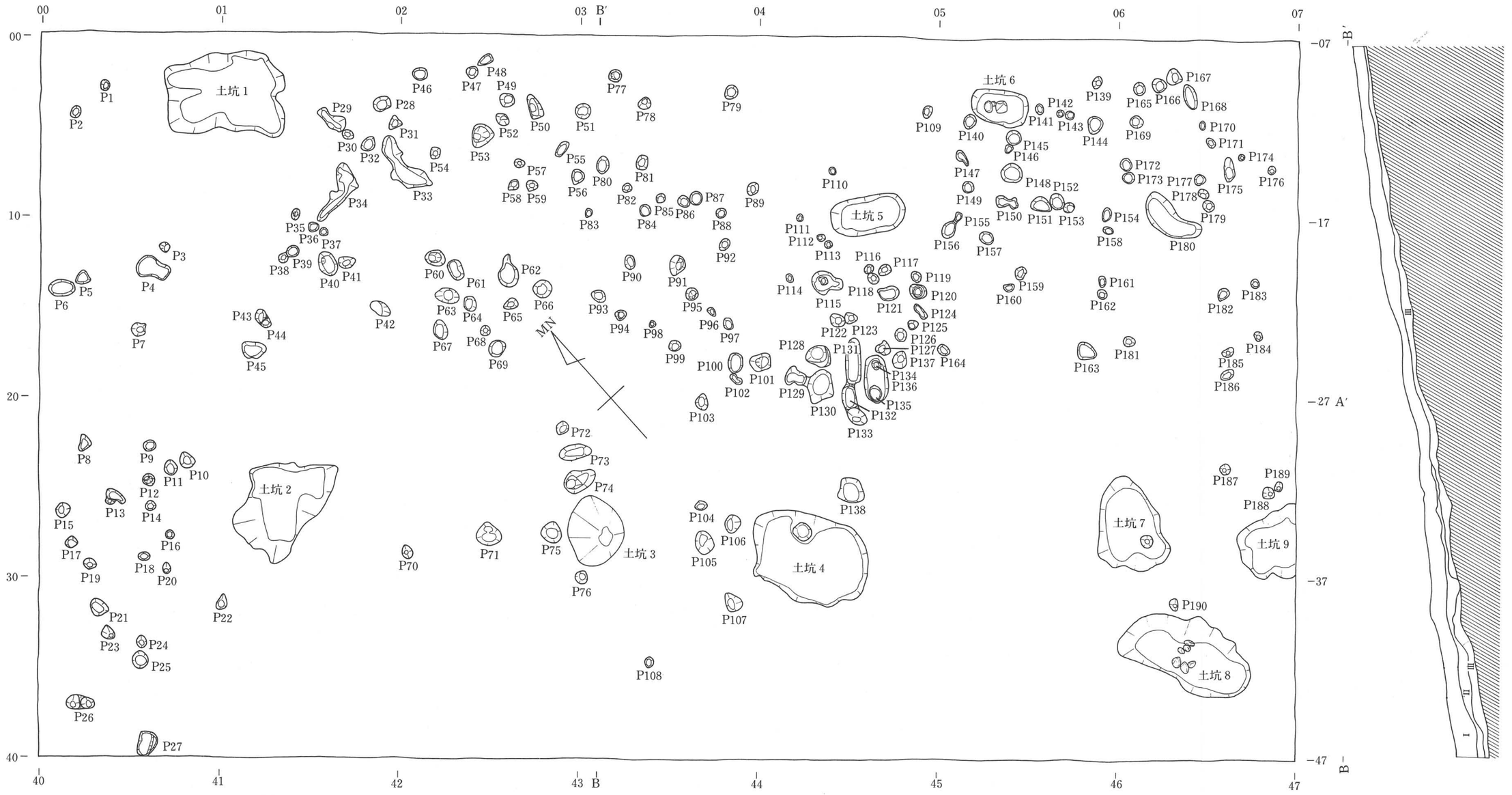
土 坑 1

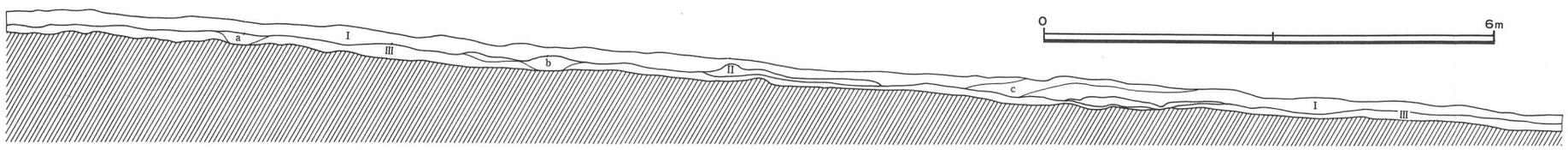
〔検 出 面〕　A1－B1区に位置し，地山面で検出された。

〔平面形・規模〕　長軸200cm，短軸130cmの隅丸方形である。深さ40cm。

〔堆 積 土〕　11層に分けられる。全体的に堆積しているのは第1層と第6層で，堆積土の大半を占める。

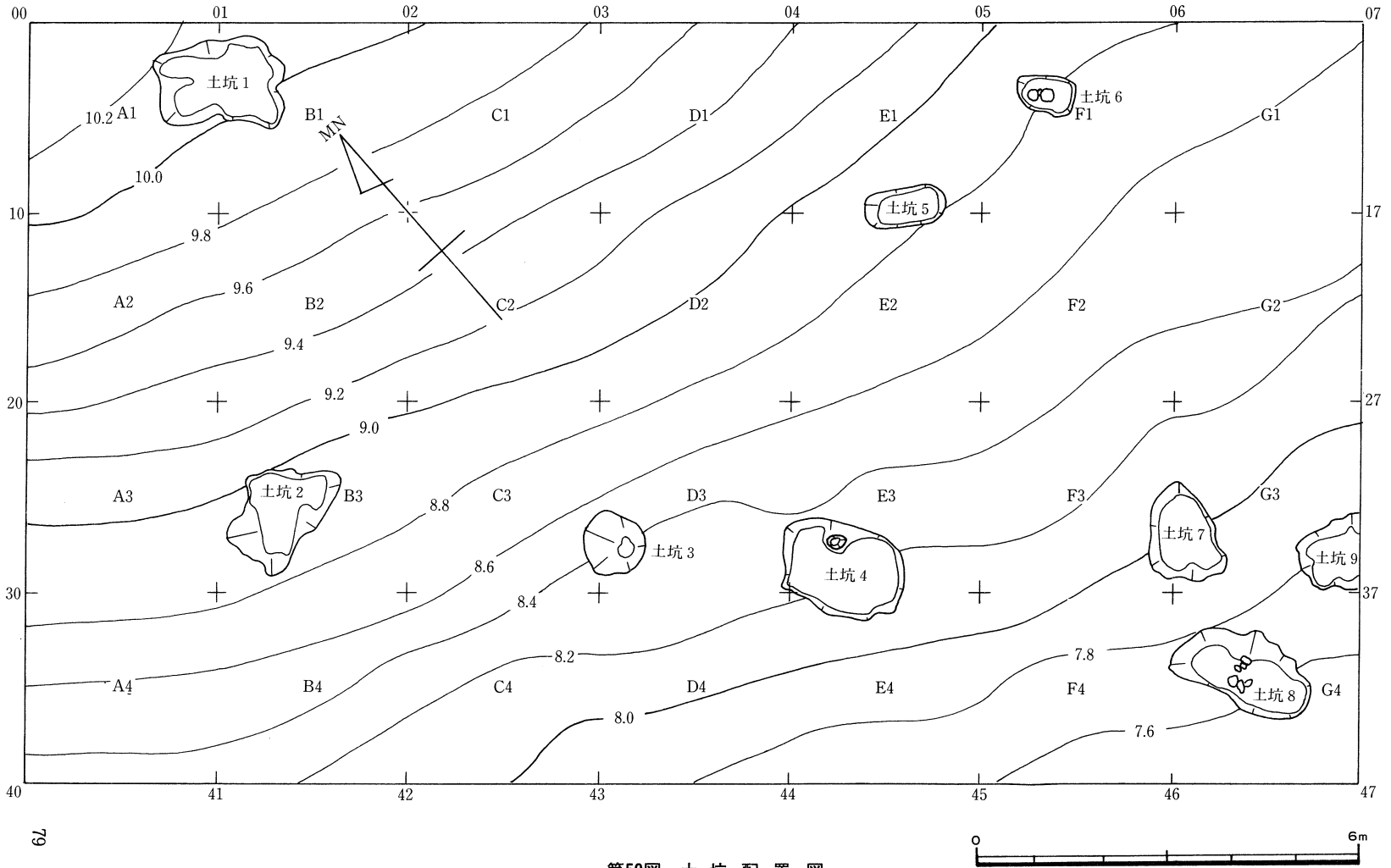
〔底　　面〕　地山を掘り込んで底面とし，10度ほど南側に傾斜している。中央部に焼面が見られる。





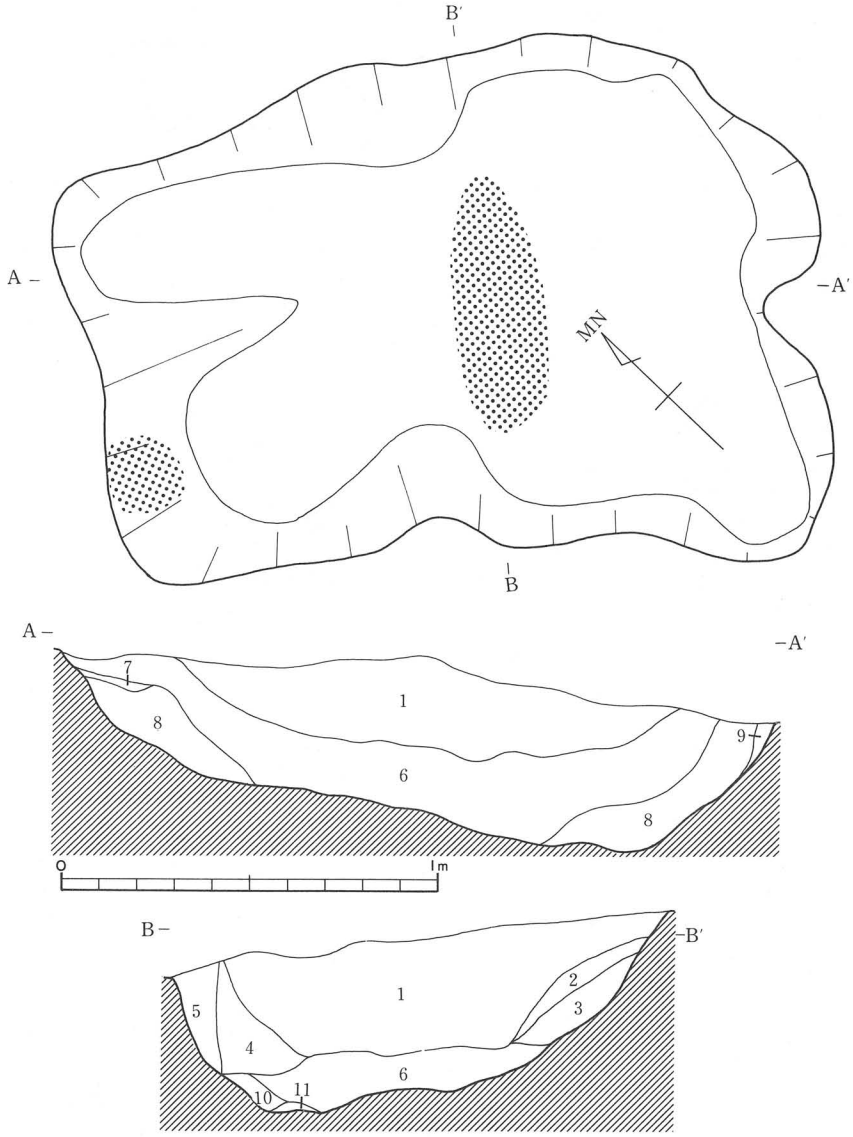
第49図　遺構配置図・基本層位

層位	土　色	土性	備　考
第Ⅰ層	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	表　土
第Ⅱ層	黒　色(10YR 1.7/1)	シルト	軟らかく水分多い
第Ⅲ層	暗褐色(10YR 3/3)	シルト	砂を含む
a	黒　色(10YR 2/1)	シルト	ブロックとして入る
b	黒褐色(SYR 2/1)	シルト	ブロックとして入る
c	褐　色(10YR 4/4)	シルト	ブロックとして入る


00
01
02
03
04
05
06
07
10
17
20
27
30
37
40
41
42
43
44
45
46
47
土坑 1
土坑 2
土坑 3
土坑 4
土坑 5
土坑 6
土坑 7
土坑 8
土坑 9
MN
10.2
10.0
9.8
9.6
9.4
9.2
9.0
8.8
8.6
8.4
8.2
8.0
7.8
7.6
A1
B1
C1
D1
E1
F1
G1
A2
B2
C2
D2
E2
F2
G2
A3
B3
C3
D3
E3
F3
G3
A4
B4
C4
D4
E4
F4
G4
0
6m

第50図　土 坑 配 置 図

〔壁　　面〕 壁の高さは30～45 cmで，その立ち上がり角は40～60度である。西壁の一部に焼面が見られる。



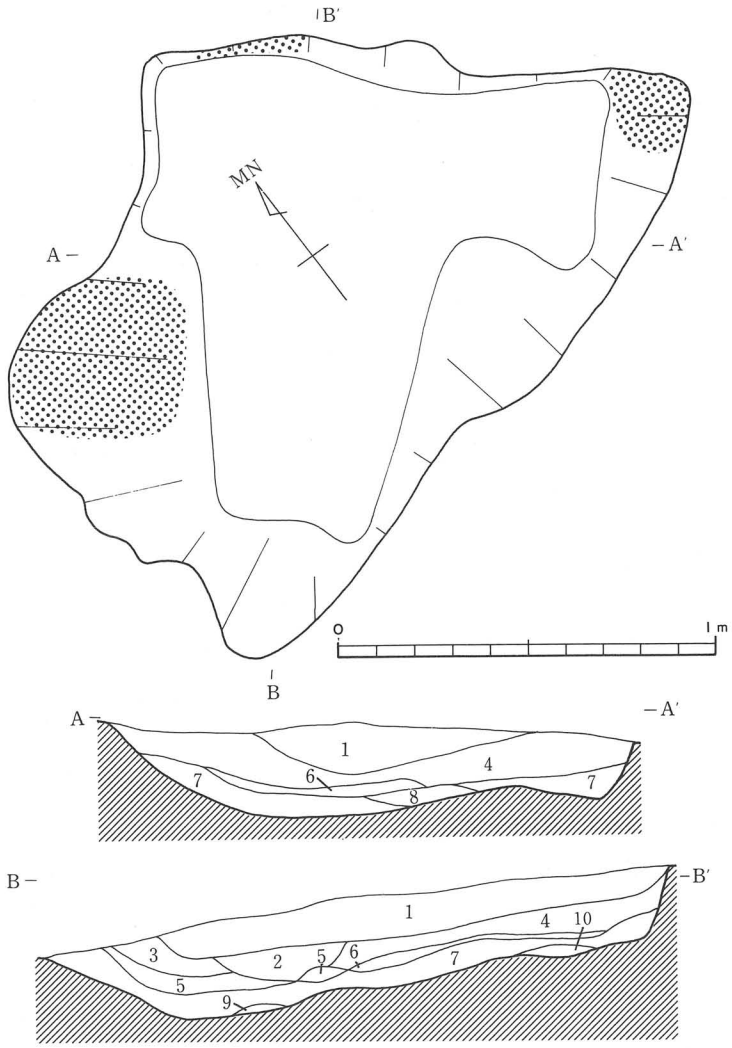
層No.	土　　色	土　性	備　考	層No.	土　　色	土　性	備　考
1	黒　褐　色(10 YR 3/2)	シ ル ト	3・7・9・10層は同質。	7	にぶい黄橙色(10 YR 6/4)	シ ル ト	
2	黄　褐　色(10 YR 5/6)	シ ル ト		8	にぶい黄褐色(10 YR 5/4)	シ ル ト	
3	にぶい黄橙色(10 YR 6/4)	シ ル ト		9	にぶい黄橙色(10 YR 6/4)	シ ル ト	
4	にぶい黄褐色(10 YR 4/3)	シ ル ト		10	にぶい黄橙色(10 YR 6/4)	シ ル ト	
5	黄　褐　色(10 YR 5/6)	シ ル ト		11	黒　褐　色(10 YR 2/2)	シ ル ト	
6	黒　　色(10 YR 2/1)	シ ル ト					

第51図　土　坑　1

〔出土遺物〕　堆積土の第１層と第６層から縄文土器片が出土している。(図版25ａ)

土　坑　2

〔検 出 面〕　Ｂ３区に位置し，地山面で検出された。



層No.	土　色	土　性	備　考	層No.	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シ　ル　ト		6	明赤褐色(10YR5/8)	砂質シルト	焼土・炭化物を含む
2	黒　色(10YR1.7/1)	シ　ル　ト	炭化物を多量に含む	7	暗　褐　色(10YR3/4)	シ　ル　ト	
3	灰黄褐色(10YR4/2)	シ　ル　ト		8	黒　色(10YR1.7/1)	シ　ル　ト	炭化物を多量に含む
4	褐　色(10YR4/4)	シ　ル　ト		9	明黄褐色(10YR7/6)	シ　ル　ト	
5	黒　褐　色(10YR2/2)	シ　ル　ト		10	黒　色(10YR1.7/1)	シ　ル　ト	炭化物を多量に含む

第52図　土　坑　2

〔平面形・規模〕　164×150cm。ほぼ台形である。深さ25cm。

〔堆 積 土〕　10層に分けられる。第2層，第8層，第10層は，黒色(10YR$^{1.7}/_{1}$)シルト層で，ブロック状に入っていて，炭化物を多量に含む。

〔底　　面〕　地山を掘り込んで底面とし，10度ほど南西側に傾斜している。浅黄橙色(10YR$^{8}/_{4}$)をしている。

〔壁　　面〕　壁の高さは15～20cmで，その立ち上がり角は24～70度である。東，西，北壁の一部に焼面が見られる。

〔出土遺物〕　堆積土中から縄文土器片が出土している。(図版25b)

土　坑　3

〔検 出 面〕　C3－D3区に位置し，地山面で検出された。

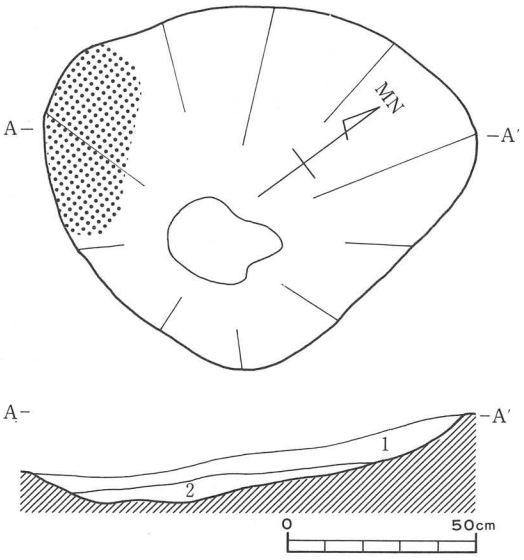
〔平面形・規模〕　長軸116cm，短軸97cmの楕円形である。深さ15cm。

〔堆 積 土〕　2層に分けられる。第2層は，炭化物を少量含む。

〔底　　面〕　地山を掘り込んで底面とし，10度ほど南西側に傾斜している。地山に含まれる礫の一部が表出している。

〔壁　　面〕　壁の高さは約10cmで，その立ち上がり角は28～33度である。西壁の一部に，明赤褐色(5YR$^{5}/_{6}$)の焼面が見られる。北側の壁面は勾配がゆるく，底面との界がつきにくい。

〔出土遺物〕　なし



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	にぶい黄褐色(10YR$^{5}/_{4}$)	シ　ル　ト	黄褐色ロームを粒状に含む
2	黒　褐　色(10YR$^{3}/_{2}$)	シ　ル　ト	炭化物を含む

第53図　土　坑　3

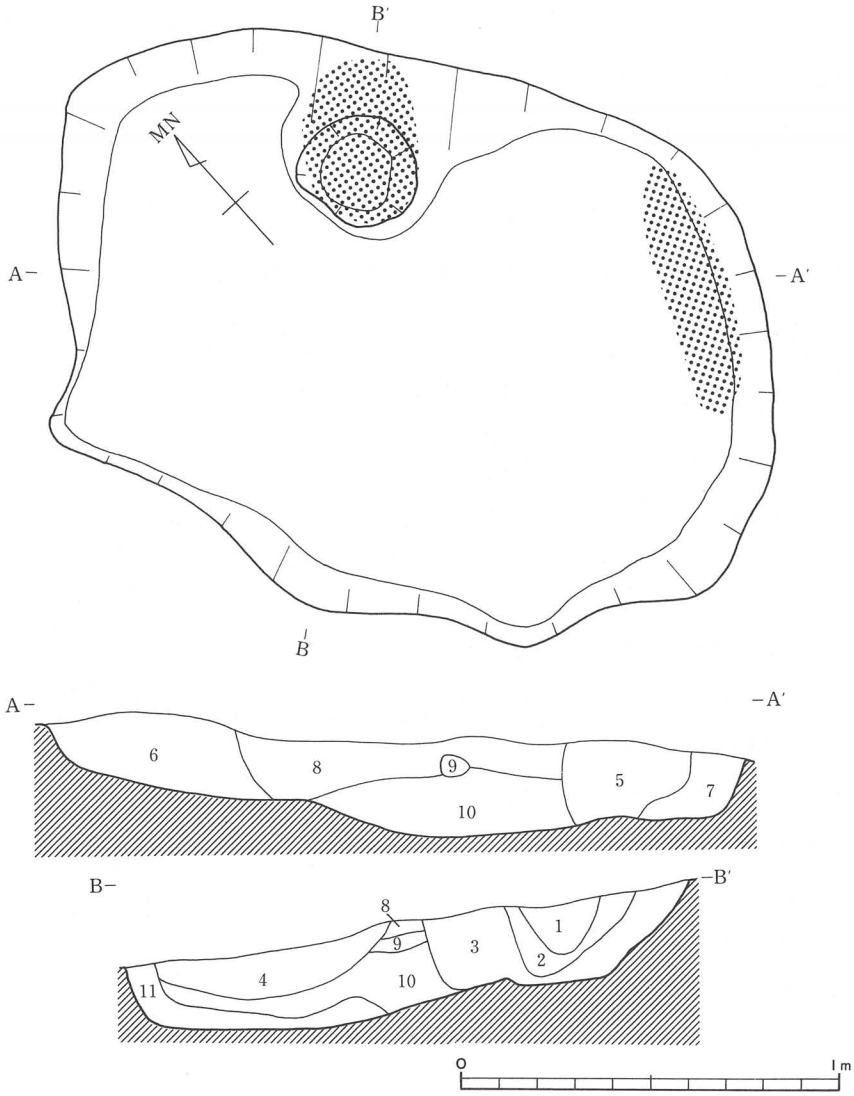
土　坑　4

〔検 出 面〕　E3－E4区に位置し，地山面で検出された。

〔平面形・規模〕　長軸185cm，短軸150cmの楕円である。深さ26cm。

〔堆 積 土〕　11層に分けられる。北東側で，堆積土に掘り込んだピットが見られた。

〔底　　面〕　地山を掘り込んで底面とし堅い。6度ほど南西側に傾斜している。地山に含まれる礫が表出している。南東部に焼面が見られ，わずかに壁面に続く。



層No.	土色	土性	備考	層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト		7	黒色(10YR2/1)	シルト	
2	黄褐色(10YR5/6)	シルト		8	にぶい黄橙色(10YR6/4)	砂質シルト	
3	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト	細礫を含む	9	黒褐色(10YR3/2)	シルト	ブロック状に入る
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト		10	にぶい黄橙色(10YR4/3)	シルト	細礫を含む
5	黄褐色(10YR5/6)	シルト		11	明黄褐色(10YR6/6)	砂質シルト	
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト					

第54図 土 坑 4

〔壁　　面〕 壁の高さは12～20cmで，その立ち上がり角は45～70度である。北東，南東壁の一部に，明赤褐色(5YR5/8)の焼面が見られる。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器片が出土している。

土　坑　5

〔検 出 面〕 E1－E2区に位置し，地山面で検出された。

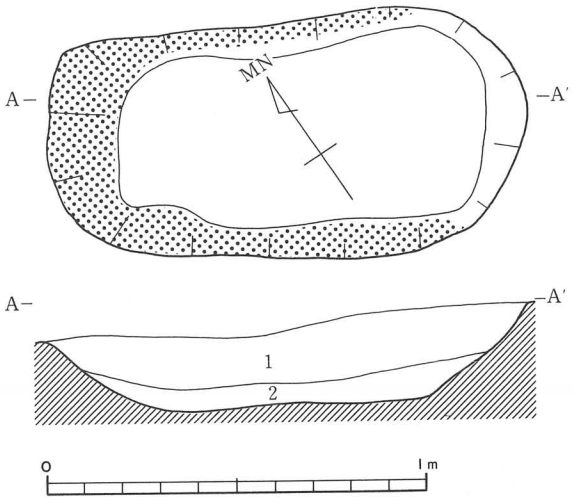
〔平面形・規模〕 長軸125cm，短軸62cmの楕円形である。深さ24cm。

〔堆 積 土〕 2層に分けられる。第2層は，炭化物を多量に含む。

〔底　　面〕 地山を掘り込んで底面とし，ほぼ平坦である。第2層の炭化物が付着していて黒色をしている。湿り気があり，比較的軟らかい。

〔壁　　面〕 壁の高さは20～25cmで，その立ち上がり角は37～44度である。南東壁を除く全壁面に，橙色(5YR6/8)の焼面が見られる。壁面の下部も炭化物が付着していて黒色をしている。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器片，製塩土器片が出土している。(図版25c)



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	炭化物を含む
2	黒　　色(10YR1.7/1)	砂質シルト	炭化物を多量に含む

第55図　土　　坑　　5

土　坑　6

〔検 出 面〕 F1区に位置し，地山面で検出された。

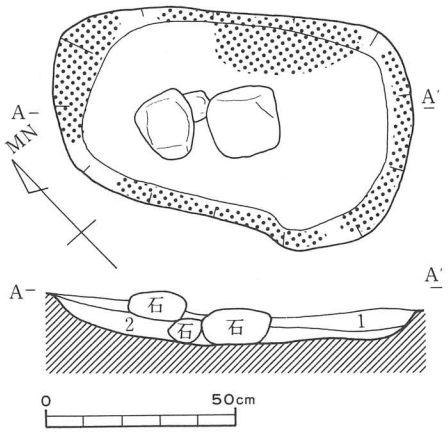
〔平面形・規模〕 長軸95cm，短軸60cmの楕円形である。深さ11cm。

〔堆 積 土〕 2層に分けられる。底面中央部に，明黄褐色(10YR7/6)の石と，灰白色(10YR8/2)の石が，また2層上面に灰白色(10YR8/2)の石が長軸方向に並んでいる。土坑5と同じく炭化物を多量に含む堆積土である。

〔底　　面〕 地山を掘り込んで底面とし，ほぼ平坦である。東壁の焼面がわずかに底面に続く。第2層の炭化物が付着していて黒色をしている。

〔壁　　面〕 壁の高さは8～10cmで，その立ち上がり角は40～42度である。壁全体に，赤褐色(5YR4/6)の焼面が見られる。

〔出土遺物〕　堆積土中から縄文土器片，製塩土器片が出土している。(図版25d)



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒　褐　色(10YR 3/2)	シ　ル　ト	炭化物を含む
2	黒　褐　色(10YR 3/2)	シ　ル　ト	炭化物を多量に含む

第56図　土　　坑　　6

土　坑　7

〔検 出 面〕　F3－G3区に位置し，地山面で検出された。

〔平面形・規模〕　長軸150cm，短軸102cmの楕円形である。深さ29cm。

〔堆 積 土〕　5層に分けられる。第1層，第3層，第4層，第5層の層序関係は，縦割りになっている。北西側の上部層には，多くの中礫があった。

〔底　　面〕　地山を掘り込んで底面とし，13度ほど南西側に傾斜している。地山の中礫，粗礫が表出して凸凹している。焼面は見られない。

〔壁　　面〕　壁の高さは10～15cmで，その立ち上がり角は30～68度である。

〔出土遺物〕　堆積土中から縄文土器片，製塩土器片が出土している。(図版25e)

土　坑　8

〔検 出 面〕　G4区に位置し，地山面で検出された。

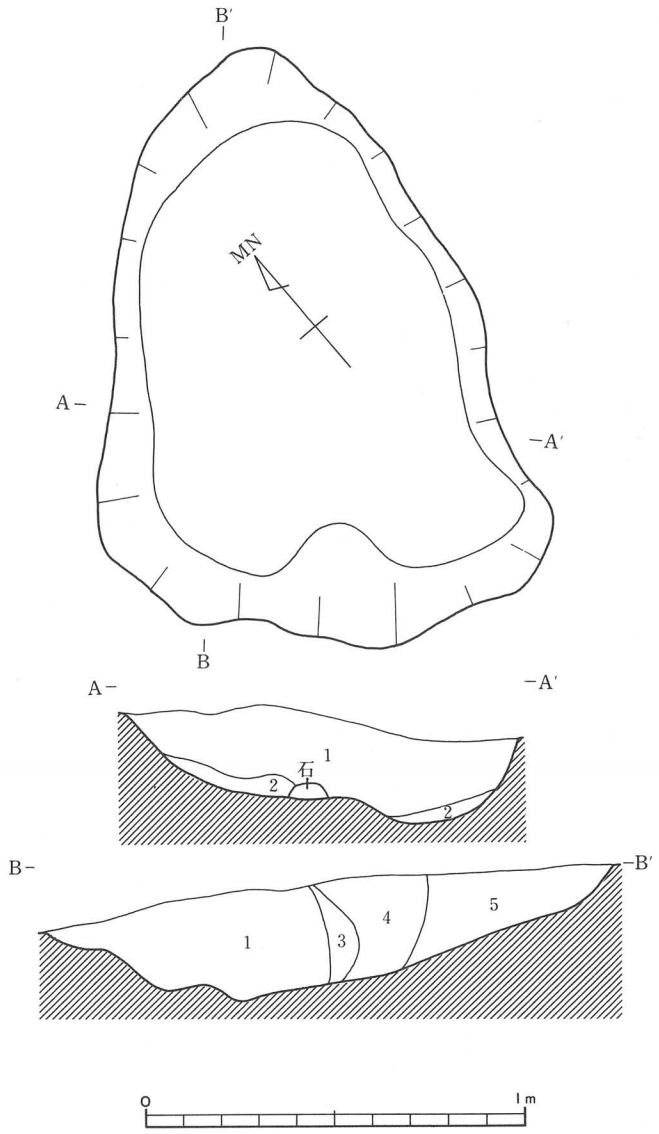
〔平面形・規模〕　長軸225cm，短軸115cmの楕円形である。深さ33cm。

〔堆 積 土〕　3層に分けられる。中央部に，明黄褐色(10YR 7/6)の石数個が，土坑を二分するような状態で検出された。第3層は，炭化物を多量に含む。

〔底　　面〕　地山を掘り込んで底面とし，ほぼ平坦である。中央部に，長軸47cm，短軸31cm，深さ7cmのくぼみがある。

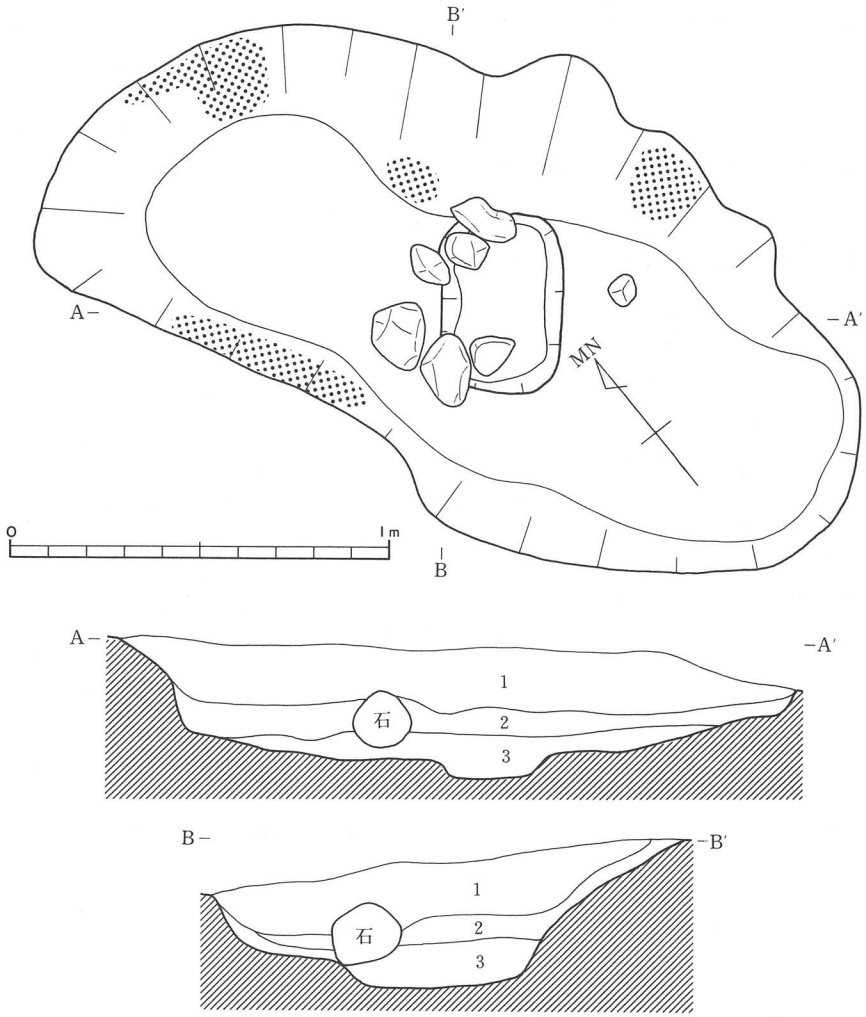
〔壁　　面〕　壁の高さは6～24cmで，その立ち上がり角は52～60度である。北壁，東壁，西壁，の一部に明赤褐色(5YR 5/8)の焼面が見られる。

〔出土遺物〕　堆積土中から縄文土器片，製塩土器片が出土している。(図版25f)



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒　褐　色(10YR 3/2)	シ　ル　ト	炭化物を含む
2	明 黄 褐 色(10YR 6/6)	シ　ル　ト	壁の崩壊土
3	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シ　ル　ト	
4	にぶい黄橙色(10YR 7/4)	シ　ル　ト	中礫を含む
5	明 赤 褐 色(5 YR 5/8)	砂質シルト	焼土・中礫を含む

第57図　土　　坑　　7



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シ ル ト	炭化物を含む
2	暗　褐　色(10YR 3/3)	シ ル ト	少し粘性が有る
3	黒　　色(10YR 2/1)	砂質シルト	炭化物を多量に含む

第58図　土　坑　8

土 坑 9

〔検 出 面〕 G3区に位置し，地山面で検出された。

〔平面形・規模〕 長軸160cm(推定)，短軸120cmの楕円形である。深さ35cm。

〔堆 積 土〕 2層に分けられる。第2層は，炭化物を少量含む。

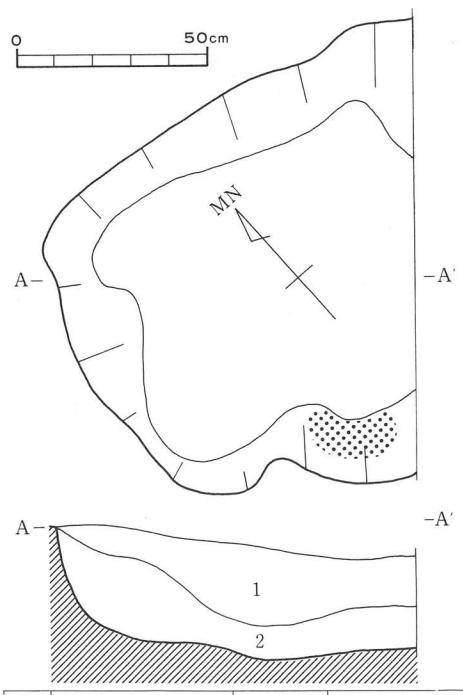
〔底　　面〕 地山を掘り込んで底面とし，ほぼ平坦である。

〔壁　　面〕 壁の高さは25cmで，その立ち上がり角は約72度である。西壁の一部に焼面が見られる。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器片，製塩土器片が出土している。(図版25g)

ピ　ッ　ト

ピットは全て地山面で検出された。柱痕跡を遺存すると思われるものが13個あったが組合せは不明である。抜き方を遺存しているものは見られない。ピット62，ピット115，ピット151，ピット159，ピット161，ピット182の堆積土から土器片，ピット153から剝片が出土している。掘り方埋土色調は，ほとんど黒色か，黒褐色をしている。以下第9表にピットを一覧表にして示す。



層No.	土　　色	土　性	備　　考
1	黒　褐　色(10YR 2/2)	シ ル ト	
2	褐　　色(10YR 4/4)	シ ル ト	炭化物を含む

第59図　土　　坑　　9

第9表　ピット一覧

(単位　cm)

ピット番号	地区名	掘り方	大きさ(径)	深さ	掘り方埋土色調	柱痕	径	柱痕跡色調	抜き方	備　　考
P 1	A 1	あり	14	14	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 2	A 1	あり	19	13	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 3	A 2	あり	15	8	黒　色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 4	A 2	あり	32×54	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 5	A 2	あり	20	9	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 6	A 2	あり	20×33	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 7	A 2	あり	20×22	17	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 8	A 3	あり	17×25	12	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 9	A 3	あり	16	15	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 10	A 3	あり	21×28	15	黒褐色(10YR 2/2)	あり	10	黒　褐　色(10YR 3/2)	なし	
P 11	A 3	あり	24×18	18	黒褐色(10YR 2/2)	あり	11	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	なし	
P 12	A 3	あり	17	8	黒　色(10YR 2/1)	あり	5	黒　褐　色(10YR 3/2)	なし	
P 13	A 3	あり	35×29	10	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 14	A 3	あり	16	10	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 15	A 3	あり	24×20	12	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 16	A 3	あり	16×14	8	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 17	A 3	あり	18	8	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 18	A 3	あり	13×17	12	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	

ピット番号	地区名	掘り方	大きさ(径)	深さ	掘り方埋土色調	柱痕	径	柱痕跡色調	抜き方	備考
P 19	A 3	あり	19	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 20	A 3	あり	12×7	14	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 21	A 4	あり	25×30	14	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 22	A 4	あり	23×15	7	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 23	A 4	あり	24×21	8	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 24	A 4	あり	14	10	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 25	A 4	あり	25	5	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 26	A 4	あり	40×23	10	黒 色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 27	A 4	あり	40×23	14	黒 色(10YR 2/1)	あり	15	黒 褐 色(10YR 2/2)	なし	
P 28	B 1	あり	27	12	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 29	B 1	凹み	30×50	17	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 30	B 1	あり	15×20	9	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 31	B 1	あり	31×19	23	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 32	B 1	あり	25×21	12	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 33	B 1	凹み	34×100	13	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 34	B 1	凹み	90×45	22	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 35	B 1	あり	18	11	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 36	B 2	あり	20	13	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 37	B 2	あり	16×10	5	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 38	B 2	あり	14	13	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 39	B 2	あり	23	4	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 40	B 2	あり	40×26	13	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 41	B 2	あり	26×21	11	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 42	B 2	あり	18×16	7	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 43	B 2	あり	20×15	11	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 44	B 2	あり	16×15	16	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 45	B 2	あり	40×28	27	黒褐色(10YR 2/2)	あり	12	暗 褐 色(10YR 3/4)	なし	炭化物を含む
P 46	C 1	あり	25×20	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 47	C 1	あり	20	8	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 48	C 1	あり	20×25	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 49	C 1	あり	23	13	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 50	C 1	あり	40×15	14	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 51	C 1	あり	25	8	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 52	C 1	あり	22×19	15	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 53	C 1	あり	38×35	35	黒褐色(10YR 3/2)	あり	12	暗 褐 色(10YR 3/4)	なし	
P 54	C 1	あり	18×15	10	黒褐色(10YR 3/3)	なし			なし	
P 55	C 1	あり	33×16	12	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 56	C 1	あり	20×17	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 57	C 1	あり	15	9	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 58	C 1	あり	21×17	14	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 59	C 1	あり	17	8	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 60	C 2	あり	26×32	19	黒褐色(10YR 2/3)	あり	11	暗 褐 色(10YR 3/4)	なし	
P 61	C 2	あり	31×21	17	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 62	C 2	あり	50×33	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	土器破片 埋土：砂質
P 63	C 2	あり	35×27	36	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 64	C 2	あり	17×22	7	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 65	C 2	あり	20×14	6	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 66	C 2	あり	25	12	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 67	C 2	あり	30	6	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 68	C 2	あり	15	7	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 69	C 2	あり	30×20	14	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 70	C 3	あり	20×25	13	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 71	C 3	あり	30×34	14	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 72	C 3	あり	26×30	8	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 73	C 3	あり	50×25	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 74	C 3	あり	34×50	18	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 75	C 3	あり	26×32	15	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 76	C 3	あり	20×25	20	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	

ピット番号	地区名	掘り方	大きさ(径)	深さ	掘り方埋土色調	柱痕	径	柱痕跡色調	抜き方	備考
P 77	D 1	あり	22	14	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 78	D 1	あり	20	9	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 79	D 1	あり	19	10	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 80	D 1	あり	23×17	12	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 81	D 1	あり	25	13	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 82	D 1	あり	15	10	暗褐色(10YR 3/3)	なし			なし	
P 83	D 1	あり	13	9	暗褐色(10YR 3/3)	なし			なし	
P 84	D 1	あり	18×12	9	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 85	D 1	あり	11	31	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 86	D 1	あり	17	19	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 87	D 1	あり	23×20	8	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 88	D 1	あり	12	8	黒　色(10YR 2/1)	なし			なし	
P 89	D 1	あり	21×14	11	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 90	D 2	あり	16×21	12	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 91	D 2	あり	20×25	10	黒褐色(10YR 2/3)	あり	9	褐　色(10YR 4/4)	なし	
P 92	D 2	あり	16	16	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	埋土：砂質
P 93	D 2	あり	23	6	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 94	D 2	あり	20	15	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	上部に焼土有
P 95	D 2	あり	19	14	黒褐色(10YR 2/2)	あり	7	褐　色(10YR 4/4)	なし	
P 96	D 2	あり	11×15	9	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 97	D 2	あり	14×21	14	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 98	D 2	あり	10×14	8	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 99	D 2	あり	19	14	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 100	D 2	あり	23×33	7	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 101	D 2	あり	28×33	13	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 102	D 2	あり	10×26	5	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 103	D 3	あり	20×25	10	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 104	D 3	あり	14×20	4	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 105	D 3	あり	40×33	11	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 106	D 3	あり	35×31	11	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 107	D 4	あり	22×34	14	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 108	D 4	あり	21×17	7	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 109	E 1	あり	14×8	8	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 110	E 1	あり	10	13	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 111	E 1	あり	10	7	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 112	E 2	あり	11	7	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	
P 113	E 2	あり	10	6	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 114	E 2	あり	11×14	10	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 115	E 2	あり	55×38	13	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	炭化物・土器破片
P 116	E 2	あり	16	5	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	
P 117	E 2	あり	20×16	11	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 118	E 2	あり	17	11	黒褐色(10YR 2/2)	あり	7	褐　色(10YR 4/4)	なし	
P 119	E 2	あり	18×16	6	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 120	E 2	あり	30×25	16	黒褐色(10YR 2/2)	あり	10	暗　褐　色(10YR 3/3)	なし	
P 121	E 2	あり	36×25	5	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	炭化物を含む
P 122	E 2	あり	22×19	10	黒褐色(10YR 3/2)	なし			なし	炭化物を含む
P 123	E 2	あり	17×15	16	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 124	E 2	あり	30×11	9	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 125	E 2	あり	12×10	5	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 126	E 2	あり	20×18	8	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 127	E 2	あり	23×22	16	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 128	E 2	あり	45×40	18	黒褐色(10YR 2/2)	あり	15	褐　色(10YR 4/4)	なし	
P 129	E 2	あり	30×35	15	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	底部：砂質
P 130	E 2	あり	44×54	18	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 131	E 2	凹み	26×75	21	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 132	E 2	凹み	21×40	10	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 133	E 3	あり	28×20	18	黒褐色(10YR 2/2)	なし			なし	
P 134	E 2	あり	16×20	28	黒褐色(10YR 2/3)	なし			なし	

ピット番号	地区名	掘り方	大きさ(径)	深さ	掘り方埋土色調	柱痕	径	柱痕跡色調	抜き方	備考
P 135	E 2	あり	27	10	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 136	E 2	凹み	34×80	5	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 137	E 2	あり	24	8	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 138	E 3	あり	43×37	12	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 139	F 1	あり	19×21	10	黒褐色(10YR3/2)	なし			なし	
P 140	F 1	あり	23×18	6	暗褐色(10YR3/3)	なし			なし	
P 141	F 1	あり	18×12	10	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 142	F 1	あり	11	20	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 143	F 1	あり	16	9	黒褐色(10YR3/2)	なし			なし	
P 144	F 1	あり	38×30	14	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 145	F 1	あり	18	10	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 146	F 1	凹み	12	8	暗褐色(10YR3/3)	なし			なし	
P 147	F 1	凹み	29×16	6	暗褐色(10YR3/4)	なし			なし	
P 148	F 1	あり	35	11	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 149	F 1	あり	20	9	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 150	F 1	凹み	17×35	11	黒褐色(10YR2/3)	なし			なし	
P 151	F 1	あり	25×27	13	黒褐色(10YR2/3)	あり	10	暗褐色(10YR3/3)	なし	縄文土器破片
P 152	F 1	あり	28	7	黒褐色(10YR3/2)	なし			なし	
P 153	F 1	あり	20×16	11	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	剝片
P 154	F 1	あり	20×27	10	黒色(10YR2/1)	なし			なし	
P 155	F 1	あり	14×21	6	黒褐色(10YR2/3)	なし			なし	
P 156	F 2	あり	31×22	11	黒褐色(10YR2/3)	なし			なし	
P 157	F 2	あり	21	8	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 158	F 2	あり	13×11	10	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 159	F 2	あり	18	9	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	土器破片・貝片
P 160	F 2	あり	10×12	5	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 161	F 2	あり	16×13	8	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	土器破片
P 162	F 2	あり	15	8	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 163	F 2	あり	40×28	16	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 164	F 2	あり	24×16	20	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 165	G 1	あり	23	11	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 166	G 1	あり	22	15	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 167	G 1	あり	25	9	黒褐色(10YR3/2)	なし			なし	埋土：砂質
P 168	G 1	あり	43×25	11	黒褐色(10YR2/3)	なし			なし	
P 169	G 1	あり	20	13	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 170	G 1	あり	12	9	黒褐色(10YR3/2)	なし			なし	
P 171	G 1	あり	15	10	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 172	G 1	あり	20	13	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 173	G 1	あり	18	8	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 174	G 1	凹み	8	6	黒褐色(10YR3/2)	なし			なし	
P 175	G 1	あり	40×21	14	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 176	G 1	あり	11	11	黒褐色(10YR3/4)	なし			なし	
P 177	G 1	あり	20×17	10	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 178	G 1	あり	18×14	9	黒褐色(10YR3/2)	なし			なし	
P 179	G 1	あり	18×20	13	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 180	G 1	凹み	100×40	8	黒褐色(10YR2/3)	なし			なし	
P 181	G 2	あり	17×19	9	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 182	G 2	あり	15×24	8	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	縄文土器破片
P 183	G 2	凹み	11	5	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 184	G 2	あり	13	10	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 185	G 2	あり	10×19	7	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	炭化物を含む
P 186	G 2	あり	14×23	10	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 187	G 3	あり	16	9	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 188	G 3	凹み	16	12	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 189	G 3	凹み	8	6	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	
P 190	G 4	あり	14×18	13	黒褐色(10YR2/2)	なし			なし	

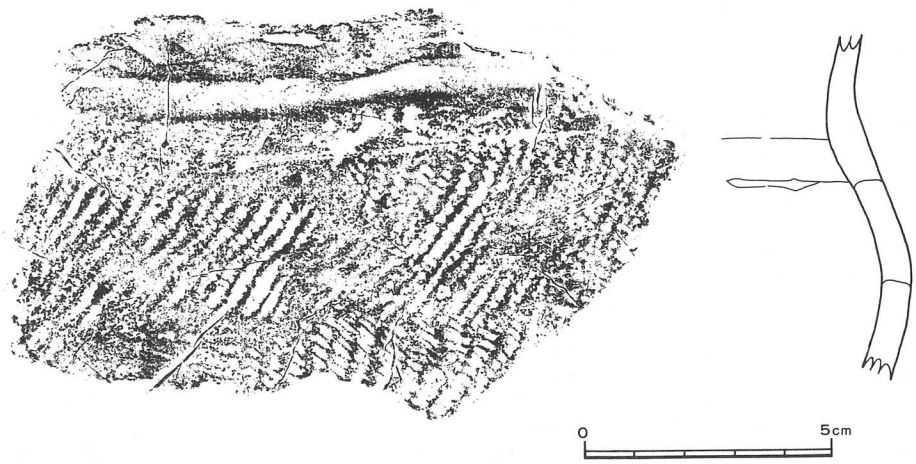
Ⅲ. 遺　　物

〔遺物の出土状況〕　遺物の種類は，縄文土器，弥生土器，製塩土器，剥片などである。出土点数から見れば，縄文土器が大半を占めるがほとんど破片で，個体数は不明である。土器の分布状況を地区ごとに見ると，発掘区の東側～南側に集中して見られる。各層からは，平均して出土している。遺構面からの土器出土は少ない。また，土坑ごとに見ると，土坑3以外の8基の土坑から土器片が出土しているが，堆積土中からの出土が多く，底面からの出土は少ない。

1．土　　器（縄文土器，弥生土器，製塩土器）

鉢（第60図）

土坑1の堆積土中から出土した。内面は黄褐色，外面は明黄褐色で，外面胴部に，斜行縄文（LR）が施文されている。口縁部外面は横ナデ，内面はナデ調整が施されている。口頸部は，わずかに外傾している。胎土には，石英粒が含まれている。胴部に，粘土の継ぎ目が確認できる。胴部器厚0.6～0.7cm，口径17.0cm，最大径19.0cmと推定できる。所属時期



挿図番号	土器番号	出土地地区・層位	部位	器厚(mm)	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	備考
第60図	1	土坑 1	口縁部～胴部	6～7	ナデ 横	縄文	黄褐色	明黄褐色	鉢

第60図　縄文土器

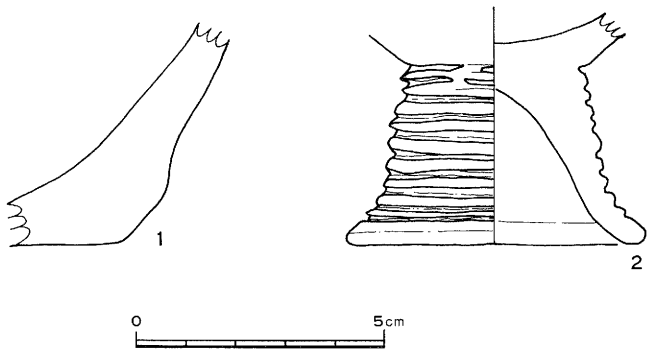
は縄文晩期(大洞A式)と思われる。

平　底　坏(第61図－1)

C3区第3層から出土した。内面，外面とも暗褐色で，胎土には微細な雲母粒が含まれている。文様は施されていない。所属時期は不明である。

台付小鉢(第61図－2)

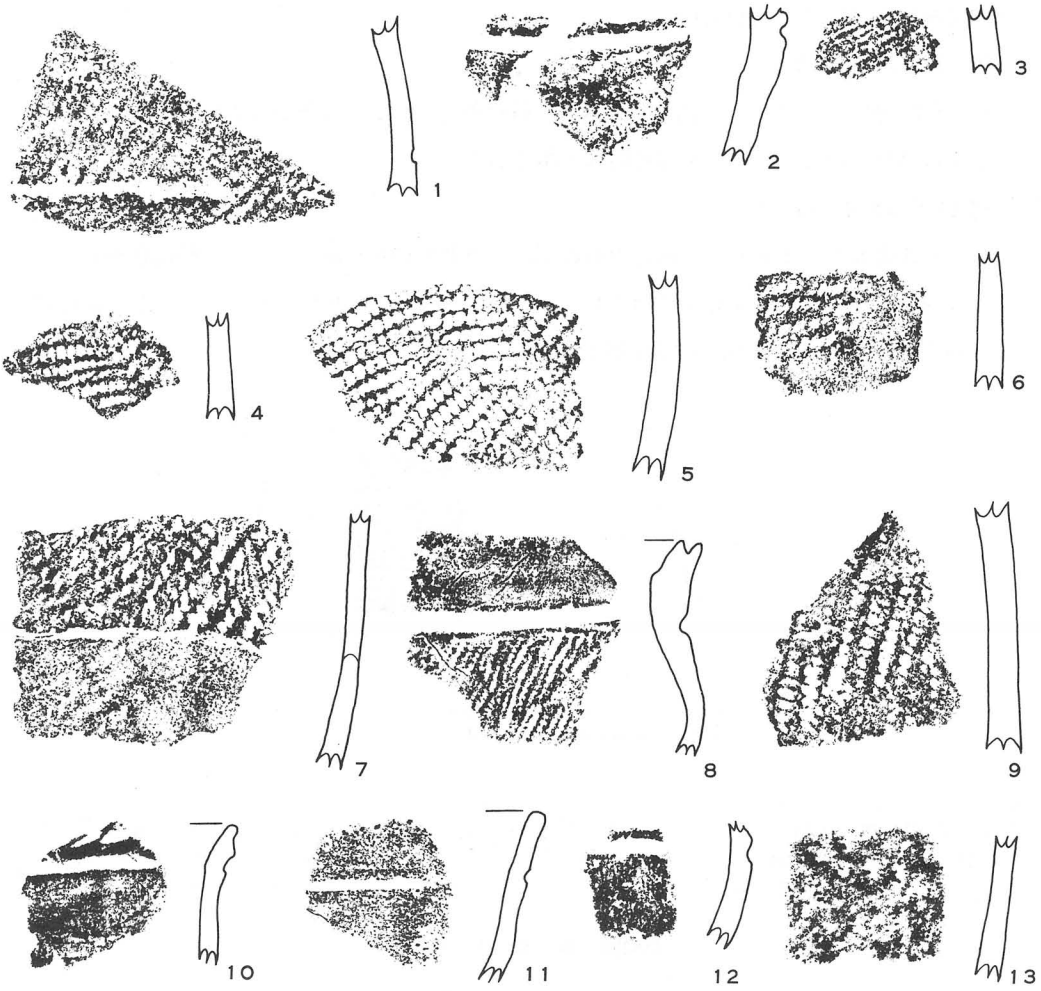
G1区遺構面から出土した。器台内面底部は，篦磨き調整が施されていて暗褐色をしている。外面は褐色で10条の沈線が外周をめぐる。器底は，にぶい橙色をしており，胎土には微細な石英粒が含まれている。所属時期は縄文晩期(大洞A式)と思われる。



挿図番号	土器番号	出土地地区・層位	部位	器厚(mm)	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	備考
第61図	1	G3－第Ⅲ層	底部				暗褐色	暗褐色	平底坏
	2	G1－遺構面	器台		ヘラミガキ		暗褐色	褐色	台付小鉢

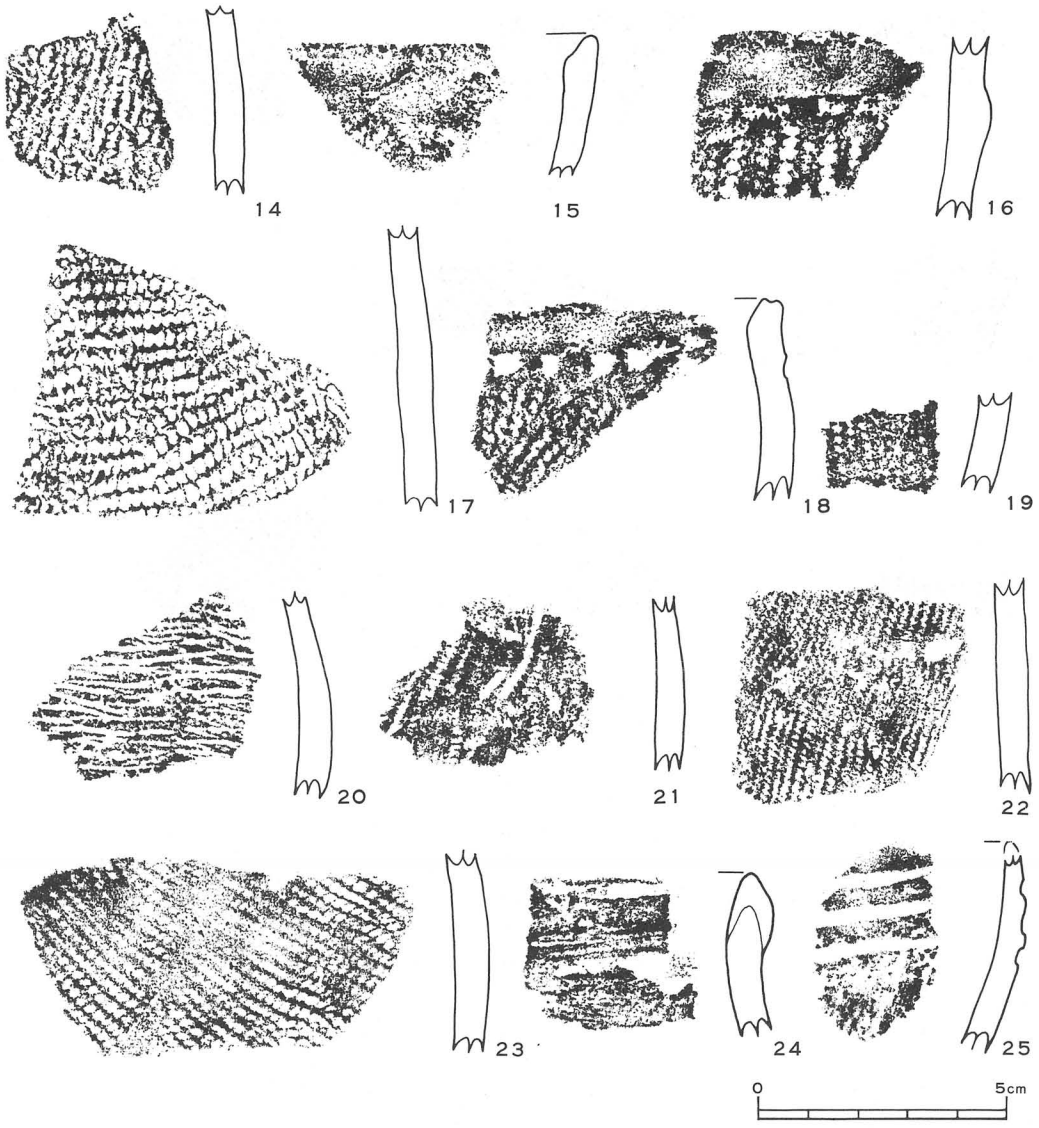
第61図　縄　文　土　器

以下に比較的大きい土器片の拓影を次の図にて示す。(第62図，第63図，第64図)



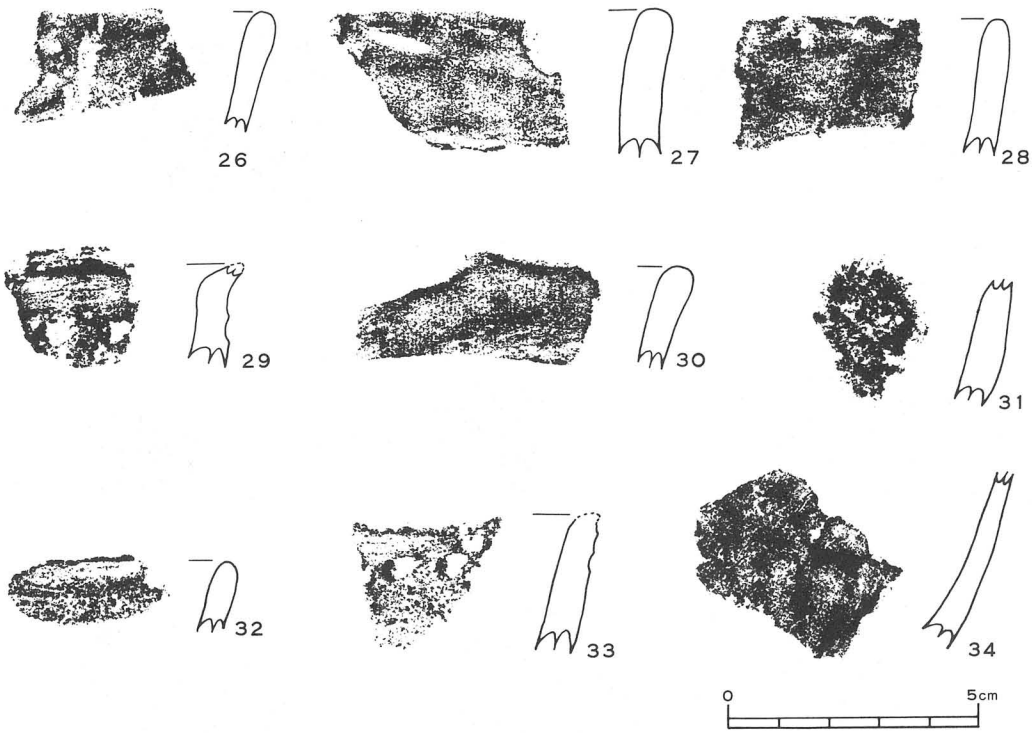
挿図番号	土器番号	出土地区・層位	部位	器厚(mm)	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第62図	1	土坑 1	胴部	5.5～5.8	ミガキ横	縄文	黄褐色	明黄褐色	25－a－2	
	2	土坑 2	口縁部	4.5～7.9	ミガキ横	縄文	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	25－b－1	
	3	土坑 5	胴部	5.3～5.6	ミガキ横	縄文	明黄褐色	橙色	25－c－4	
	4	土坑 6	胴部	5.1～5.3	ミガキ	縄文	赤褐色	明赤褐色	25－d－2	
	5	土坑 7	胴部	6.2～6.8	ミガキ横	縄文	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	25－e－1	
	6	土坑 7	胴部	4.6～5.8	ミガキ横	縄文	黒褐色	黒褐色		
	7	土坑 7	胴部	4.1～4.9	ミガキ斜	縄文	黒褐色	黒褐色		
	8	土坑 8	口縁部	4.0～7.1	ヘラミガキ横	縄文・ナデ横	灰黄褐色	にぶい黄橙色	25－f－2	
	9	土坑 8	胴部	6.5～7.0	ミガキ	縄文	にぶい黄褐色	明褐色	25－f－1	
	10	土坑 8	口縁部	4.9～5.0	ミガキ斜		褐色	暗褐色		
	11	土坑 8	口縁部	4.5～5.1			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		
	12	土坑 8	口縁部	5.5～6.2	ミガキ		褐色	明赤褐色		
	13	土坑 8	胴部	5.2～5.7			暗褐色	明赤褐色		

第62図　出土土器



挿図番号	土器番号	出土地 地区・層位	部位	器厚(mm)	調整 内面	調整 外面	色調 内面	色調 外面	図版番号	備考
第63図	14	土坑 9	胴部	5.5～6.2		縄文	明褐色	明黄褐色	25−g−10	
	15	G1−第Ⅰ層	口縁部	5.5～7.0	刷毛目		暗褐色	にぶい黄橙色		
	16	G4−第Ⅱ層	口縁部	7.0～9.8	ミガキ横	縄文	にぶい黄橙色	明赤褐色		大木10
	17	G3−第Ⅱ層	胴部	6.0～7.5	ミガキ横	縄文	にぶい黄橙色	黒褐色		
	18	F4−第Ⅱ層	口縁部	7.0～8.0	ミガキ横	縄文	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色		弥生土器
	19	土坑 8	胴部	5.0～5.4		縄文	暗褐色	明赤褐色		
	20	F4−第Ⅱ層	胴部	4.7～5.2	ヘラミガキ	刷毛目	黒褐色	暗赤褐色		弥生土器
	21	F4−第Ⅲ層	胴部	5.0～5.4	ナデ	縄文	極暗赤褐色	にぶい赤褐色	24−d−6	
	22	G3−第Ⅲ層	胴部	5.5～6.2	ミガキ	縄文	暗赤褐色	明赤褐色	24−d−4	
	23	G4−第Ⅲ層	胴部	5.9～6.5	ナデ	縄文	暗褐色	明赤褐色	24−d−3	
	24	F1−第Ⅲ層	口縁部	6.3～8.9	ナデ 横	ナデ横	赤褐色	赤褐色		
	25	G2−Pit 182	胴部	4.7～5.2			橙色	明褐色	24−c−3	

第63図 出 土 土 器

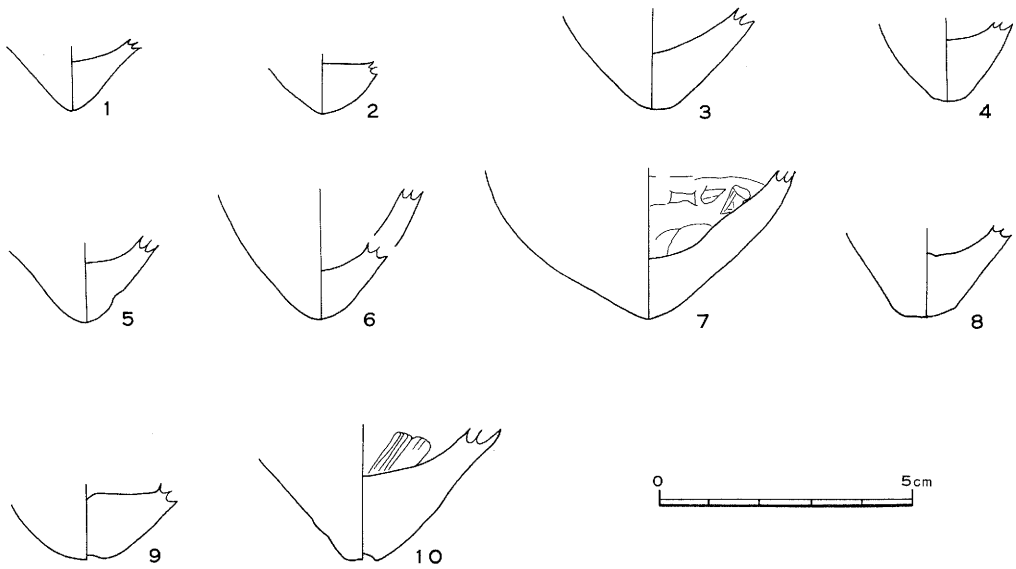


挿図番号	土器番号	出土地 地区・層位	部位	器厚(mm)	調整		色調		図版番号	備考
					内面	外面	内面	外面		
第64図	26	G4－第Ⅱ層	口縁部	4.5～5.6	ナデ横	ミガキ	褐色	にぶい赤褐色		
	27	F4－第Ⅲ層	口縁部	7.0～9.0	ミガキ	ミガキ横	褐色	暗褐色	24－d－2	
	28	G4－第Ⅱ層	口縁部	6.2～6.8	ミガキ横	ミガキ横	にぶい黄橙色	褐色		
	29	G4－第Ⅱ層	口縁部	7.2～8.8	ミガキ横	ナデ横	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		弥生土器
	30	F3－第Ⅰ層	口縁部	6.2～7.2	ヘラミガキ横	ヘラミガキ横	にぶい橙色	にぶい橙色		
	31	G2－第Ⅲ層	胴部	5.8～6.8			明赤褐色	明赤褐色		
	32	G4－第Ⅱ層	口縁部	4.8～6.2	ミガキ	ナデ横	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色		
	33	G4－第Ⅱ層	口縁部	6.7～7.5	ミガキ	ナデ横	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		弥生土器
	34	G1－第Ⅰ層	胴部	3.8～6.5	ヘラミガキ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色		

第64図　出土土器

製塩土器(第65図)(図版24b)

底部10個(内1個は発掘区外より採取したもので，仮に地区名をH2としておく)と，部位不明の細片33点が出土した。いずれも赤色を呈し，器厚2.5～3.5mmの無文粗製土器片である。ここでは，底部のみを図にて示す。



挿図番号	土器番号	図版番号	地区・層位	調整		色調		底部形態
				内面	外面	内面	外面	
第65図	1	24−b−1	土坑 8			暗赤褐色	暗赤褐色	尖底
	2	24−b−2	土坑 8			褐色	褐色	尖底
	3	24−b−3	H2−第Ⅰ層			褐色	黄褐色	尖底
	4	24−b−4	土坑 5			赤褐色	赤褐色一部暗褐色	尖底
	5	24−b−5	G1−第Ⅰ層			赤褐色	赤褐色一部黄褐色	尖底
	6		F1−第Ⅱ層	ナデ		暗褐色	暗褐色	尖底
	7	24−b−6	G1−第Ⅲ層		ヘラナデミガキ	黄褐色一部赤褐色	暗褐色一部黄褐色	尖底
	8		土坑 7			赤褐色	褐色	平底
	9	24−b−7	土坑 9			赤褐色	赤褐色	上底
	10	24−b−8	土坑 9	刷毛目状ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	上底

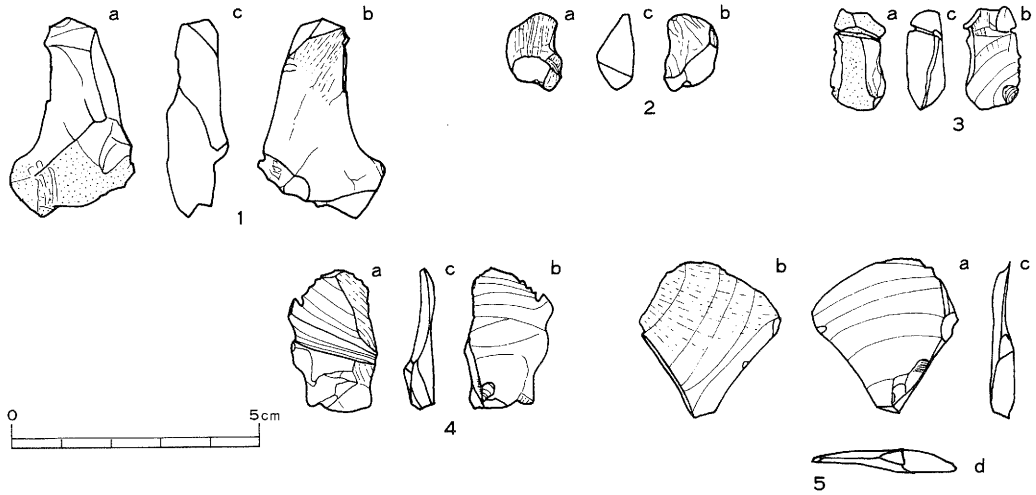
注 H2−第Ⅰ層は仮表示

第65図 製塩土器底部

2．剥　　片（第66図 1～5）

5点出土した。4は，縦長剥片で打面が見られる。a面には深いリングが見られる。また，右上に大きな剥離が見られ側縁を鋭くさせている。b面の主要剥離面はなめらかで，バルブ，バルバスカー，リングが見られる。左下側縁は，欠損している。

5は，打面より末端に向って広がる扇状の縦長剥片である。a面の主要剥離面はなめらかで，リングが見られる。右下側縁のバルブ付近に剥離が見られ，剥離後，右上方よりの打撃によって，右側が欠損している。b面には，左上方よりのリング，フィッシャーが見られる。



挿図番号	石器番号	石　材	地区・層位	色　　調
第66図	1	頁　岩	F1－第Ⅱ層	明褐灰色(5YR 7/1)
	2	石　英	F1－Pit 153	灰 白 色(2.5Y 8/2)
	3	黒曜石	F2－第Ⅲ層	黒　　色(10YR 1.7/1)
	4	頁　岩	G4－第Ⅱ層	灰　　色(5Y 6/1)
	5	頁　岩	土　坑　7	暗灰黄色(2.5Y 5/2)

第66図　剝　　片

Ⅳ. 考　　察

1. 遺　　構

土　　坑

土坑は計９基検出された。いずれも，地山面で検出された。形態・規模等は，さまざまで，まとまりを示さない。また，位置的にも特別なかたよりはなく，土坑相互の有機的関係も見出せない。

土坑７以外の８基の土坑に焼面が確認されている。これらの焼面は，土坑の底面や壁面に見られたもので，土坑周縁には広がっていない。焼面の厚さは薄く，風化していて崩壊しやすい。また，土坑１，土坑４以外の７基の土坑からは，炭化物が出土している。

土坑６と土坑８の中央底部には，焼跡のない玉石が見られた。

土坑６内の石は，中央部に３個並んであり，それぞれ横幅は，18cm，10cm，19cmである。２個は底面に接し，１個は２層上面の炭層上にあった。

土坑８内の石は，横幅10～19cmで，中央部に土坑を二分するように６個あった。３個は底面に接し，残りは土坑６と同じように，炭層上にあった。これらの石の用途は不明である。

以上のことから土坑の中で火を使用したものと思われるが，性格等は不明である。また，土坑６，土坑８の底面より土器片が数点出土しているが，年代を決定する資料とはならず時期も不明である。

第10表　土　坑　観　察　表

観察項目 / 土坑	平面形	大きさ(cm)	深さ(cm)	壁			底		堆積土内含有物	図	図版
				壁高(cm)	立ち上がり角(度)	焼面	底面の傾き(度)	焼面			
土坑１	隅丸方形	200×130	40	30～45	40～60	有	10（南に）	有	縄文土器	第51図	21
土坑２	略台形	164×150	25	15～20	24～70	有	10（南西に）	無	縄文土器・炭化物・焼土	第52図	21
土坑３	楕円形	116×97	15	10	28～33	有	10（南西に）	無	炭化物	第53図	
土坑４	楕円形	185×150	26	12～20	45～70	有	6（南西に）	有	縄文土器・細礫	第54図	21
土坑５	楕円形	125×62	24	20～25	37～44	有	平坦	無	縄文土器・製塩土器 炭化物	第55図	22
土坑６	楕円形	95×60	11	8～10	40～42	有	平坦	有	縄文土器・炭化物	第56図	22
土坑７	楕円形	102×150	29	10～15	30～68	無	13（南西に）	無	縄文土器・製塩土器・石器 炭化物・焼土・中礫	第57図	22
土坑８	楕円形	225×115	33	6～24	52～60	有	平坦	無	縄文土器・製塩土器 炭化物	第58図	23
土坑９	楕円形	（推定） 160×120	35	25	72	有	平坦	無	縄文土器・製塩土器 炭化物	第59図	

第11表　土坑の使用痕跡による分類

焼面の状況 / 堆積土内炭化物	底面・壁面が焼けているもの	壁面が焼けているもの	焼けた痕跡が認められないもの
底面上に，層をなして多量にある	土坑6	土坑5・土坑8	
下部堆積層に，少量ある		土坑3・土坑9	土坑7
ブロック状にある		土坑2	
炭化物を含まない	土坑1・土坑4		

ピット

190個という多数のピットが検出された。しかしその性格は不明である。土坑との関連も不明である。各区域ごとにピット数を区分してみると，第12表のようになり，発掘区の東側に多く分布している。ピットの深さは，5～19cmに入るものが93％で大半を占め，比較的浅い。

第12表　各地区のピット数

	A	B	C	D	E	F	G	計
1	2	8	14	13	3	17	16	73
2	5	10	10	13	25	9	6	78
3	13		7	4	2		3	29
4	7			2			1	10
計	27	18	31	32	30	26	26	190

その他

イ　集　　石（図版23）

C4区の遺構面上で，広さ1m四方に，10～20cmの玉石が50数個見られた。石に焼けた痕跡は見られない。単なる上方よりの流石か，遺構になるか否か，性格等は不明である。

ロ　岩石の表出（図版23）

F4区の遺構面で，広さ1m四方の範囲で岩石が半分ほど表出している。遺構になるか否か，性格等は不明である。

2. 遺　　物

縄文土器

227点出土している。すべて破片で個体数は不明である。口縁部は，胴部からの立ち上がりで，①そのまま直立するもの。②外反するもの。①②において沈線をめぐらすものなどがある。文様は，外面に縄文が施文されているものが大半を占める。

弥生土器

5点出土している。すべて破片である。頸部に刺突文があり，外反するものが3点見られる。そのうち2点は，刺突文の下部に縄文が施文されている。部位不明で，外面に撚糸の圧

痕文の見られるものが２点ある。

製 塩 土 器

土器底部が10点出土している。その他部位不明の細片が33点出土している。底部の胎土には，微細な石英粒が含まれている。内，外面に文様は見られない。底部を形態分類すると，①尖底，②平底，③凹みのあるものの３形態になる。

製塩遺構との関係，年代は不明である。

第13表　製塩土器（細片・底部）の出土状況　　（ ）内は底部の個数

各層位・ピットからの出土

層位＼地区名	F1	G1	B2	E2	F2	G2	A3	G4	計
第 Ⅰ 層	1	2 (1)							3 (1)
第 Ⅱ 層	(1)		2			1	1	1	5 (1)
第 Ⅲ 層		(1)				1			1 (1)
ピ ッ ト				5	1				6
計	1 (1)	2 (2)	2	5	1	2	1	1	15 (3)

土坑からの出土

	土坑1	土坑2	土坑3	土坑4	土坑5	土坑6	土坑7	土坑8	土坑9	計
堆積土中	0	0	0	0	(1)	7	(1)	4 (1)	5 (2)	16 (5)
底 面	0	0	0	0	0	2	0	0 (1)	0	2 (1)
計	0	0	0	0	(1)	9	(1)	4 (2)	5 (2)	18 (6)

3．遺 構 の 年 代

９基の土坑と，190個のピットが検出されたが，年代を決定する遺物が伴出せず，遺構の年代は不明である。ただ，出土している土器の中に大木10，大洞Ａ，大洞Ａ′，弥生土器と判明可能な土器があることから，本遺跡は縄文中期末から弥生時代の遺跡と推測される。

〔B地区〕

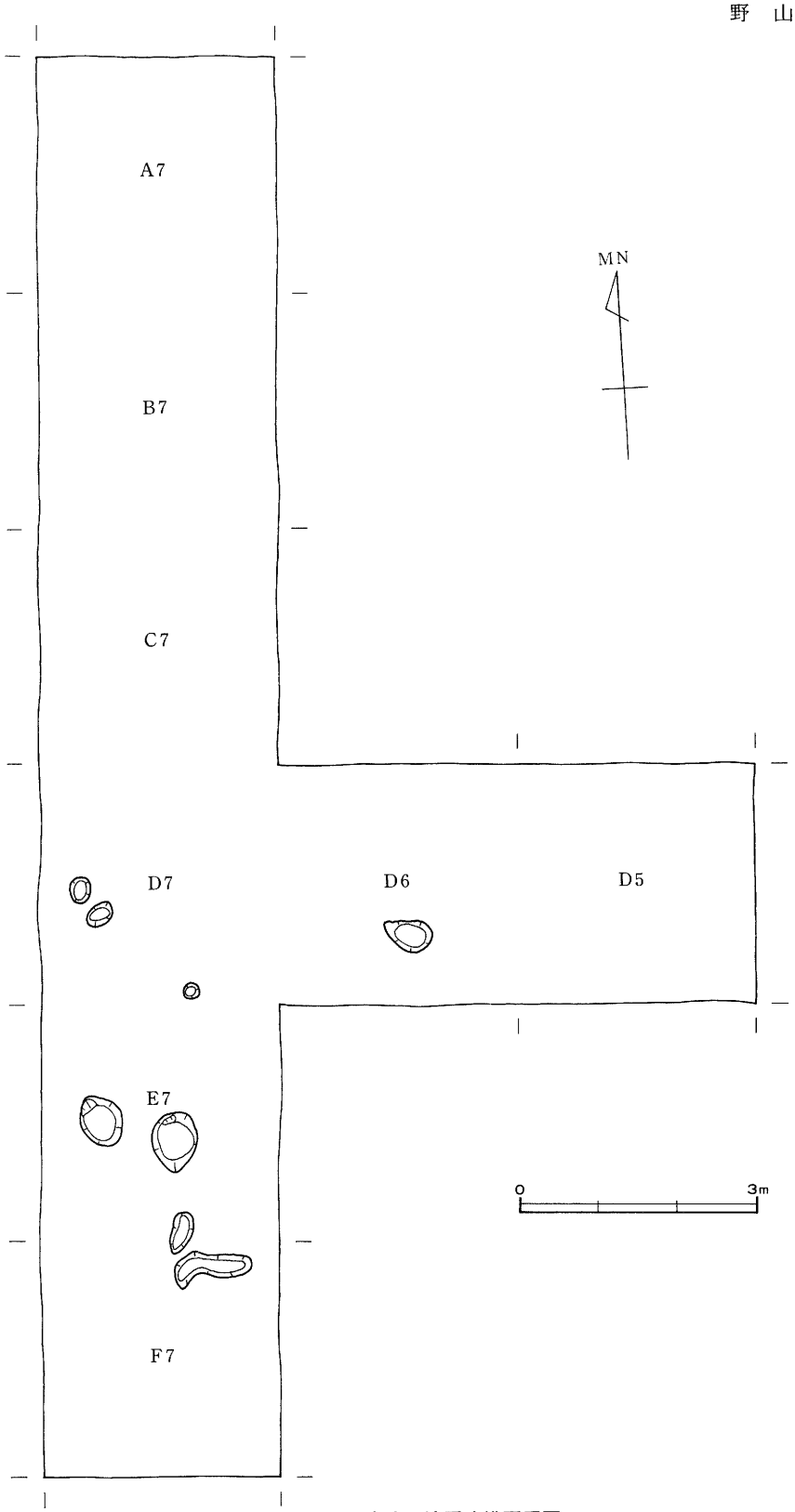
Ⅰ．調査の概要

昭和53年４月１日～２日，第１次調査区域（A地区）谷向いの緩斜面について，遺構の存否を確認するため，トレンチを設定した。トレンチは３m幅で地形等高線に沿って18m，また，これに直交して６mの長さとした。

Ⅱ．試掘の結果

1. 地山面で，円形小ピット６個，不明の小ピット２個を検出した。ピットの１つから縄文土器片１点が出土した。ピットは地山直上の堆積土層（第Ⅱ層）面で確認された。
2. 遺物は，上記土器の他，表土，第Ⅱ層から若干の縄文土器が検出された。
3. 遺構の性格

ピットは，まとまりなく散在している。その性格は不明である。地山に至る堆積土層の層序は，A地区の場合と同じであり，ピット検出面も同じである。ピット中の土器も縄文土器であることから，A地区の遺構と関連するものと思われる。また，ピットは予想に反して，南側に片寄り平坦地の南辺に近い。このことからピット群はトレンチ外にのびることはあり得るとしても，小範囲にとどまると思われる。



第67図　野山遺跡Ｂ地区遺構配置図

〔A地区・B地区のまとめ〕

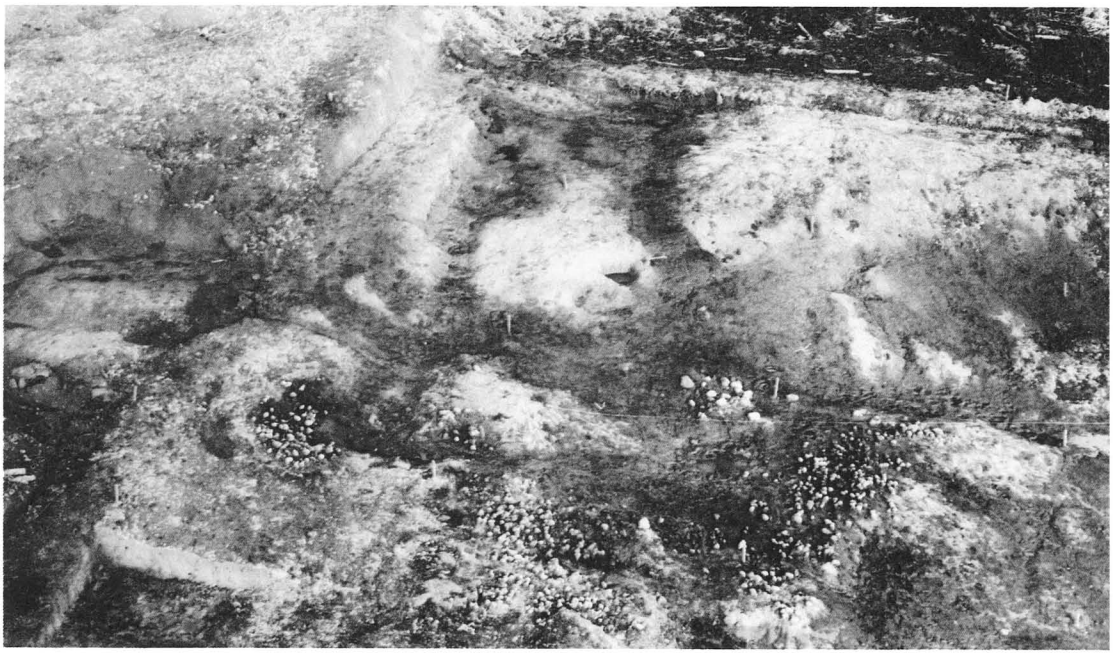
1. 今回の調査面積は，A地区252㎡，B地区72㎡の計324㎡である。
2. 発掘調査の結果，A地区では9基の土坑と190個のピットが検出された。B地区では8個のピットが検出された。
3. 土坑，ピットの性格は不明である。
4. 遺構の正確な年代は不明であるが，A地区，B地区とも縄文中期末～弥生時代の遺跡と推測される。
5. A地区とB地区の遺構は関連遺構と考えられる。

図　　版

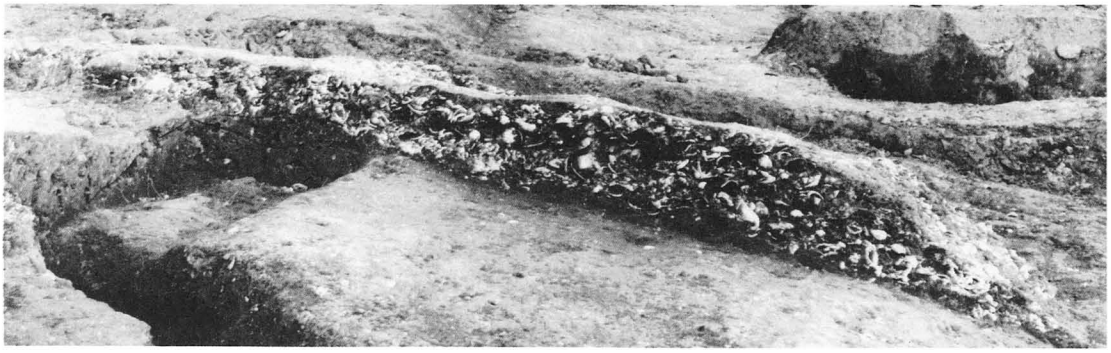
図版一　鬼ノ神山貝塚全景

遠景

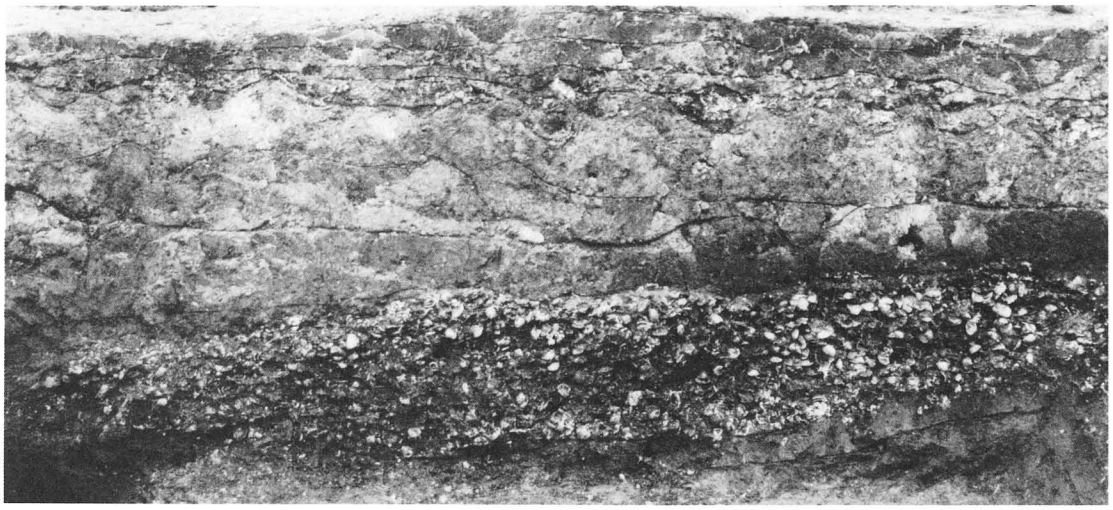
近景（発掘前）



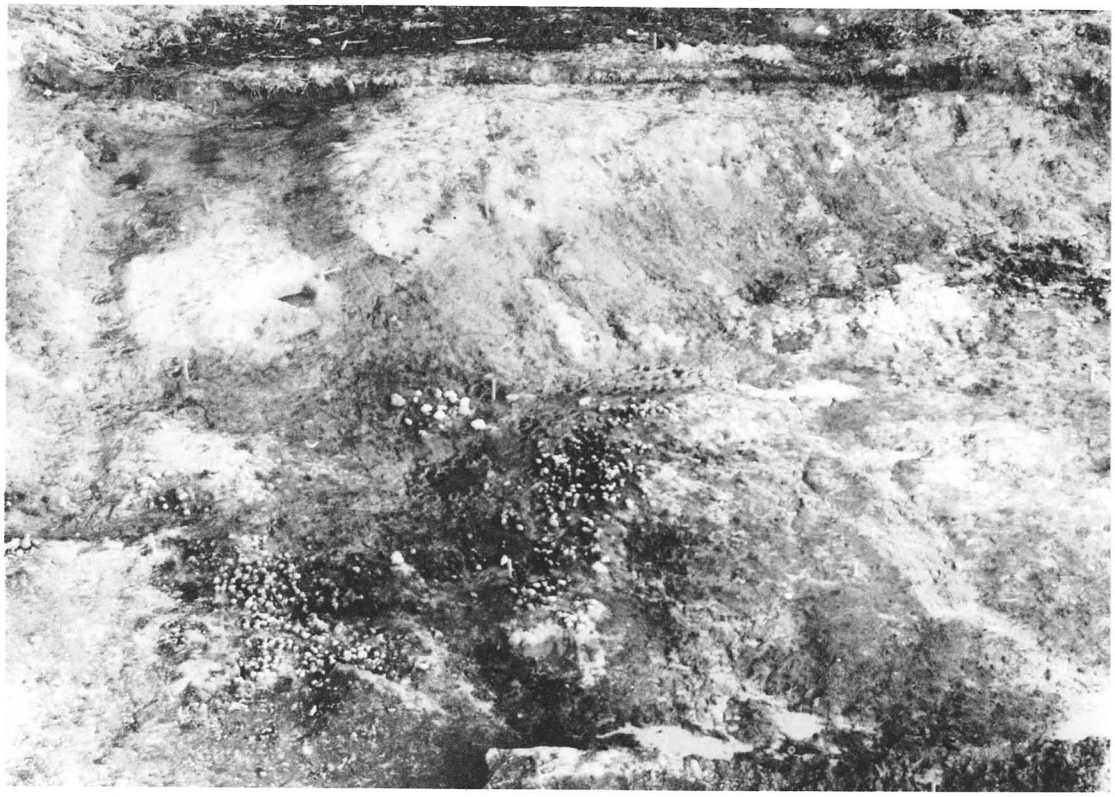
鬼ノ神山貝塚発掘区全景



第2貝塚貝層



第3貝塚貝層



焼礫群全域

焼礫群（北側より望む）

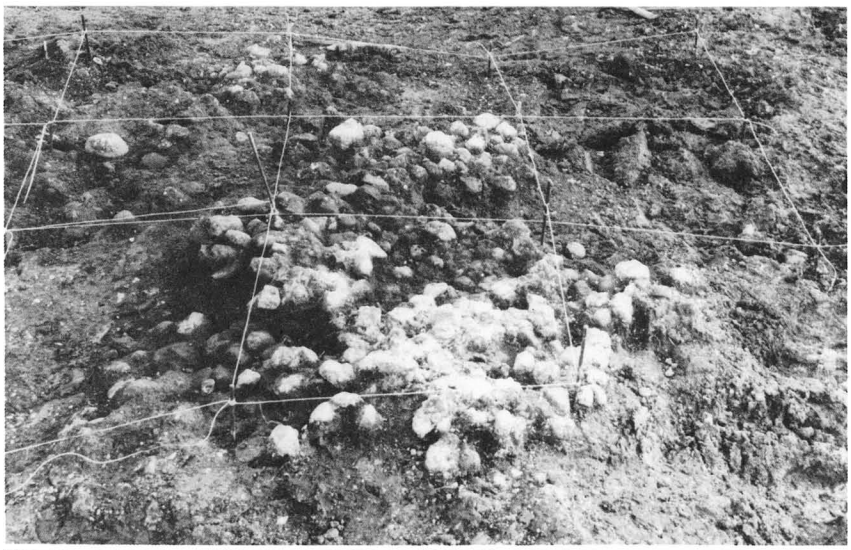
図版四　焼礫群　Ⅱ

第 1 支 群（R 1）

第 2 支 群（R 2）

第 4 支 群（R 4）

図版五　焼礫群　Ⅲ



第 5 支 群（R 5）

第 8 支 群（R 8）

第 9 支 群（R 9）

竪穴住居跡

溝・竪穴遺構・ピット群

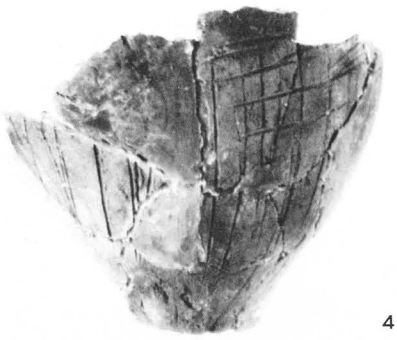
図版七　遺物Ⅰ　縄文土器・弥生土器

1

2

3

5



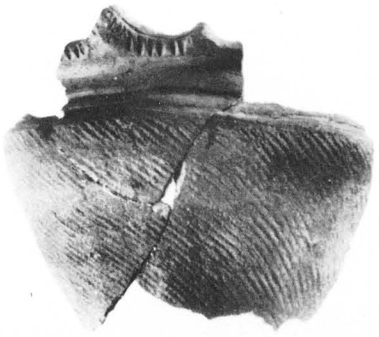
4

1～4　縄文土器　　5　弥生土器

図版八　遺物Ⅱ　縄文土器

1

2



3

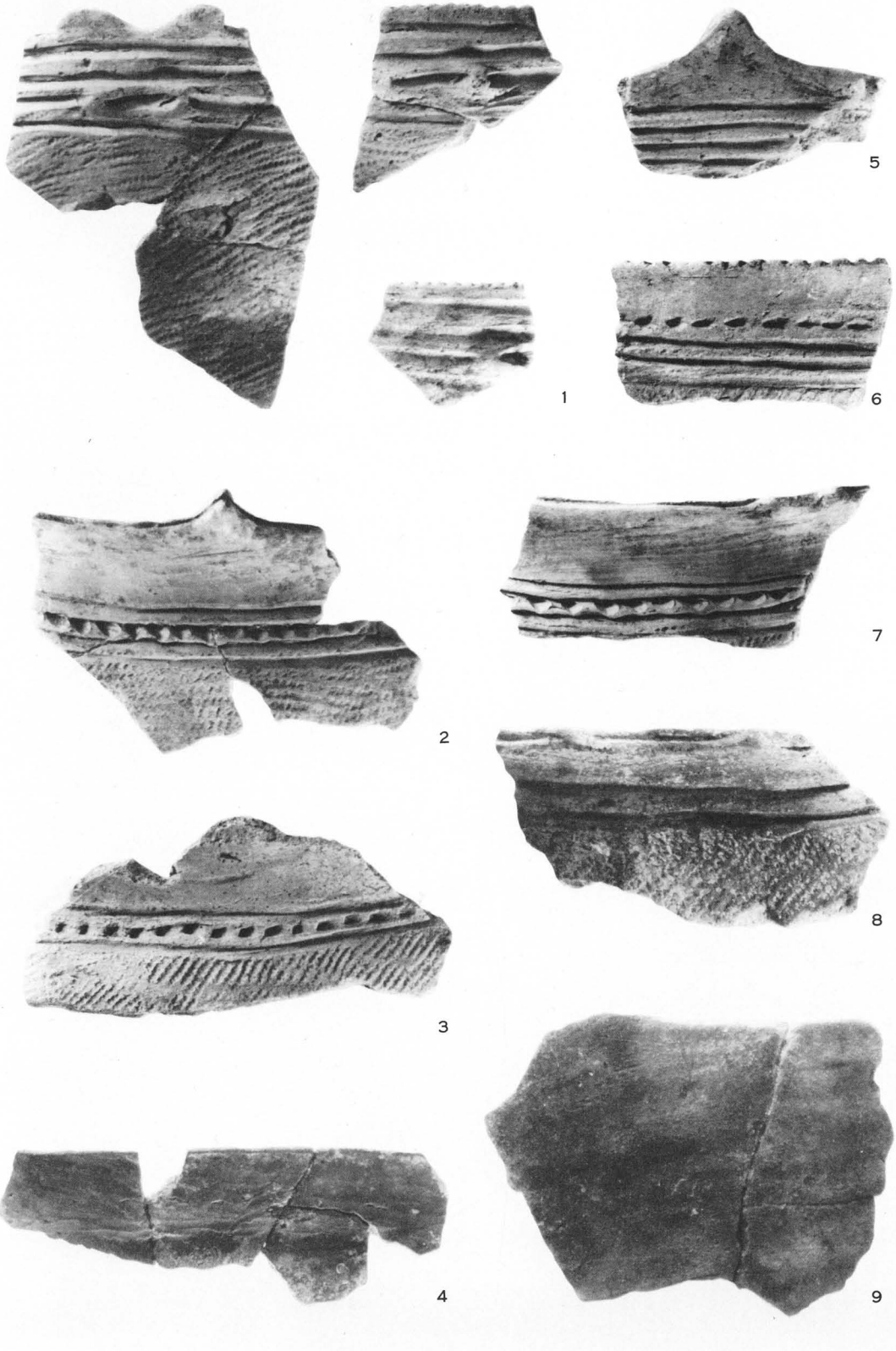
4

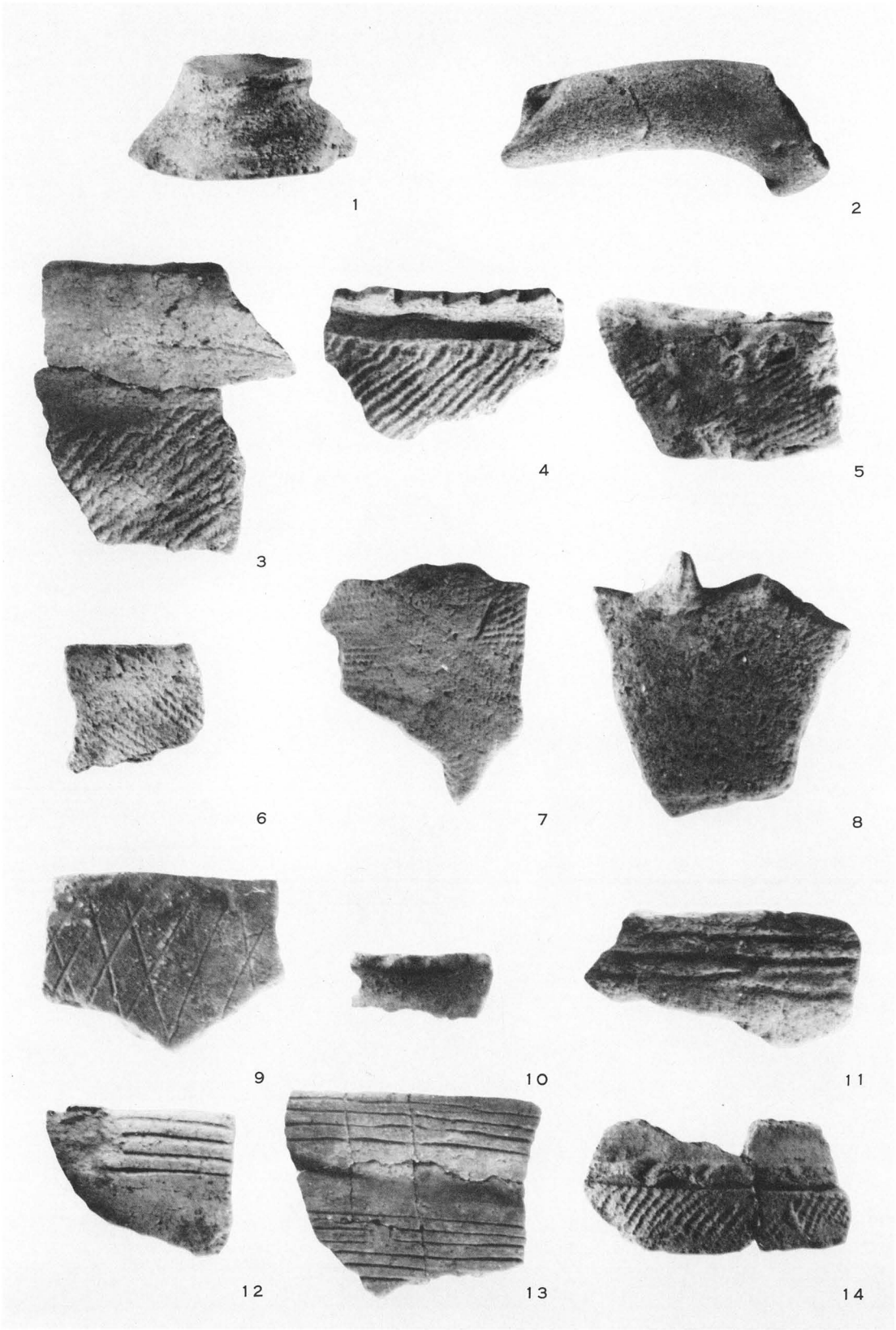
5

6

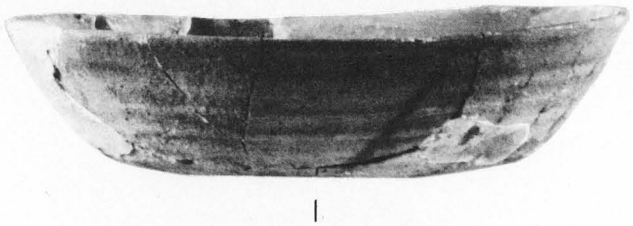
7

8


1
2
3
4
5
6
7
8
9



1～12　縄文土器　　13～14　弥生土器



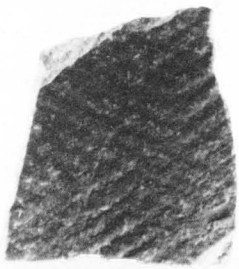
1

1

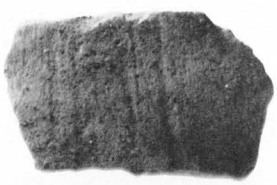
2

3

4

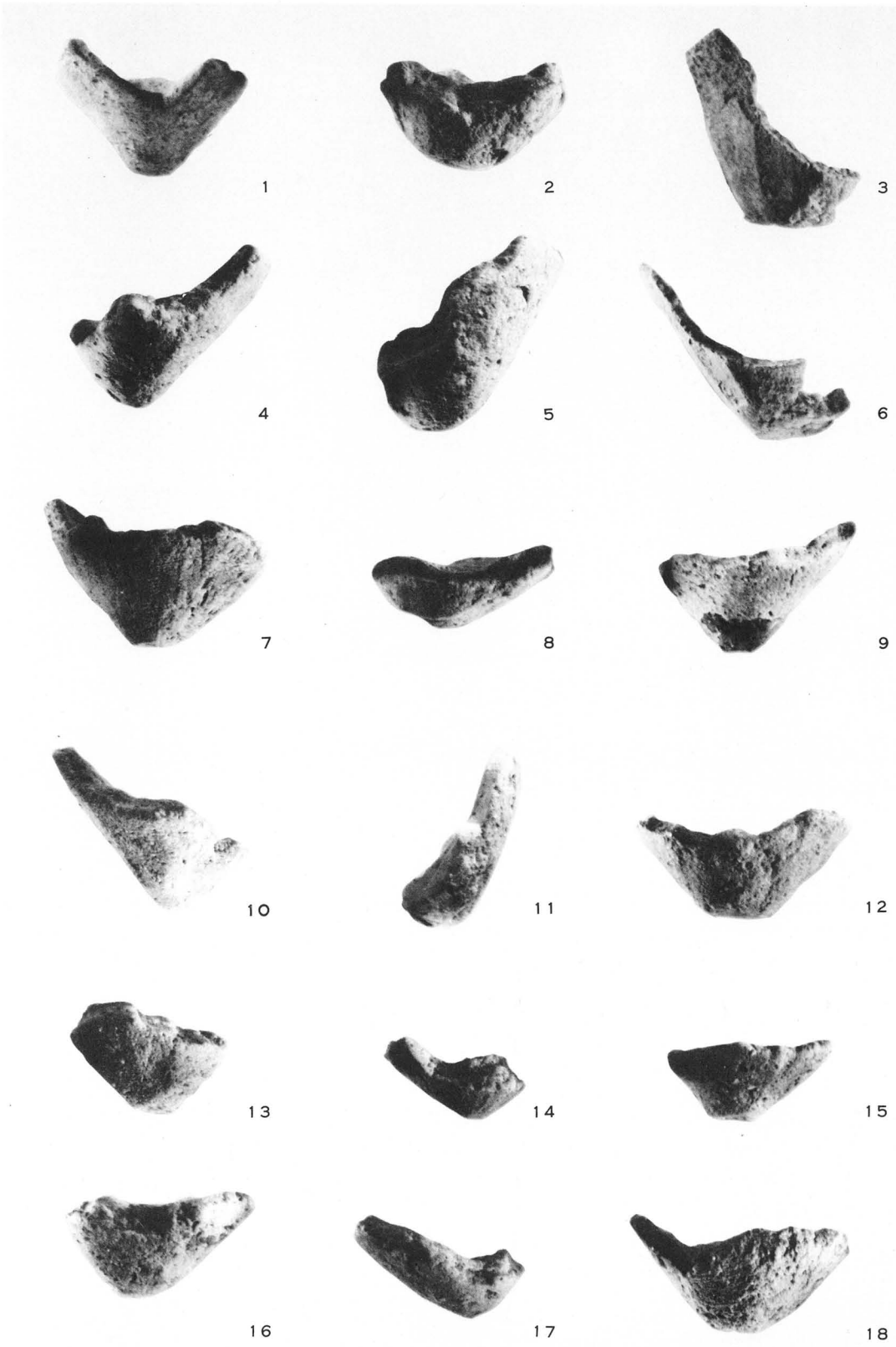


5

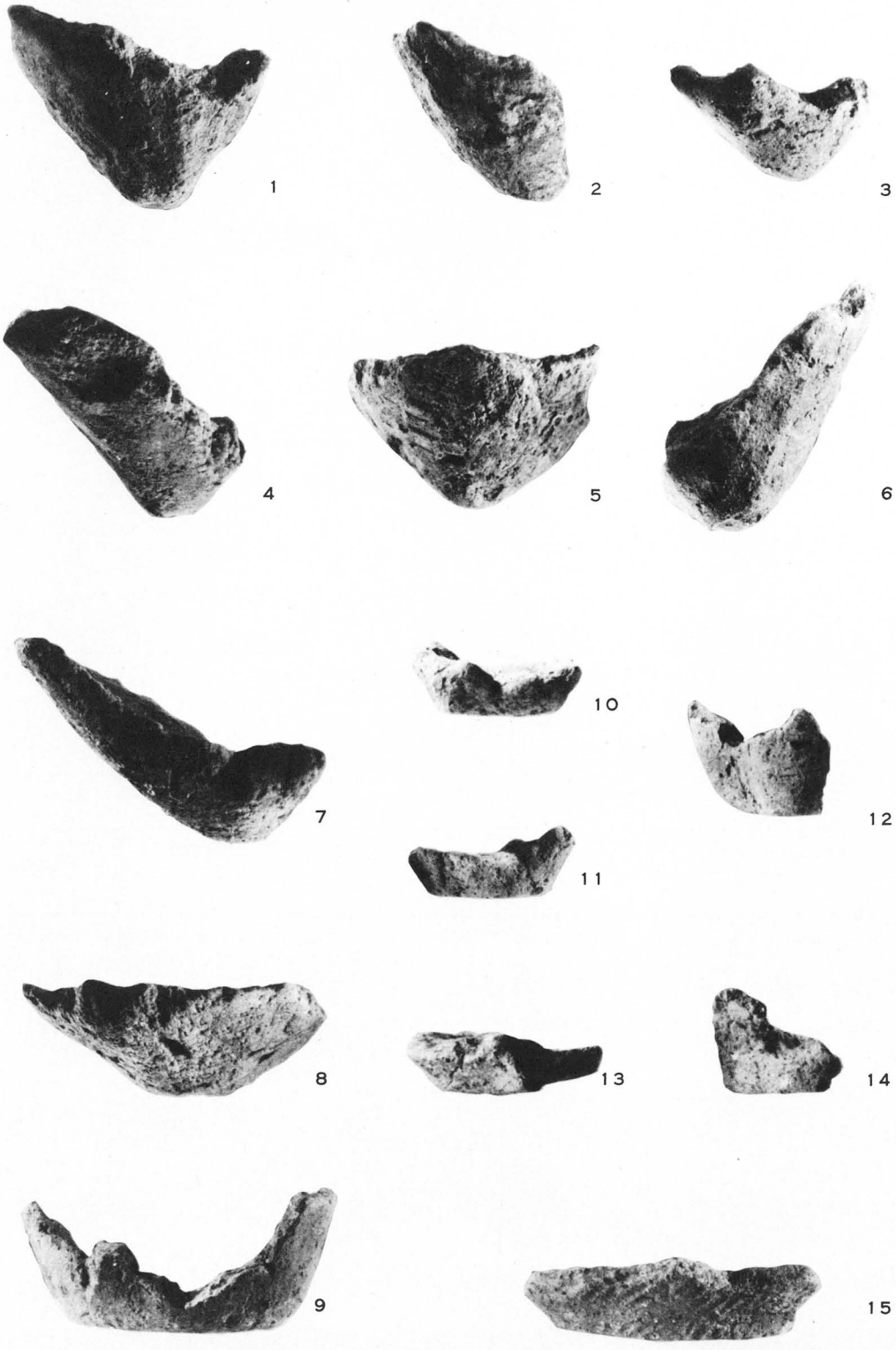


6

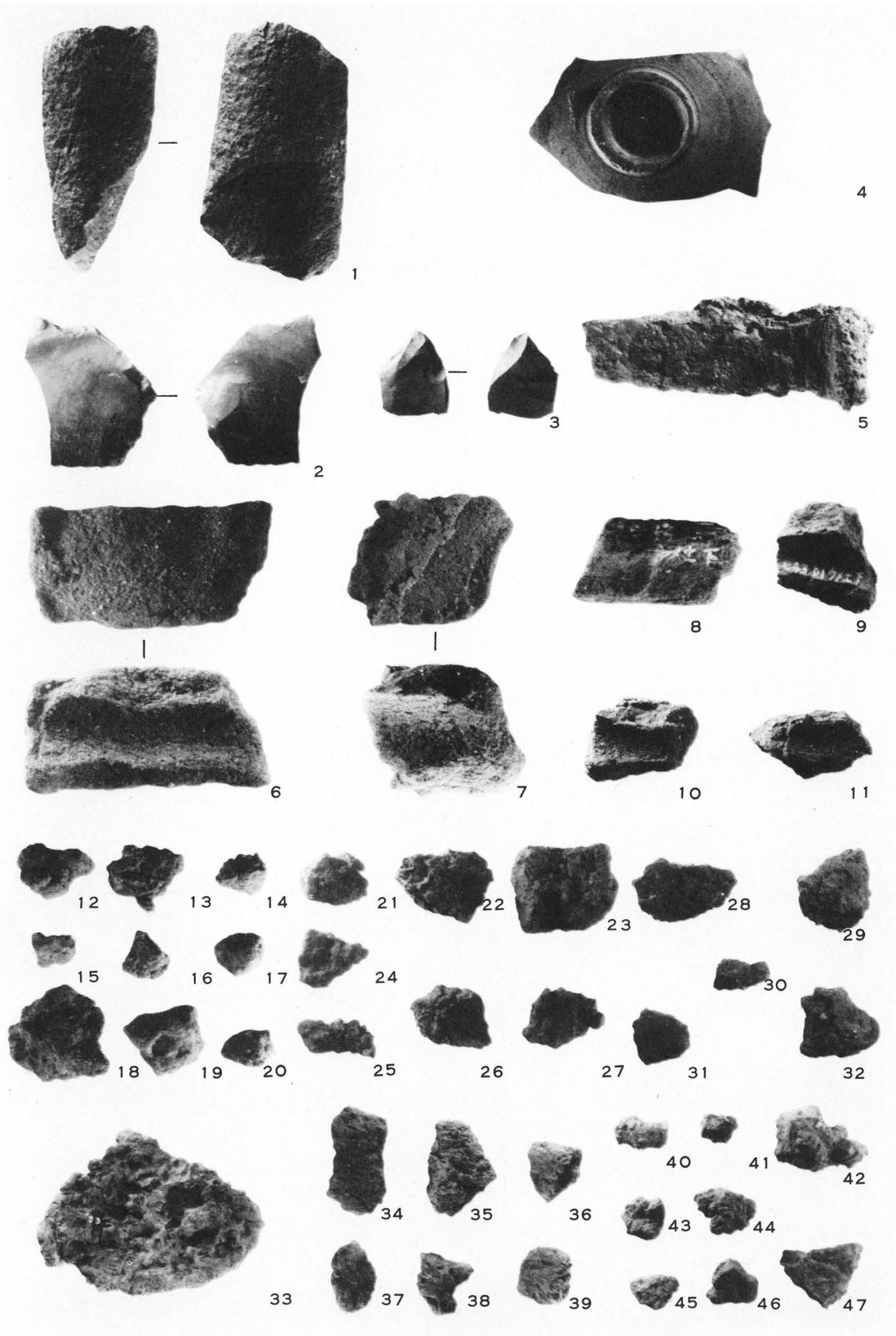
7

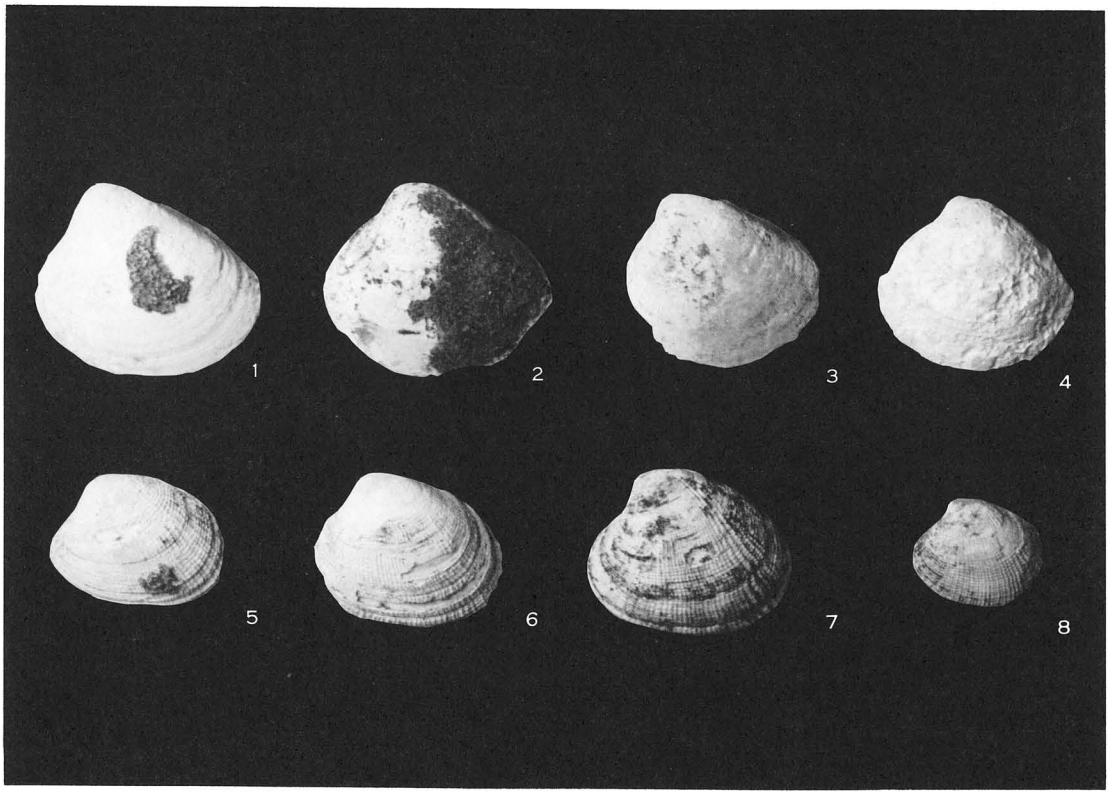

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18

図版一三　遺物Ⅶ　製塩土器（2）

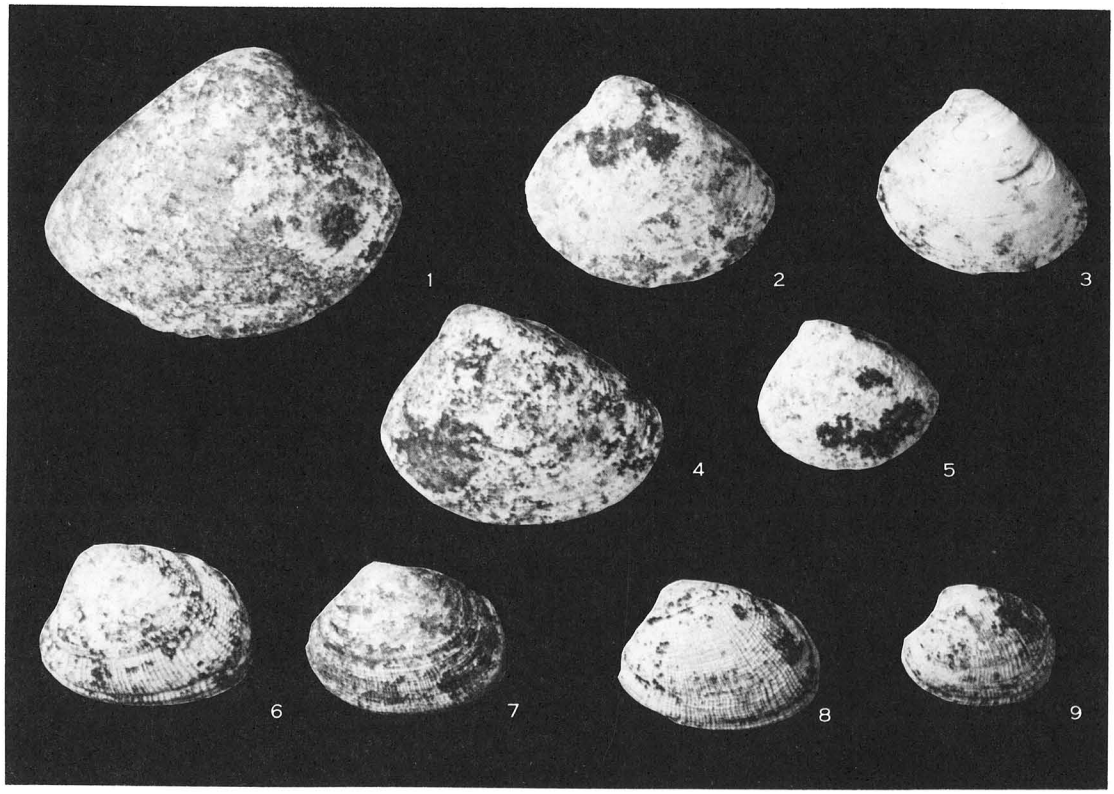


図版一四　遺物Ⅷ　石器・縁釉陶器・鉄器・羽口（六～一一）・鉄滓（一二～四七）

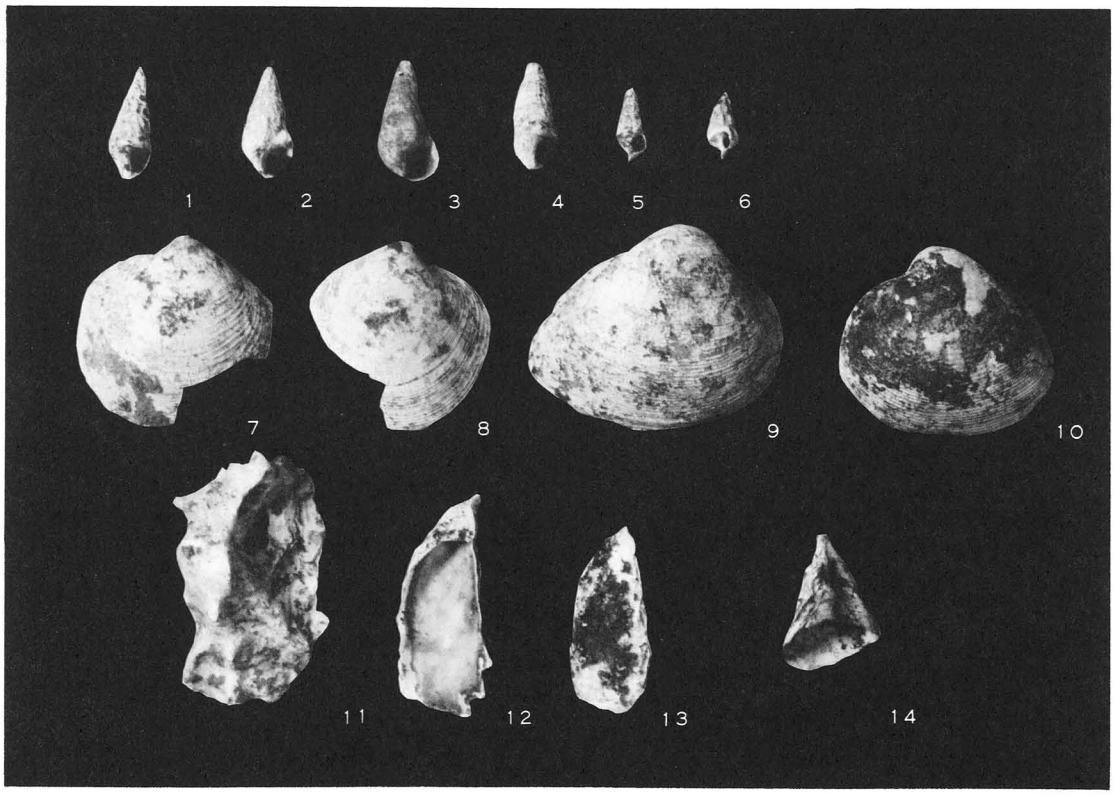




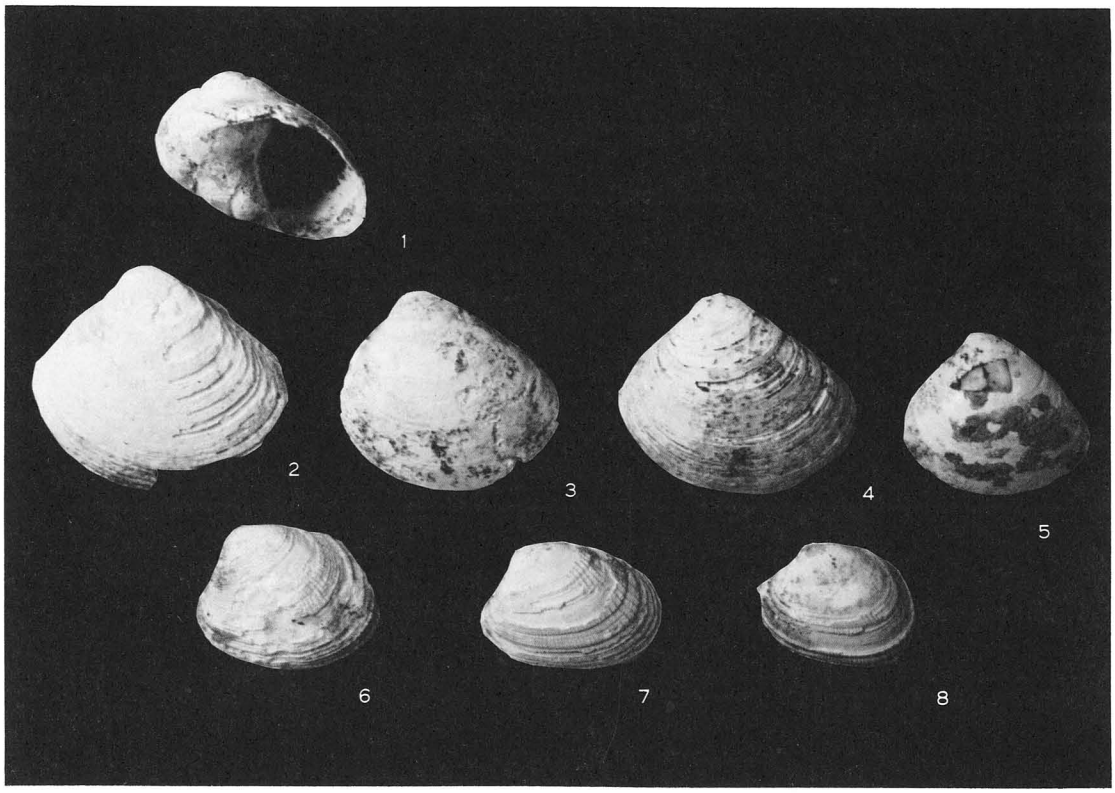
鬼ノ神山第1貝塚　1～4：ハマグリ，5～8：アサリ



鬼ノ神山第3貝塚　1～5：ハマグリ，6～9：アサリ

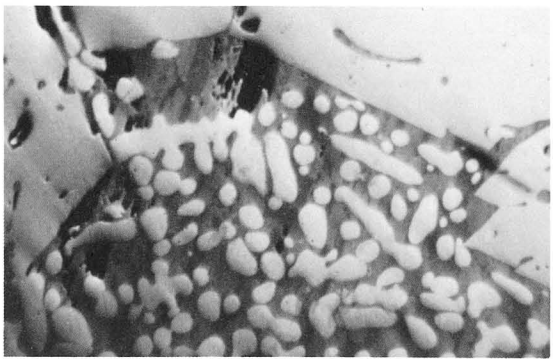


鬼ノ神山第3貝塚　1～6：ウミニナ，7・8：オキシジミ，9・10：シオフキ，11～14：マガキ

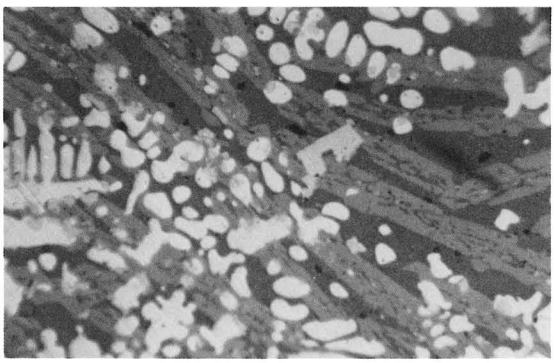


鬼ノ神山第5貝塚　1：ホンヤツメタガイ，2～5：ハマグリ，6～8：アサリ

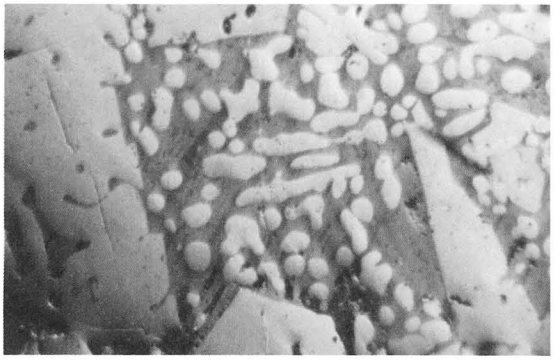
図版一七　鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅰ（X五〇〇）



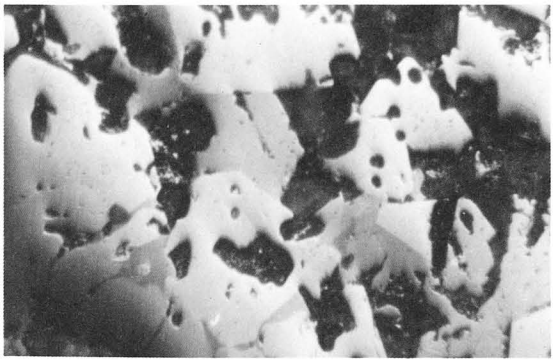
KF－1－a



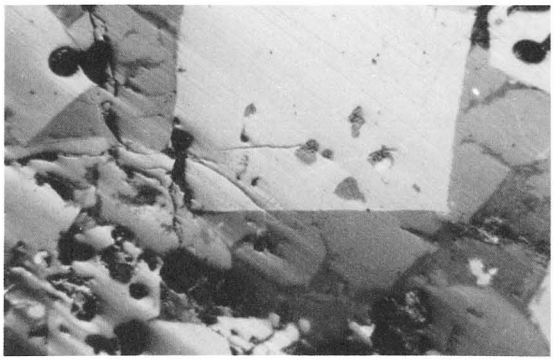
KF－1－b



KF－1－c

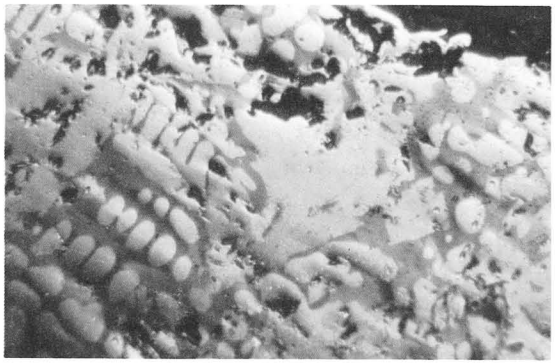


KF－1－d

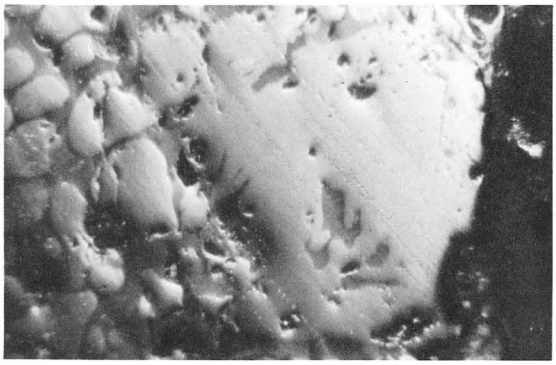


KF－2－a

KF－2－b

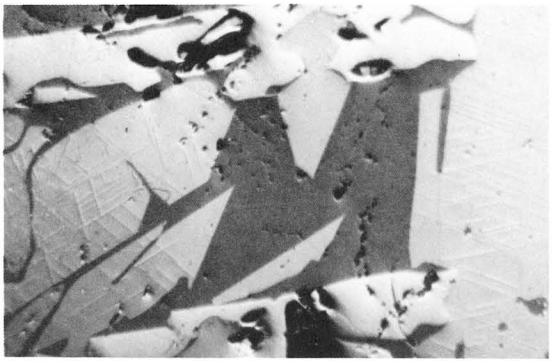


KF－3－a

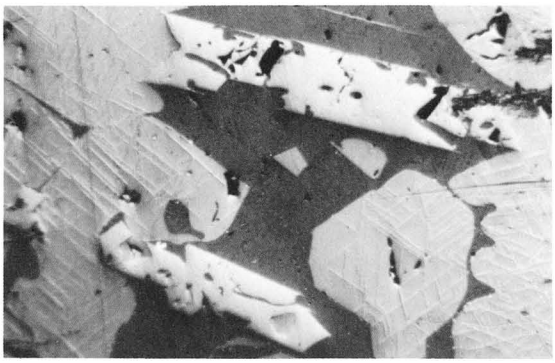


KF－3－b

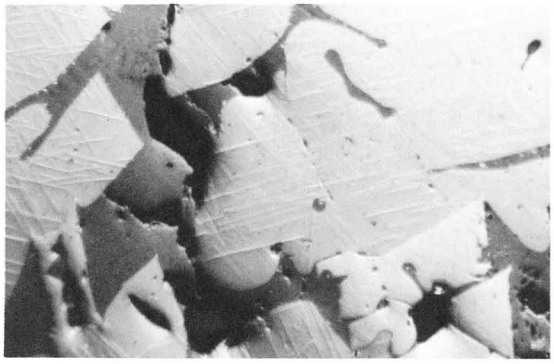
図版一八　鉄滓の鉱物顕微鏡組織Ⅱ（×五〇〇）



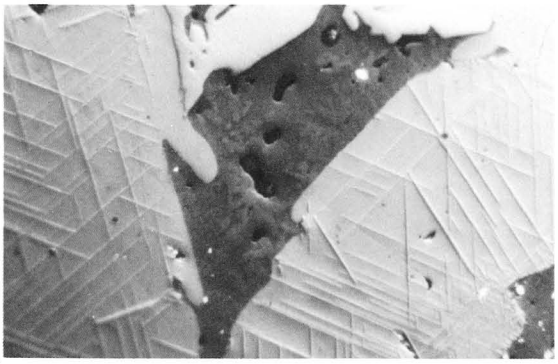
KF－4－a



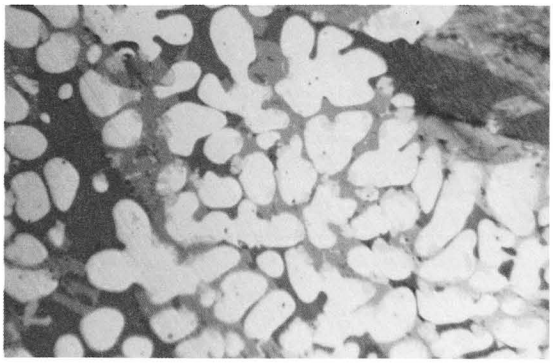
KF－4－b



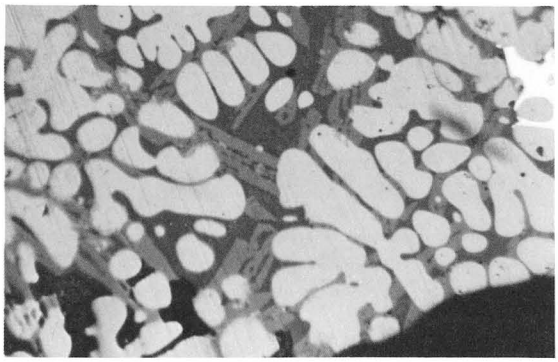
KF－4－c



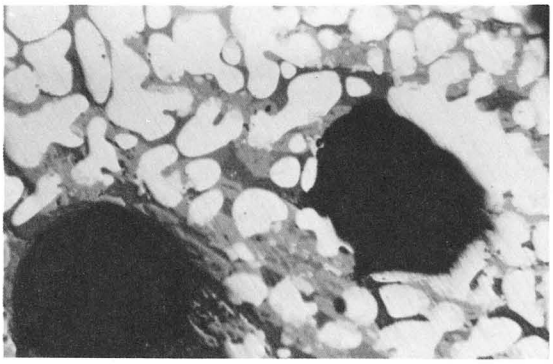
KF－4－d



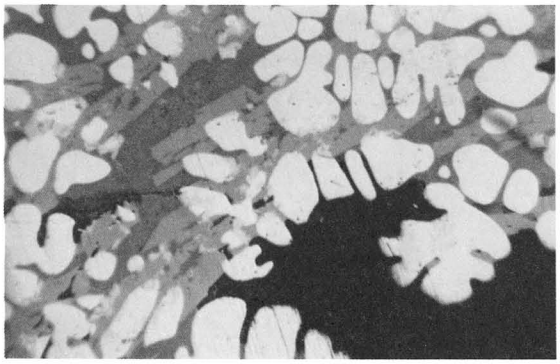
KF－5－a



KF－5－b



KF－5－c



KF－5－d

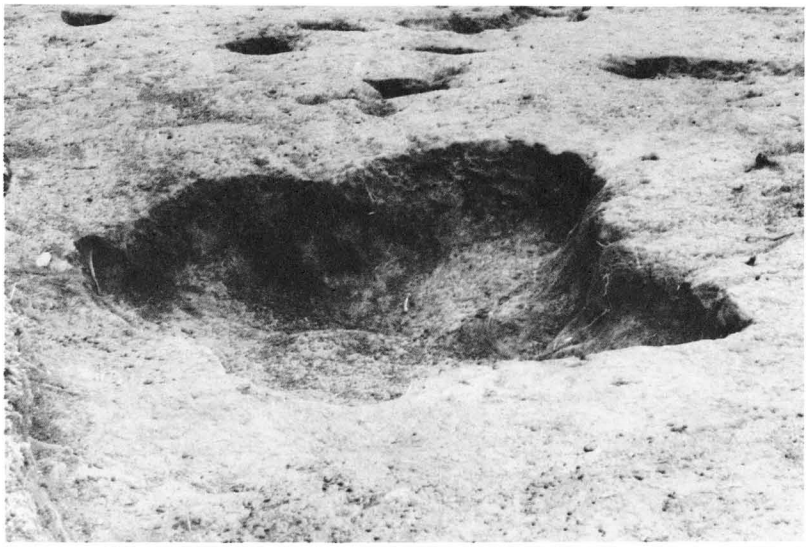
図版一九　野山遺跡全景

遠景

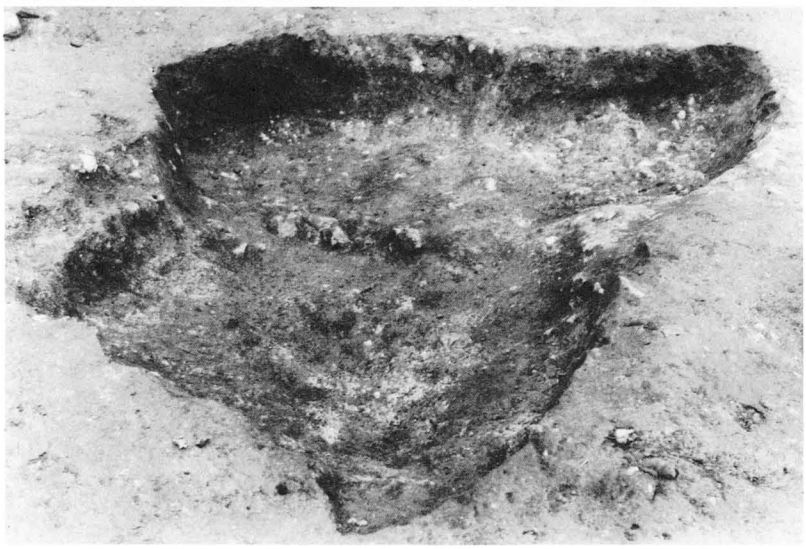
近景

図版二〇　野山遺跡発掘区全景

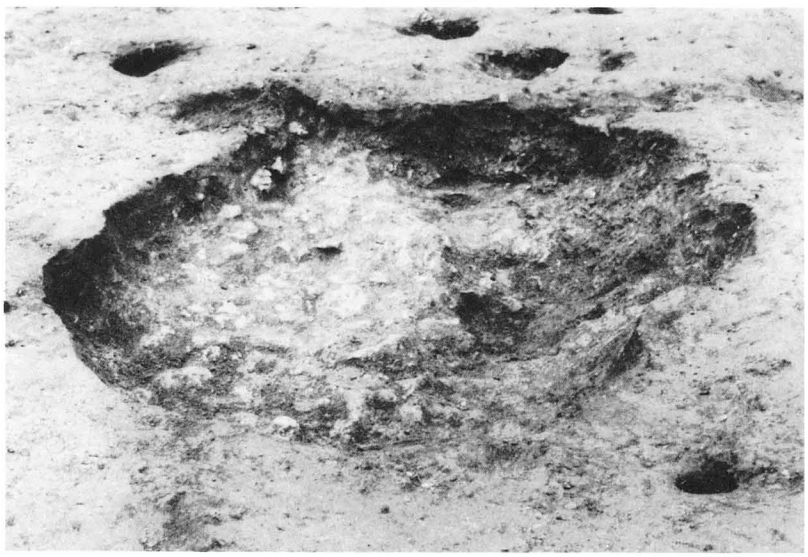
南西から望む



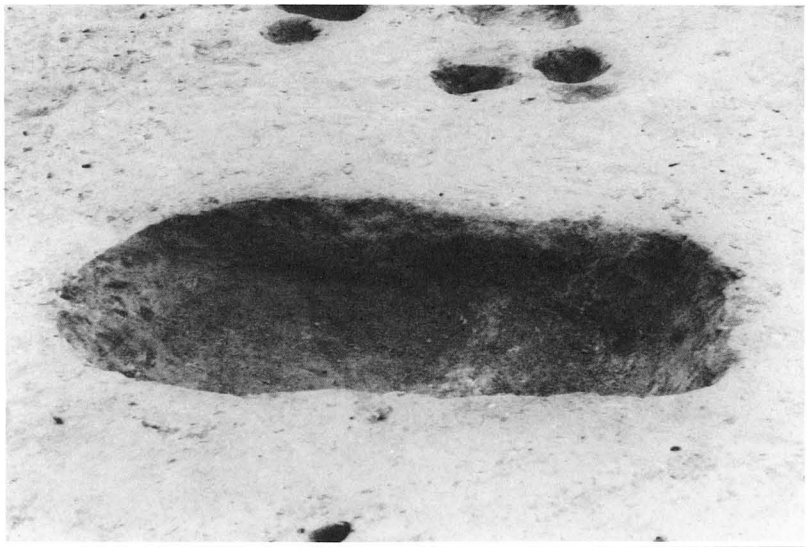
土 坑 1（北西から）



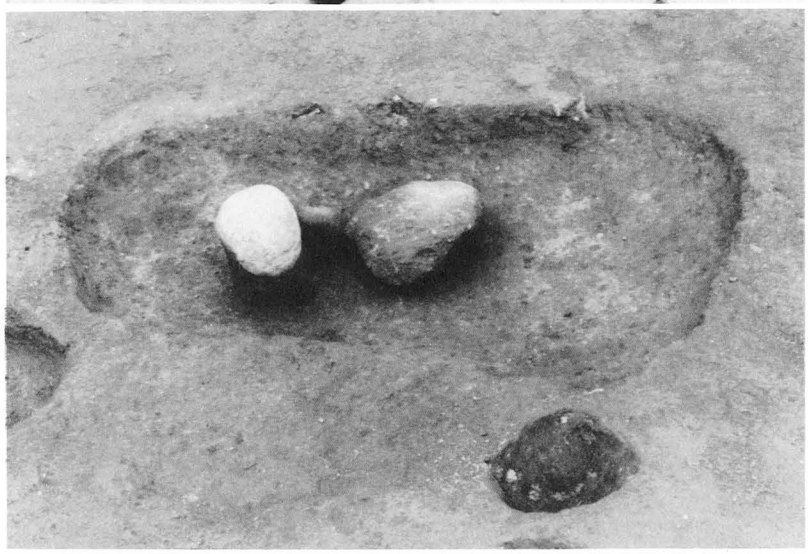
土 坑 2（南西から）



土 坑 4（南東から）



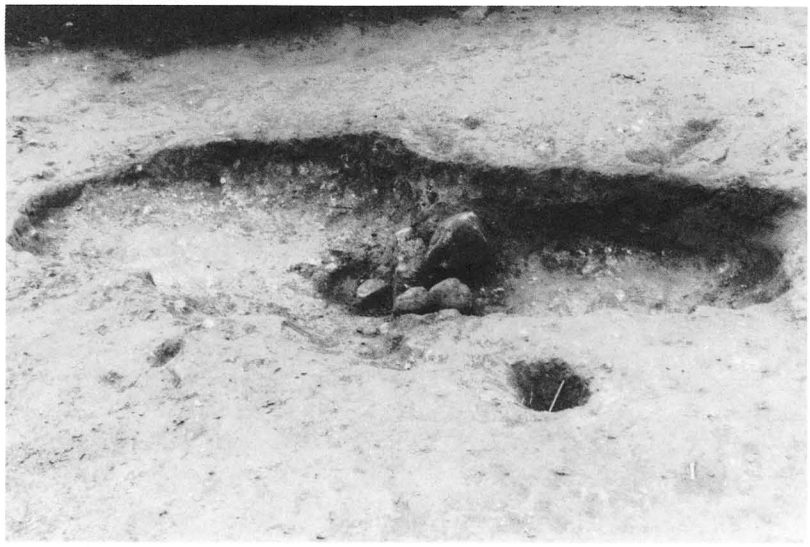
土 坑 5（北東から）



土 坑 6（南西から）

土 坑 7（西から）

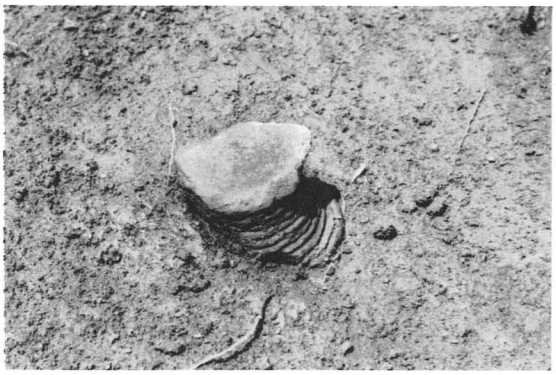
図版二三　土坑Ⅲ・その他



土坑8（東から）

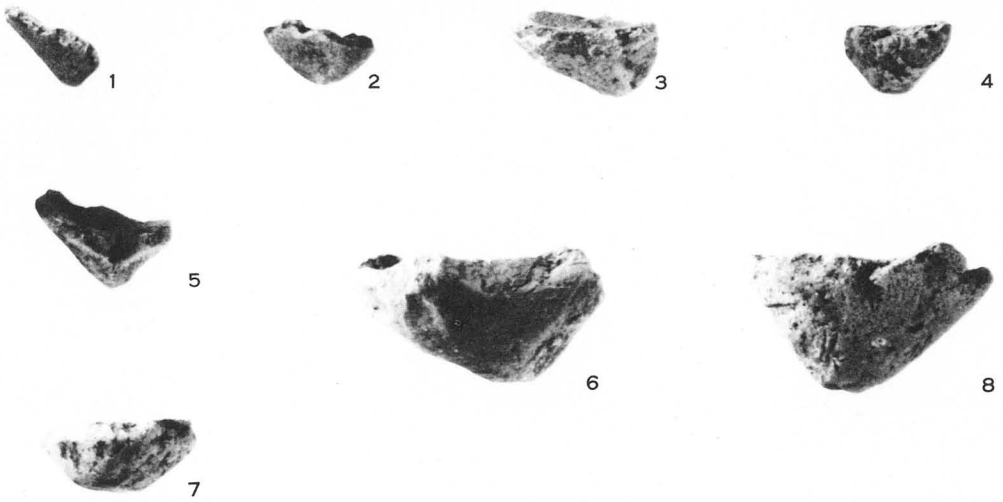
C4区集石（北東から）

F4区岩石の表出（南西から）

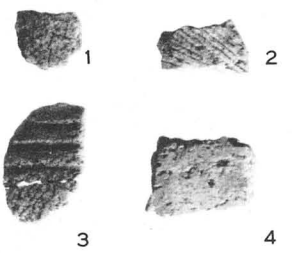


a　遺物出土状況　G 1 区　床面

土坑 1 内



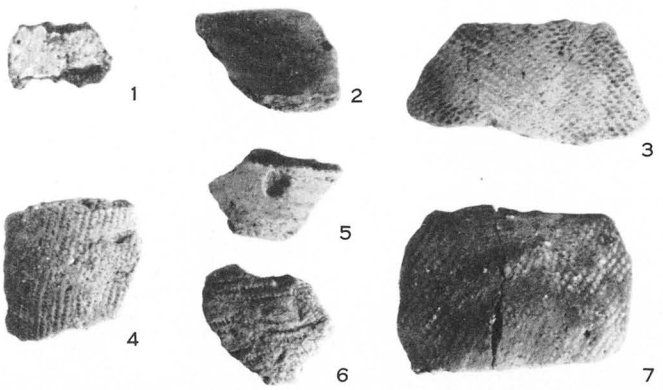
b　製塩土器底部（⅔）



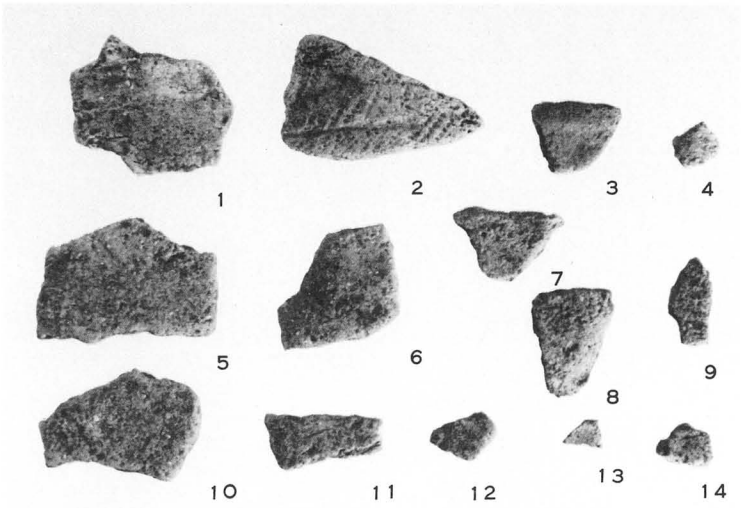
c　ピット内より出土

1. ピット　62　3. ピット 182
2. ピット 151　4. ピット 151

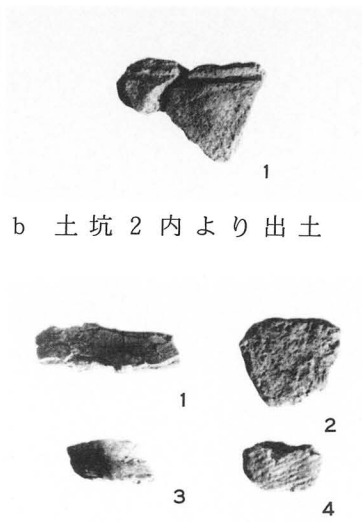
0　10CM



d　第Ⅲ層より出土

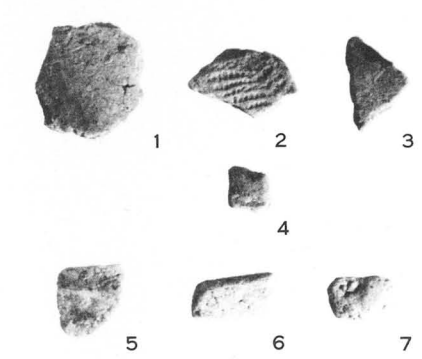


a　土坑1内より出土

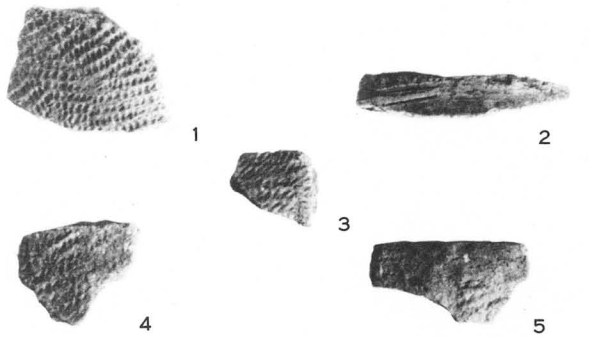


c　土坑5内より出土

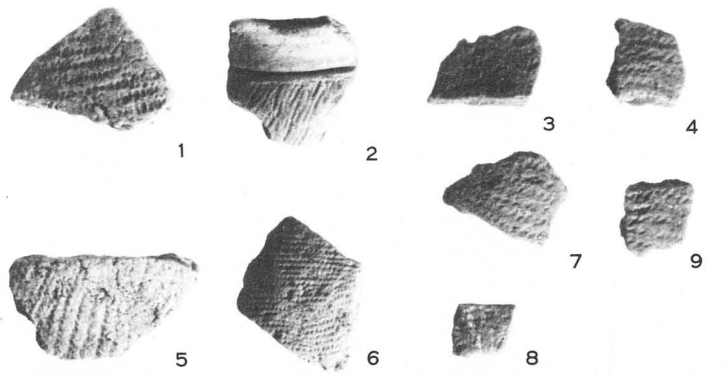
b　土坑2内より出土



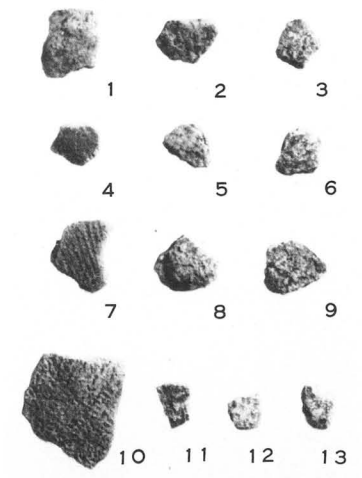
d　土坑6内より出土



e　土坑7内より出土



f　土坑8内より出土

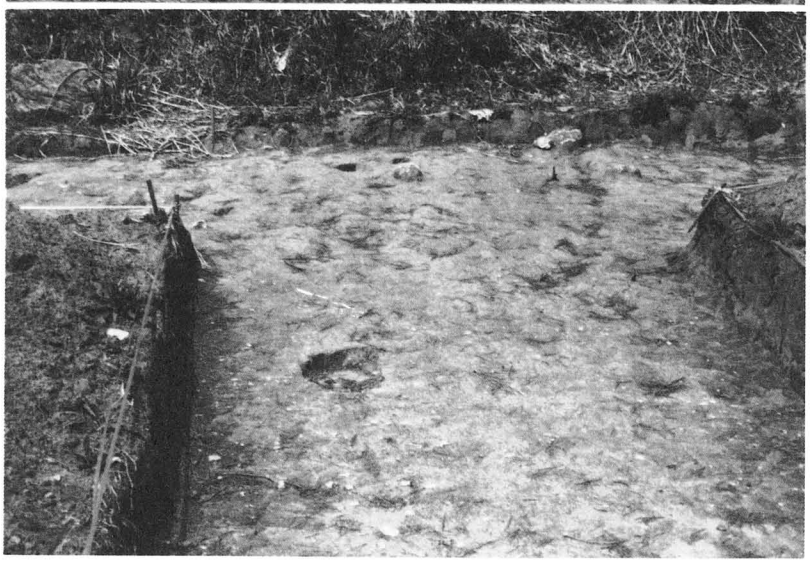


g　土坑9内より出土

図版二六　野山遺跡B地区

A地区から

南から



東から

七ヶ浜町文化財調査報告書

鬼ノ神山貝塚・野山遺跡

昭和57年３月31日　発行

発　行　宮城県七ヶ浜町教育委員会
(〒985) 宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮浜字丑谷辺5－1
TEL　02236(5)6451

印　刷　㈲平電子印刷所　美術写真印刷研究室
(〒970) 福島県いわき市平北白土字西ノ内13

1982